

ISライダー一夏

最弱無敗のストラトス

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

織斑一夏は誘拐された。

だが、ルクスに助けられる。そして一夏は、最高の騎士となり、仲間のために戦う！

「天つ才物理学者の桐生戦兎は、父さんのすすめでIS適正があるか検査をうける。そしたらなんとあつたのだ！そしてIS学園へと行くのだつた！」

「俺、如月ハヤトはクレア先輩の提案でIS適正を受けた。そしたらなんとIS適正があつた。だから、クレア先輩と同じIS学園へ行くのだつた。」

クロスオーバー作品

ハンドレッド

最弱無敗の神装機竜

魔装学園HxH

魔弾の王と戦姫（凍凍の雪姫）

仮面ライダー龍騎

仮面ライダービルド

仮面ライダーエグゼイド

天元突破グレンラガン（セリフのみ、もしかしたら機体も。出たとしても天元突破くらい。）

ストリートファイター

目 次

設定 ネタバレ注意！

第1章 ISライダー

プロローグ

第一話

第二話 部屋割りと強引な彼女

第三話 男達の無双

第四話 中国参上！

第五話 ミラーモンスター大量発生

第六話 心火を燃やして、ぶつ潰す！

第七話 タッグマッチ決め

第八話 タッグマッチ

第九話

第十話 ハーレムデート

第十一話 ↗臨海学校にそびえる悪く

第十二話 一夏の旅立ち 傷無の買い物

第13話 仮面ライダーとは サブ 五反田弾 オリジン

75

第14話 暴走？ナニソレオイシイノ？

第15話 一夏の帰還

第16話 平行世界のお土産

第16, 5話 また財団Xだよ… あ、そうだ！平行世界でアナ

ザーライダーを出そう！（迷案）

第20話 ハザードは止まる…（O w O ;）ウエ!?ソナノ!?

91

87

83

79

69

59

54

50

45

40

36

30

26

22

18

14

11

1

第二章 平行世界の一夏君

第17話 平行世界のI-S

第18話 専用機タツグマツチ（という名のオリ主（笑）との戦い）

一夏覚醒

第19話 僕達を誰だと思っている！

悪魔のプロローグ

正義と悪

最終章 遥か無限の彼方へと（詐欺）映画のネタバレ注意！

最終章 前編

最終章 中編

最終章 後編の一

164 149 135 125 122 118 110 102

設定 ネタバレ注意!

風間一夏

イギリスに行き、ルクスの元で生活している。一夏は昔、約束した女の子が三人いるとのこと。その三人はハーレムでもかまわないとのこと。

専用機

仮面ライダーナイト

能力はそのまんまだが、ファイナルベントが2つあり、1つがライダー・キック、もう1つが飛翔斬である。

ヒールベント『回復』

リフレクオーツベント『光の壁&反射』

アクセラベルベント『加速』

ソードベント『牙狼剣』(イメージ:牙狼の牙狼剣、鞘装備)

AP40000(サバイブ状態AP7000)

アドベント『魔導馬・轟天』

AP50000

ファイナルベント『烈火狼斬波』

AP60000(サバイブ状態AP9000)

ラビラビタンタンハザードさんからの特典として送られたもの。

烈火狼斬波は緑の炎で操られている、又は憑依されている人達を傷つけず操っているもの、又は憑依しているものだけを斬ることが出来る。

牙狼剣は持つ人物の意思が強ければ強いほど軽くなり、未熟、又は所有者では無い者には持つことも出来ない。そして怒りが強ければ切れ味や強度が高くなるが重くなり、憎しみに飲まれると黒くなりすべてを切り裂き、全てを燃やす。又、牙狼剣から牙狼斬馬剣と言う巨大な斬馬剣になる。魔導馬・轟天は攻撃よりも移動や走破性、防御力が高いのどどんな場所でも走れる馬。

(ラビラビタンタンハザードさんのメッセージ文から引用)
ヴィシュヌ・イサ・ギャラクシー

一夏のメインヒロインの一人。

仮面ライダーローラー

持つているフルボトルがダイヤフルボトルとジェットフルボトル。

↓仮面ライダープライムローラー

これもラビラビタンタンハザードさんからの特典として送られたもの。

僕も一度見たとき、「背中のマントってなに?」と思つてしまつた。

オニール・コメット、ファニール・コメット

一夏のメインヒロインの二人。

仮面ライダーエグゼイド マイティシスターーズXX

音声が原作と若干違い、音はコメット姉妹が担当。

ダブルアップの音声が、『私があなたで、お姉ちゃんが私!マイティ(マイティ)シスターーズ、ダブルエックス!』となる。

ルクス・アーカディア

世界観はISにそつていて。そしてイギリスの王女、リーズシャルテ・アテイスマーク(愛称はリーシャ)との婚約が決まつていて(どういうか、リーシャが勝手に決めて、さらに女王も悪のりした結果だが。)

まあ、婚約者はリーシャ合わせて9人いる。

クルルシファー、セリス、フィルフィ、ヘイズ、メル、ローザ、ソフイス、エーリル。

実は素手でISを圧倒できる最弱で最強の男。

専用機

バハムート

仮面ライダー龍騎

あとは仮面ライダー龍騎と一緒に。

桐生戦兎

仮面ライダービルドの設定とは違い、フルボトルは父さんが開発し、息子の将来のために使わせる。そして、記憶喪失はしていないが、顔は戦兎である。つまり、最初から佐藤太郎の顔である。

専用機

仮面ライダービルド

ハザードレベルはある。前は無いと言っていたが、この後の物語に矛盾が生じるのでハザードレベルをつけた。

如月ハヤト

婚約者はいないが、恋愛感情はあるのでそのうち誰かと付き合いだしそう。しかも一番はクレアかも。

↓今はクレアとエミリアの2人を恋人にしている。
フルボトルを使えば生身でISと戦える。

専用機

仮面ライダーグリスブリザード

設定はハザードレベルがないが、感情によつて強くなる。

↓仮面ライダータイガ

設定として、原作の仮面ライダー龍騎のタイガよりも強い。カードはコンフアインベントも持つている。そしてサバイブのカードも持つている。

飛騨傷無

正妻が千鳥ケ淵愛音あとは愛人（本人公認）あと、原作とは違い、ISの世界観なのでヒロイン全員いるから大変だろう。

今のこところはユリシアとグラベルがでてくる。

姉の飛弾怜俐は千冬と知り合いなのだが、今は絶縁しているとのこと（過去に一夏のことがあるため）。そしてこの姉、原作と同じで傷無を愛しまくるブラコンである。

（つてか、魔装学園の最終巻でなにやつてんの…どころか生徒会長みたいに権限乱用しそぎどころかヤバいだろ…）

専用機

仮面ライダーレーザーX

アナザートリロジー見に行つてかつこよかつたのでどつかで出そうとして傷無がいたから専用機にした。設定はゲーム病はとくにく、適正手術もしていない。

篠ノ之箒

一夏のことを心配していて今でも生きていると信じている。姉と

は距離をおいている。そして、風間一夏が織斑一夏だと確信している。

仮面ライダーブレイド

一応カードは全部持っているが、ジャックフォームしかなれない。（つまりまだ覚悟が決まっていない。）

その覚悟とは：

風間冬奈

一夏のことを慕っているお姉さん的な存在。一夏も信頼しているがその正体とは：

仮面ライダーブレイブ

レガシーゲーマー

ここでの説明はネタバレになるから…

神崎海人

謎の首相補佐官（ホテルおじさんとは違うから。）

ISライダーシステムを初めて作った人物であり、IS学園の講師を務めている。

疑似仮面ライダーオルタナティブ

意外に強い。わかんない人のために説明すると、本来の力ではなく、疑似的にISとして疑わせているため男でも変身出来る。ただ、相当の力が必要。

補足すると、ファイナルベントが交通事故と言われている。

疑似仮面ライダー・オルタナティブ・ゼロ

オルタナティブが使えなくなつたから（主に財団Xのせいで）プロトタイプ（の癖にこつちの方が強い）のオルタナティブ・ゼロを使う。カード、変身のしかたは原作と変わらず。

仮面ライダーG3—XX（ダブルエックス）

今度は平行世界のオリ主に壊された。ので、神崎いわく、「最強を使う」とのこと。

人間の、純粹な力で作られたライダーシステム。純粹な人間の力で作られたライダーシステムでは仮面ライダー最強。人間の力で作つたくせにチートライダーなのだ。

人間の最新のライダーシステムを駆使している。

海人いわく、「原点にして頂点」とのこと。

G 4 と G 3—X の改良型で、暴走せず、的確に敵を倒すことができる。

→どうでもいい。

容姿は仮面ライダー G 3—X とほぼ同じで左肩に G 3—XX と書いてある。

G M—0 1 スコーピオン

装弾数は 7 2 発で並列弾倉式。

右足に携行している。

後に弾薬が強化され、口径は 1 0 口径になった。

G G—0 2 サラマンダー

G M—0 1 と連結して使用するグレネードランチャーで破壊力は約 2 0 トン。装弾数は 3 発。

これによつて放たれるグレネードショットは一撃で戦車も粉々にする。

G S—0 3 デストロイヤー

超高周波振動ソード。

ブレード部を振動させ切断する。

右腕に装着して使用。

パワーを最大にして放つスーパー刃で敵を一刀両断する。

G A—0 4 アンタレス

右腕に装着して使用するアンカー。

ワイヤーで敵を捕縛するもの。

G X—0 5 ケルベロス

G 3—X 専用のガトリング式機銃。

特殊徹甲弾を 1 秒間に 3 0 発発射する。

高火力を誇り、携行の際はアタツシユモードをとり、暗証番号の入力で「解除シマス」の機械音声と共にガトリングモードへとへ変形し、射撃が可能となる。

弾倉一つあたりの装弾数は120発で、G3-Xは腰部に予備の弾倉を二つ装備している。明らかにそれ以上撃つているように見えるが気にしてはいけない。

→ここ重要

G Xランチャヤー

G X-05とGM-01（スコープオン）を連結させ、砲身の先にG X弾（ロケット弾頭）を装填する事で完成するロケットランチャヤー。

G3-X X最強の必殺技。

G K-06 ユニコーン

電磁コンバットナイフ。左腕の二の腕の部分に装着・携行している。

破壊力はデストロイマーの半分。

G3-X Xの特性上格闘戦はあまり行われないため、基本的には緊急時のサブウェポンとして運用される。

ガードアクセラーラー

ガードチエイサー（バイク）の起動キーを兼ねた左グリップ。

引き抜いて電磁警棒としても使用する事が可能で、G3-X Xの左太股部に装備できる。

多目的巡航ミサイル「ギガント」

4連装のミサイルランチャヤー。抜群の破壊力で敵を殲滅する。

→最悪の場合に使う。ヤバいときにはISの絶対防御を破つてしまう。

※ライダーシステムなどを使っているやつらは死なないが、だいたいの確率で強制変身解除されてしまう。

だから絶対殺すマンとか言われている。

ライダーキック

右足にエネルギーをまわし、キックする。このときのエネルギーは零落白夜のエネルギーを応用しているので、ISでも一発で修復不可能にしてしまう。

フローターウイング

そのままま。空とべる。

ドリル

説明？いらんな。

あと、仮面ライダーG—XXには裏コードがあり、それを使用すると格段に全性能がパワーアップする（この能力は海人と??が使える）

裏コードの解除のしかたは

アタツシユケースモードのGX—05のボタン、123で発動することができる（パスワードががばがばとは言つてはいけない。氷川さんもど忘れしてたし）。

あと、実弾装甲用のラファール・リヴィアイヴでさえもGX—05では意図も簡単にエネルギーを減らすことができる

ドリルは、ここぞというときを使う。

技名は：

実はこいつも神様転生で特典はIQ600と

『火事場の覚醒』。

最後にもう一つ、???がある。

昔、ひどいことをさせられて自分の大切な人が庇つて死んでしまつたからそれを二度と起こしたくないという思いでこの特典にした。???に関してはヤバいので。

世界観としてはIS学園がある、女しか動かせないのは原作と同じだが、例外の男が何人かいるのと、オリキヤラがいる。

そして何故か保健の先生にハンドレッドでてくるミハルさんがいる。

他の設定

仮面ライダー龍騎のミラーワールドは仮面ライダーウィザードの最終回のときのを使っている。つまり仮面ライダー龍騎などがいればミラーワールドに入れるということ。あと仮面ライダードラコンナイトの要素も使っている。それは後日（ネタバレになるから。）

超絶ネタバレ注意！

平行世界の織斑一夏

オリ主（厳密に言うとオリ主は悪くないが、そのヒロインズ）のせいで自殺しかけたが、檀黎斗により止められる（檀黎斗つてこんないい人だつけ？）。

仮面ライダーゲンム

檀黎斗からもらった力で戦う。

最悪の場合、

「グレードレベルゴッド」を使う。

平行世界の一夏のヒロイン

ヴァレンティナ・グリンカ・エスティス
魔弾の王と戦姫より登場。

ちゃんとエザンディスを持つている。

一夏のファースト幼馴染で、昔から愛している。

一夏が自殺しかけたときにエザンディスを使って助けようとしていた。

檀黎斗には感謝している。

実は生身で専用機十機くらいを相手にできる（＝I Sが枷になつてしまふ。）くらいのどチート女。

普段着の露出度が高すぎる。

エザンディス

大型の鎌で、瞬間移動ができる。

ただし、瞬間移動は小範囲でしか使えない。

ちやんとした構えをすると長距離を簡単に移動できる。

篠ノ之簫

ヴァレンティナと同じく、幼馴染。

ツンデレ。

バクスター グラファイト

簫はバグヴァイザーを使うことによりグラファイトになる」とができる。ただし、使いすぎるとバクスターになってしまう。（が、この設定は意味がない。）

更識楯無

一夏のヒロイン

原作そのまんまだけど、一夏のことを第一に考える。オリ主に何故か惚れない。

更識簫

一夏のヒロイン

一夏のことを最初から突き放していない。

あとは姉と同じ。

布仏本音

一夏のヒロイン

おつとりしてるけど、なんか鋭いところがある。

一夏のことをおりむと呼んでいる。

ティグルバルムド＝ヴォルン

ティグルは仮面ライダーカリス（たまに顔面だけ解除して戦う。だつて中世ファンタジーのせいで顔面解除しないとたまに名誉どーのこーでの言われるときがあるから。）で主にカリスマロードで戦う。ジョーカーではないが、瞬時に変身できる。

独自設定でカリスマロードはワイルドカリスになつていなければ、ワイルドカリスになつたときの武器形態で弓矢として使う。近接格闘はダガーとして使うが、あまり近接格闘しない（ただ下手というわけではない）。ヤバいことにこいつは弓矢、ダガー以外の武器が全く使えない。（原作では弓矢しかつかえない。）

リュドミラ＝ルリエ

ティグルのヒロイン。愛称はミラ。
ヴァレンティナと同じく努力チート。
ツンデレ。でも積極的。

第1章 ISライダー

プロローグ

俺、織斑一夏はドイツで誘拐された。ここはほとんど知られていない。何せ昔に廃墟とかした建物だからだ。だから助けにも来ない。何故なら俺は出来損ないのやつだからだ。

「そろそろ織斑千冬が決勝に出るころだな。」

「こないぞ、絶対に。」

「わからないな。あいつは家族想いだと聞いているからな。」しかし、

『織斑千冬が現れました！』

「あいつ！決勝でんじやねえーか！？」

「だから言つたろ。」

「仕方がない。証拠隠滅だ、死ね。」

そして、銃が一夏に突きつけられた。

「そう言うと思つたよ。」

そして、トリガーガがひかれた…

が、撃たれなかつた。

「何で!?撃てないの!？」

その銃を見れば、先端が無くなっていたのだ。

「ごめん、一夏。遅れた。」

「ルクス、さん?」

入り口にはルクス・アーカデイアが立つていたのだ。

何故、ルクスがいるのか。それは遡ること三年前、ルクスと一夏は偶々公園で会つていたのだ。ルクスはイギリスに住んでいて、日本に遊びに来ていたのだ。そこで知り合つたのが始まりだつた。

そして仲良くなつたのだ。ルクスがこここの場所を知れた理由はイギリスの大統領の護衛をしていたからだ。そして一夏が誘拐されたという話を聞いたからだ。

「さてと、一夏を放してもらおうか。」

「男が何言つてんだよ！IS動かせないくせに！」

そしてラファール・リヴァイブを起動した。

「終わりだあ！」

「…クイックドロウ」

「な!?私の武器が!？」

斬られて爆発した。

「何故、男がIS使える!?」

「僕も知らないよ。まあ、いいか。」

そしてドイツの警察が到着し、拘束された。

「すみません、ルクスさん。」

「大丈夫だから、一夏。」

「ですが、俺はもう…家に帰ることは…」

「うん、だから僕の家に連れていくよ。」

「…！はい！」

そして、モンド・クロツソが終わり、一夏はイギリスへ行つた。

一方、織斑家では、

「あの出来損ないは？」

「誘拐されて、死んだんじゃない？」

「まあ、いいか。とりあえずこれから家事はお前に任せる。私はドイツで指導しなければいけないからな。…頼んだぞ、秋人。」

「まかしてよ、千冬姉。」

この姉弟、最低である。

そして、二年後、

「リーシャ様？」

「ルクス、お前との結婚を考えているがその話は三年後でいいか？」

「いいんですけど、三年の間に何かあるのですか？」

「IS学園へ行こうと思う。」

「わかりました。」

「そして、一夏の専用機だが、どうしようか迷つていてる。」

「そこは一夏の騎士のような雰囲気があるからナイトという名前で、そして外見は全身装甲の物でいいかと思います。」

「そうか、そして I S 学園にいく者はルクスとセリスとファイルフィと
ヘイズとエーリルだ。」

「なんでこのメンバーですか？」

「今動けるのがこのメンバーだからだ。」

「確かに、今色々と大変ですかね…」

「あれはお前のせいじゃないと何回も言つてはいるだろう。皆も満足し
ているようだし。」

「そうですね。」

「よろしく頼むぞ、ルクス。」

「はい！」

第一話

「ここがＩＳ学園か。」

「うーん、なんか：税金の無駄遣いのような…」

「仕方ないな、ＩＳは今世界で最強の兵器だからパイロットになりそうな人は優遇されるからな。」

そう言うのは飛騨傷無。彼もＩＳを動かせる男の一人である。

「そしてこのＩＳのせいで女尊男卑が始まつたってわけだな。」

そう言つたのは如月ハヤト。ＩＳを動かせる男の一人である。

「さてと。んじゃ、入りますか！」

そしてホームルーム。

「このクラスの副担任の山田摩耶です。よろしくお願ひします。」

そして自己紹介が始まり、

「風間君、風間一夏君！」

「あ、はい！」

「自己紹介だけできる？」

「わかりました。」

そして、

「風間一夏です。アイングラム商会の企業代表です。好きなものは戦闘訓練、遊ぶことです。よろしくお願ひします。」

「如月ハヤトです。ワルスラーン企業代表です。好きなものはご飯です。よろしくお願ひします。」

「飛騨傷無です。アタラシア企業代表です。好きなものは物いじりです。よろしくお願ひします。」

「ルクス・アーカディアです。一夏と同じくアイングラム商会の企業代表です。好きなことは今のところはありません。よろしくお願ひします。」

そして、

「諸君、このクラスの担任の織斑千冬だ。三年間のうちに鍛えあげる。

『いいな！』

(つたく、なんでこんなに軍隊となつてゐるんだ。しかも本性を知らないのにな。)

と一夏は内心思つた。

「あ、そういうえばあと二人男性操縦者がくるんでした！入つてくれさい。」

「天つ才物理学者の桐生戦兎でえーす！こつちはバカの万丈龍我です！」

「バカとはなんだ！せめて筋肉つけろ！」

「まあ、よろしくお願ひします！」

そして放課、

「一夏？」

「誰？」

篠ノ之箒が話しかけてきた。

「私を覚えていないのか？」

「ごめんなさい、誰かわからぬい。」

「そうか…すまなかつた。」

(ごめんな、箒…)

「一夏！」

「冬奈姉、どうかしたの？」

「…眠い。」

「はあ、言うと思つた。」

しばらく膝枕してやつたとさ。

その数秒後、

「如月ハヤト！」

「クレア先輩!？」

抱きついてきた。

「もう、そんなに驚かなくていいじゃないですか。」

「でも、ここは公衆の前で…」

「いいのですわ！ハヤトと会えなかつたぶん、こうしてあげますわ！」

「えー!?」

とまあ、ハヤトはこうなつていたのだ。

「ハヤトってさ、モテモテなのね。」

「傷無、お前も人のこと言えないだろ。」

「あ、そつか。」

「ルクス！」

「ルーちゃん。」

「ルクス君！」

「ルクス兄（にい）！」

「セリス先輩、フィーちゃん、エーリル、ヘイズ。」

ルクスの婚約者のセリステイア・ラルグ里斯と、フィルフイ・アイングラム、エーリル、ヘイズだ。クラスはバラバラだが、放課には集まるみたいだ。

「ルクス兄。オレさ、クラス代表になろうかと思う。」

「そつか。それで、クラス代表ってなに？」

「まあ、簡単に言えば雑用することと、クラス決定戦に出ることだろ？」

「そうだね、多分あつている。」

「そつか、ありがとう。」

「ルクス君、このあとお昼は皆で食べよう！」

「そうだね。楽しいし、にぎやかだしね！」

「うん！」

飛騨傷無はなどと、

「傷無、調子はどう？」

「おう、なんとか大丈夫だよ、愛音。」

「きつずなー！会いたかったよ!!」

「ユリシア、廊下ではしゃぐな。」

「その、私も…会いたかった…。」

「俺もだ、グラベル。」

「む…、正妻は私よー！」

「でも恋人でも、一番にはなれる！」

「だから、頑張る！」

「ちよ、待てつてば…はあ、大体こうなるよな…。」

そして、万丈と戦兎は「

「万丈、お前の専用機はクローズだ。」

「わかつたぜ、戦兎。」

そしてチャイムがなり、二時間目の授業が始まつた。

そしたら、

「あ、そういうえばクラス代表を決めなきやな。」
という一言により

女子が暴走するはめになつた。

「私は一夏君を！」

「それじゃあ、ルクスさんを！」

「んじやあ、龍（ry）

「それなら戦（ry）

テンプレとかした推薦合戦、だが、やつぱりこいつがいた。

「おいおいおい!?俺が一番強いんだぜ！俺がクラス代表だろ！」

邪な笑みを作つている秋人がいた。

（くつくつく、これでこいつらを倒してこいつらの女共を手に入れれる
！）

「秋人よく言つた！一週間後、トーナメントで行う。そして勝つたものに秋人と戦わせる！」

（ふーん、秋人優先なんだ～）
と思つた一夏であつた。

第二話 部屋割りと強引な彼女

「えーと、あなた達には今日から寮に入ることになつてゐるんです。」「はい、聞いてあります。」

「話が早くてなによりです。そして、風間君は一人部屋で、如月君は相部屋で、ルクス君は五人部屋で、飛驒君は四人部屋です。桐生君と万丈君は相部屋です。」

「わかりました。」

「…俺なんかした？」

「大丈夫だ、問題ない。」

「なんで俺だけ？」

「うーん、部屋にいけばわかるんじやない？」

何故か事情を知つてそうな顔をした傷無とルクスがいた。
その移動途中、セシリリアと会つた。

「ルクス様、お久しぶりです。」

「元気にしてた？」

「はい、ルクス様のおかげで両親が助かつたので。」

「ううん、あれは本当に大変だつたからね。」

そう、セシリリアの両親は陰謀に巻き込まれ、電車での事故で死ぬと
こだつた。だが、ルクス達が助けたので事なきを得たのだ。

「つて、そういうえば代表候補生だつたけど、クラスはどう？」

「ええ、3組のクラス代表になりました。」

「そつか、こつちは大変になつたよ…。」

「そうなのですか、大変ですね。」

そして、寮、ルクスの部屋では…：

「ルーちゃん、遅い。」

「ごめん、ちよつと話してた。」

「そうですか、わかりました。」

「ルクス兄、とりあえず飯食おうぜ。」

「そうだね、食べに行こうか。」

「僕もお腹すいたよ。」

「僕もだよ。」

まあ、傷無は、

「あ、傷無！」

「ただいまー！」

「おかげり、傷無。」

「とりあえずご飯にしようつか。」

「そうですね。」

一夏は一人なので飛ばします。

「ウソダンドンドコドーン!?」

だが私は謝らない。

まあ、戦兎と万丈も飛ばします。

「オンドウルルラギツタンスカ!?」

もちろんさー

だが、一夏、ハヤト、ルクスのこえは別の部屋なのにハモつていた。
「「さてと、くついたかな? ハヤト。」」

つてなわけで、ハヤトと…クレアの部屋である。

コンコン「すいませーん、この部屋の住人になつた如月ハヤトです。」

「…入つてください。」

「失礼しま…す?」

「その…ハヤト…」

「何でしようが、クレア先輩?」

「その…会つてから沢山の時間が過たのですが…いつになつたら付き合つてくれるんですか?」

「…正直さ、怖い。クレア先輩と付き合つても長続きしなさそうで、夫うれそうで…」

「私はつ! そんなことしません! フリたくもありませんし、このまま結婚も考へて いるんです!」

「え? 結婚…?」

「はつ! つい、先走つてしましましたわ…」

「俺は…いい、ですよ…、クレア先輩がいいなら…」

「!? ハヤトッ！」

抱きついて…キスしてきた。

「ん!? んんん…」

「んっ、ぷはっ…、どうでした？ キスは？ 最も、ハヤトは昔も私と近親をしましたけど？」

「クレア、先輩…。」

そのあとは、ご想像に任せると…わけにはいかないや。一線は越えなかつたからね。

さて、一週間後、トーナメントである…が、あいつのことだからこつちも仕掛けた。

「何？ 風間が不戦勝だと？」

「はい。何か、全員が辞退したので。」

「まあいい。きっと秋人の力に怖じ気づいたんだな。」

「それはどうでしょう？」

「なんだ？」

「織斑先生、秋人は弱いですよ。ISが強いけれど。」

「お前は、風間姉（あね）か。」

「ええ。以後お見知りおきを。あ、そういうえば人集めて乱入するのはよくないですよ。どうなつても知らないので。」

「ふつ、そうか。」

その織斑千冬の顔には影の笑みが浮かんでいた。

そしてアリーナでは。

「一夏、頼まれたことやつてきたぞ。多分あの感じじや、お前の思った通りだな。」

「最悪だ、まさかこんなことを許す学校だつたなんてな…」

「戦兎、俺達も出るぞ。」

「いや、まずは様子見だ。合図がきたらアリーナへ出る。」

「皆もだ、いいな。」

「おう！」

「了解だ！」

「わかつた。」

そして、一夏は外へ出た。

「なんだ？ 生身かよ！」

「いや、ちゃんとあるさ。」

そして、カードデッキをだし、鏡を投げる。そして鏡にカードを映す。するとベルトが巻かれ、ポーズを決めて、「変身！」

I Sライダーになつた。

「ふーん、防御力弱そ（笑）。さて、皆、出て来て！」

そしたらなんか沢山の女子生徒が I Sを纏つて出て來た。

「だろうと思った。よし、全員、出てこい！」

そしたら鏡から男女五人が出でくると同時に、

『『『a r e y o u r e a d y?』』』

『ギリギリチャンバラ！』

『『『変身！』』』

『ガシャツット！バグルアップ！』

『W a k e u p b u r n i n g ! G e t C R O S S — Z
R A G O N ! Y e a h !』

『鋼のムーンサルト！ラビットタンク！イエーイ！』

『ギリ！ギリ！ギリ！ギリ！チャンバラ！』

『激凍心火！グリスブリザード！ガキガキガキガキ！』

これで男の I Sライダーが全員集まつた。

「勝利の法則は、決まつた！」

「今の俺は、負ける気がしねえ！」

「心火を燃やして、ぶつ潰す！」

「乗りに乗つてるぜ！」

「つしゃあ！」

「いくぜ、皆！」

『『『『『おう！』』』』』

それに一瞬怖じ気づいた秋人が、

「数で当たれ！そうすれば大丈夫だ！」

自分や女どもを鼓舞するように声を出した。

第三話 男達の無双

「俺はもう、生きていく資格はないのか…」

平行世界の一夏はオリ主に自分を否定され、零落白夜が危険なこと身をもつて思い知られ、そして、ヒロインから裏切られるという悲惨な状態になり、更に追い討ちをかけるように篠ノ之東が殺そうとしてきたり、もう一夏の心はボトボトだった。そして今、自殺しようとしていた。だが、

「待ちたまえ！」

そこになんか神?のような人が現れた。

「貴方は、一体…」

「私は檀黎斗。神の才能を持つ人間さ。」

「無関係な俺に、なん用ですか…。」

「君に力を与えようと思つて、このガシャットを届けに来たのさあ！」

そこには、ゲームドライバーと、なんか神のガシャットがあつた。「さてと、君にはこの力になれてもうからね。簡単に言えば、『さあ、実験を始めようか。』かな?」

「！はい！」

そして平行世界の一夏の特訓が始まった。

そして元の世界。

『ヒツパレー！』

「おりやあ！」

『スマッショーヒット！』

「きやあー！」

『ボルテックブレイク！』

挿したボトルは海賊ボトル！

「ぎゅいんぎゅいんのずどどどどど…」

「うわあああああ！」

『ストライクベント』

「はあ！」

「ウワアアアアア！」

（ん？ ダデイバナサーンがいたような…？ ま、 いつか。）

『ガシャツト！ キメ技！』

『ギリギリ！ クリティカルファイニッシュユ！』

「おらよ！」

「いやああ！」

『シングルアイス！ ready go！』

『グレイシャルアタック！』

「セイヤー！」

「ギャアアー！」

いろいろとカオスでした。

そしてそこにいた一夏と秋人はと言ふと、
「何で籌がそつちにいるの？」

「ただ私は好きで一夏についているだけだ。」

「ふーん。まあ、勝つたらこつちに来てね♪」

「お前の洗脳は効かないぞ。あと、周りを見る。」

そこにはへ口へ口の女子生徒が転がっていた。

「なんで!?俺がISを強化したって言うのに!?」

「終わりだ。決着をつけようか。」

「へっ、終わらせるかよ！」

そして零落白夜を起動する。

「俺の機体は白式！ 最強のISさ！」

「そーゆーのは、ルクスさんと戦つてからにしてくださいね。」

『ソードベント』

そして、一夏は剣を召喚させて、

「おりやあ！」

「はあ！」

凄絶な打ち合いをし始めた。

「く、そ。こんなに強いのかよ。」

「やつぱりこの力は凄いなあ！ これで止めだ！ せいぜい、あの世で
祈っているんだな。次はもう生き返らない、とね！」

『零落白夜、フルバースト』

「…ふつ、そういうセリフは勝つてからにしろよ。」

『ファイナルベント』

ダークウイングが出て来て背中にウイングが着き、マントになる。
そして、空中に浮き、マントが体に巻き付く。

『飛翔斬！』

零落白夜との打ち合いに勝つた。

『シールドエネルギーエンブティ』

「え？ 何で、何で負けたんだ！」

「お前が油断したからだ。」

そういつて一夏は変身を解除させる。

「そこまでだ！」

そこに織斑千冬が乱入する。

「この試合は無効だ。秋人が負けるはずなどない！」

「織斑、先生…。」

「すまない。もつと早く来ていれば…」

「出て来たな、織斑千冬！」

「お前は、篠ノ之箒！」

箒はカードをバックルに入れ、腰につけながらこう言う。

「織斑千冬、お前は私が倒す。変身！」

『ターンアップ』

仮面ライダーブレイドになつた。

「そんなもので倒せるのか！」

織斑千冬は打鉄を纏つた。だが、汎用ISとISライダーの差は全くの次元で、

「くそ！ 何故こんなにおされている!?」

「当たり前だ！ お前はただのくそ人間だからだ！」

カード一枚だし、スラッシュする。

『サンダー、スラッシュ。ライトニングスラッシュ』

『ウエー………イ！』

「うああああああ！」

織斑千冬は戦闘不能になつた。

「千冬姉!?

「お前らは、単なる雑魚だつた、つてわけだ。」

「く、そ…」

「一人はそこで氣絶した。

「…筈にオンドウル語は似合わないな。」

「私もそう思つた。」

「ふふつ、面白いことになつてきたね、一夏君。さてと、僕達はどうするの?」

「うーん、どうしようか…」
「決めとこうよ…」

謎の男二人が、ビルのような高さからアリーナを見ていた。

一方、外では、
「ここがＩＳ学園ね…。秋人、会つたら灰にしてあげるわ。」

また、別の方向からも、

「お兄ちゃん、大丈夫かな?」

「あいつなら大丈夫でしょ、そんじやそこらの輩でも倒せるし。」

「ところでお姉ちゃん、場所どこ?」

「えつとね…」

なんかものすごいことになりましたとさ。

次の日、

「クラス代表は織斑秋人君になりましたー!」

「大丈夫かな、フリー・パス?」

「多分無理かもね。」

「ウソーン」

「ファイト!」

そのあと、一夏やルクス、ハヤト、傷無は女子の陰謀に巻き込まれ、お菓子を作られたとさ。そのときの女子の顔が絶望でいっぱいだつたのはあえて伏せておく。

第四話 中國參上！

「そいや、2組に中國から転校生が来たらしいよ。」

「あ、ここにも一週間後二人転校生来るつて。」

「そうなの？」

「うん、そうちらしい。」

「あれ？ 一夏？ どうしたの？」

「あ、いや、中国つていつたら友達を思い出してな…。」

⋮俺の後を追うように自殺したと聞いたがな。

そう一夏は言おうとしたが、止めた。何故なら

「2組の転校生、スマートブレイン企業代表の鳳鈴音よ！」

目の前にその死んだはずの鈴がいたからだ。

「スマートブレインって科学薬品作つている？」

「それ違うスマートブレインだから！」

※シン・ゴジラの小ネタです。

「で、一夏はどう？」

「ここにいるぞ。」

「!? 一夏！」

抱きついてきた。

「会いたかったよ、一夏あゝ（泣）」

「俺は織斑一夏じやねえぞ。」

「ううん、一夏だよ。ね、そうでしょ。筈。」

「ああ、こいつは元織斑一夏だ。」

「え？ なんでバレたの？」

「一夏つてさ、嘘は下手なんだよね。」

「昔つからそうだぞ。一夏は一人でどうにかしようとして、自分だけ傷つく。それがどんだけ私達を悲しませたのか…。考えて欲しかった。」

「すまん。鈴、筈。あと、鈴は教室に戻つたほうがいい。」

「わかつたわ。」

なんか、とりあえずクラス代表は一夏になつた。

「嫌な予感しかしねえ…」

「仕方ないよ、一夏。」

「さてと、飯でも食いますか。」

そして食堂

「一夏ー！こっちー！」

「あいよー。」

「んで、なんで生きてんの？」

「ひど!? それないでしょ!?」

「だつてショックだつたから。」

「まあ、一度死んだわ。でも、オルフェノクとして転生した。つてことかしら?」

「多分そうなるかもね…。」

「ルクスさん?」

「人間は稀に死んだときオルフェノクとして転生する。又はオルフェノクに殺されて転生する。確かこの2つだつたような…」

「ああ。つまり鳳鈴音はオリジナルのオルフェノクということだな。」「え!? 何故ここに首相補佐官が!?」

「ん? 一夏君、私がそんなにここにいるのがおかしいのかね?」

彼は神崎海人。首相補佐官である。そして、ISライダーシステムを初めて作ったものである。

「ここに来た理由は渡したいものと、あとここに講師を務めろと言わされたからだ。」

「えええええ!?」

「可笑しいでしょ!?」

「いくらなんでも男だからって…」

「まあ、そこはおいといて。そしてルクス君と一夏君に渡したい物があつてね、このカードだよ。」

その一枚のカードは鳥の羽が左右対称に描かれていた。

「このカードはピンチになつたら使いなさい。あと、ミラーモンスターがそろそろ活発しそうになつてゐる。もしかしたらここも襲われるかもしれない。十分に注意したまえ。」

「わかりました。」

「あと、ハヤト君。君のＩＳライダーシステムはやっぱり君には合っていないような気がするんだ。」

「そうですよね、やっぱりですか。」

どうやらハヤトは感じていたようだ。

「その代わりにこのカードデッキを渡しに来た。」

そのカードデッキには虎のようなものが描かれていた。

「これを君に。あと一人は、もう渡してある。」

「誰ですか？」

「それはわかるかもしれないな。」

「え？」

「とりあえず時間だ。私はこれで失礼しよう。」

そして海人が職員室に戻つていった。

「さてと、クラス代表対抗戦か。」

「多分優勝は無理かな…？」

「出来るでしょ、一夏なら。」

「ルクスさん、それは周りのクラスを見てから言つてくださいよ。」

「あ、しまつた…」

「専用機持ち多いんだよね…。」

「さて、明後日の対抗戦の準備しますか。」

夕焼けの寮で一人の少女がその手に持つていてる物を見つめていた。

『守りたい人がいるなら、それで守ればいいじゃないか。』

その言葉と共に渡された緑色で牛のようなものが描かれていたカードデッキを見ていた。

「ハヤト、私も貴方と共にいたい。足手まといにはなりませんから。」

その言葉と顔には決意があつた。

「さてと、俺はどうしようかなつと、ヤベ！」

そこにはミラーモンスターに襲われている少女がいた。

「やああ！」

具現化した剣で斬つた。

「大丈夫か？」

「ええ、ありがとうございます。」

「鏡には気を付けろよな。」

「はい。」

「…最近、妙に騒がしいんだよな…。」

「どうかしたの？」

「ああ、×達か。」

そこには二人の青年がやつてきた。

その青年は事情を話した。

「ミラーモンスターが活発してる？」

「そうなんだ。だからI S 学園とは違い、助けれない一般人を助けて
いる。」

「僕達も手伝うよ。」

「ありがとう、助かるよ。」

「ヒーローは助け合いつてね。誰かいつてたよ。」

「さて、次の場所に移動しようか。」

「そうだな。」

そしてその青年達三人は飛び跳ねてどつかへ行つた。

第五話 ミラー・モンスター大量発生

さて、組み合わせだが、

五組ＶＳ三組

四組ＶＳ二組

抽選でシードが一組になつた。

「さてと。んじゃ、まずは専用機のない五組とセシリ亞の三組だな。」
なんか五組のクラス代表は女尊男卑座がヤバいらしい。

「さあ、試合が始まるぜ。」

「お、そうなのか？」

「確かセシリ亞の初陣だつけ？」

「あー、ISライダー・システム完成形1号のギャレンか。」

「ああ。確かコンボだつけ？」

「うん。カードの効果であつたね。」

「完成形だからファイナルベントよりも強いんだよね。」

「そして相手は…」

「マジでうざいやつとは聞いたな。」

「セシリ亞は勝てるよな？」

「あれのISライダー・システムは思いにより強くなるから大丈夫だと
思う。」

「どうとか海人、新しいISライダー・システムって何なの？」

「ああ。新しくないけど強いやつならあるぞ。」

「どういうやつなんだ？」

「G3XっていうISライダー・システムだが、適合者がいなくてな…」

「まあ、そのうち見つかるだろ。」

「だな。」

「あ、イクサは？」

「もう見つかったよ。確か…、誰だつけ？」

「おい！」

「そこ重要だよ！」

「俺は覚えている。確か紅音也だつた。」

「あれ？猿渡一海じゃなかつた？」

「ドルヲタ？そんなの知らないな！」

「酷いよ！？」

「まあ、試合始まるぞ。」

アリーナ

「セシリ亞・オルコット、貴方は女が一番だと思わないのか？」

「思いませんわ。私は昔、男に助けられましたから。」

「なら、女が優遇される世界への、踏み台となれ！」

「私には守りたいものがありますわ！そんなこと、させません！変身！」

『ターンアップ』

ラファール・リヴァイブV S I Sライダーギヤレンの戦いが始まった。

「さて、見ものだな。」

海人はそう呟いた。だが、そこに一本の電話がなつた。

「もしもし？ああ、お前か、どうした？」

『のんきにそんなこと言つてる場合じゃないぞ。』

『どうかしたのか？』

『ミラーモンスターがこつちに現れなくなつていてる。』

『それがどうした？良いじゃないか？』

『なんか、変な胸騒ぎがするんだ。そつちにミラーモンスターが現れそうで。』

「わかつた、とりあえずこつちはそれに備えて準備しておく。」

そして戦いは決着がつこうとしていた。

『これで終わりですわ！』

『ドロップ、ファイア、ジエミー、バーニングデイバイド』

『ザヨゴー！』

『セシリ亞なに叫んでんだ？』

『うーん、オンドウル語だけど、わかんないや。』

『さてと、雑魚は死んだし、どうしようか。』

『次は四組ＶＳ二組だな。』

「更識簪。確かに更識楯無の妹。なんかボロクソ言われていたらしいけど、ISライダーシステムで言われなく無くなつてきたんだよな。」

「そういえば俺にヒーローの条件聞いてきたな。」

「あ、今まで空気だつた戦兔とバカだ。」

「それひどっ!?あとバカじやなくてせめて筋肉つけろ!」

「んで、何て言つたの?」

「ヒーローってのは、人を助けることだ。決して悪と戦う訳じやない。って言つた。そしたら顔赤くしてどつか行つちまつた。」

「こいつ落としたな。」

「一夏が言えることじやないよ…」

「ルクスだつて言えることではないだろう。」

「さて、始まるな。」

アリーナ

「あんたが、更識簪つてわけね。」

「私はただの更識簪よ

「お姉ちゃん」と比べないでね。」

「比べないから大丈夫よ。」

「それじや、」

『555 スタンディングバイ』

『アーケイ！フルバツチリミナー！フルバツチリミナー！』

鈴は携帯のボタンを押し、簪はアイコンをベルトに入れて閉める。

「変身！」

『コンプリート』

『カイガン！オレ！レツツゴー！カクゴー！ゴゴゴーゴースト！』

一方、秋人はと言うと、

「くそ！こんなの原作じや無かつたぞ！なんで仮面ライダーがいるんだよ！」

『力が欲しいか？』

『欲しい、どんなやつにも負けない力が！』

『よかろう、このカードデッキとガジェットをやろう。』

「この力で、ヒロインどもを攻略してやる！」

一不味いことになつたな…

そこを偵察していたニンジャはそう呟いてどつかへ行つた。

「カイガン！ ムサシ！ 決闘！ ズバット！ 超剣豪！」

簪はムサシ魂になつた

「よ
あ

11

二刀流

「やつぱり一刀流には負けるかしらね！」

『エクシードチャージ』

「アーヴィング、お前が死んでしまったのを知らなかった。」

「ややあ！」

二刀流の隙をつき、胴体を斬った。だが、変身解除させる威力では

「ミヅ二耐」一九〇九サマー

「うつむきをまだいけるわよ！」

『エクシードチャージ』

『タイガーカン！ メサンシ！』

『オメガ・ライブ!』

ライダー・キツクの対決にもつれ込んだが、

『キイイイイイイイイン！』

「不未、！」

一夏とルクスとハヤトと海人はアリーナの観客席から出て闘技場

に出た。

「やばいことになつた。普通ならすぐに拐うはずだけどレイドラングーンやハイドラグーンは違う。しかもあれは狂暴個体。つまり、強く

なつて いる。」

「どうするの!?」

「決まつて んだろ？」

「でも 海人は…」

「誰が 変身でき ないと 言つた？」

海人は カード デッキを 出す。

「え!? 海人 もなれる の!?

「一応、私は ISライダーシステムの開発者だからね。 そうじやない
と可笑しいからね…。 変身！」

疑似 ISライダー オルタナティブになつた。

「皆も だぜ！」

そしたら クレア・ハーヴェイも 出てきた。

「クレア 先輩!?

「私は ハヤトの 為なら 何でもこなしますわ！ 変身！」

ISライダーゾルダになつた。

「俺達も いくぞ！」

「おう！」

「うん！」

『変身！』

ハヤトは 新しく、 ISライダータイガになつた。

「先生達は 避難誘導を！ レイド ラグーン位なら ISで なんとか できま
す！」

『わかりました。』

通信で 山田先生が 応じる。

『ソードベント』

『ストライクベント』

『シユートベント』

※ ゾルダは シュートベントが 一枚ある ので 今回 は 口ケランに しま
した。

『アドベント』

『ホイールベント』

『カイガン！ ニュートン！ リングが落下！ 引き寄せまつか！』

『コンプリート』

※説明少ないが、アクセルフォームになつた。

『定刻の反逆者 海賊レツシャー！ イエーイ！』

『クローズドラゴン！ イエーイ！』

「いくぞ！」

『おう！（ああ！、ええ！、うん！）』

第六話 心火を燃やして、ぶつ潰す！

「ちよつとこれ多くない!?」

「仕方ないだろ、レイドラグーンやハイドラグーンなんだから。「ルクス！これ多くないか!?」

「仕方ないよ傷無。だつて群れで動くミラーモンスターだから。」「同じ質問を二人にぶつけている二人（笑）。

どうやら一夏とハヤトはこのミラーモンスターのことを知つていたようです。

「あー、やつぱりこれ使おうかな？」

「なにこれ!?」

「ハヤトそれいつもらつたの!?」

そのカードは鳥の体が描かれていた。

「カードデッキの中にあつた。」

「海人おーー！なに入れてんの!?」

「使えると思つて、な！」

レイドラグーンを一体引き殺しながらそう言つた。

「んじゃ、俺らも使うか！」

「そうだね、一夏！」

そしてカード一枚引いて、一夏、ルクス、ハヤトはバイザーにカードをかざす。するとバイザーが進化した。そしてカードを入れる。

『『サバイブ』』

ハヤトは体の上半身がでかくなり、爪がでかくなる。そして足も発達した。

契約モンスターも進化した。

「やつぱりヤバいな。」

戦兔の背後にレイドラグーンが刺そうとする。

「戦兔、危ない！」

しかし、謎のビームで防がれる。

「俺も混ぜろ！」

「かずみん!?」

「わりい、首相補佐官。遅れちまつた。」

「ここでは名前で言え！それと無理を言つて悪かつた！」

「とりあえずこれを片付ける！」

『シングル！ツイン！ツインブレイク！』

「おうらあー！」

「私が来た！」

「冬奈姉!?」

「変身！」

『ガジャット！ガッチャージ！レベルアップ！辿る歴史 目覚める騎士 タドルレガシー！』

「これより、ミラーモンスター切除手術を行う！」

『ガシャコンソード！』

何体が倒して、一夏が

「今どんだけ倒した？」

と、ハイドラグーンが向かってくるのを剣で切り捨てながら言う。

「まだ半分倒してない！」

「鈴！まだ必殺技使つてないんだよな！」

「ええ、だからもう一回アクセルフォームになれるわ！」

「よし、皆！必殺技だ！あとかずみんはこれを使え！」

海人が投げたのはブリザードナックルだった。

そして一夏達はカードデッキからカード一枚取り出し、傷無はボタンを押し、戦兔はカイゾクハツシャーの電車部分、『ビルトオーシャン号』を引き、龍我はレバーを回しかずみんはブリザードナックルをツインブレイカーにセットし、篝とセシリリアはカードをスラッシュし、鈴はアクセルフォームになり足にファイズポインターをセットし、冬奈はガジャットをキメ技スロットに入れる。

『ファイナルベント』

『ガジャット！』

『キメ技！』

『各駅電車、急行電車、快速電車…』

『ジンドンカーン！ジンドンカーン！』

『レツツブレイク！』

『キック、サンダー、マツハ』

『ドロップ、ファイア、ジエミニ』

『バイク部隊は地上を殲滅しろ！』

「「了解！」」

何故か地上部隊にハヤトがいた。

「エンドオブザワールド！」

『クリティカルクルセイド！』

『海賊電車！シユツパーン!!』

『レディゴー！ドラゴニツクフィニツシユ！』

『スクラップフィニツシユ！』

『ライトニングソニック』

『バーニングディバイド』

『スタートアップセット』

『タドルクリティカルストライク！』

「おりやあああ！」

「セイヤーーーー！」

「ザヨゴーー！」

「ウエーイ！」

「はあああ！」

一夏、ルクス、海人はライダーブレイクを、クレアは全弾発射、戦
兔はエネルギーをチャージしたカイゾクハッシャーで撃つた。

あとの三分の二のISライダーはライダー・キックを喰らわした。
全員の必殺技がレイドラングーンとハイドラングーンの群れに炸裂し
た。

バグルドライバーツヴァイから

『終焉の一撃！』

という音声が聞こえ、それに反応してぐつたりとしたISライダー
達、そして一夏がその皆の気持ちをまとめる。

「はあ、疲れた。」

とりあえず後日、

「このクラスに編入することになった、猿渡一海だ、よろしくな。」

「一組なんだ。」

「なんか、そうしろって言われたらしい。」

そんなことを話していた戦兔と龍我であつた。

「一夏、待つててね。」

「あれ？お姉ちゃん、IS学園つて本当にここであつてるの？この前間違えたけど？」

「うつさいわね！大丈夫よ！」

この姿が似た姉妹は今回は間違つていませんでした。

もう一人：

「一夏、覚えていますか？覚えていなくても愛するつもりですけど♪」
そう言つた深い緑色の髪の毛をした女の子が言つた。

第七話 タツグ・マッチ決め

「今日からまた編入してくる女の子達だ。入れ。」

「シャルロット・デュノアです。よろしくお願ひします。」

「ラウラ・ボーデビッヒだ。よろしく頼む。」

「南波重工企業代表のヴィシユヌ・イサ・ギャラクシーです。よろしくお願いします。」

「ゲームコーポレーション企業代表のオニール・コメッットと」

「ファニール・コメッットです！よろしくお願ひします！」

「フランス代表候補生のエミリア・ハーミットです、よろしくお願ひします！」

まあ、なんと一組にこんなにも専用機持ちが現れたわけだ。

※因みに一夏は席が後ろなので顔があまり見えていません。

学校が終わつて…

「さてと、このパターンからすると、一夏は…」

海人は謎の本を取り出し読んでいる。

「あ、ヴィシユヌとコメッット姉妹か。」

そして本を閉じ、

「…しばらく行つてなかつたな。万丈と一緒にカフエにいくか。」

そう意味深な言葉を呟いてどつかへ行つた。

一方、一夏は屋上に呼び出されていた。

(うーん、まさかね…)

やはり記憶が曖昧な一夏だ。

「一夏、ですよね？」

「ああ、俺が風間一夏だ、が…」

一夏がその顔を見たとき、目を見張つた。

「ヴィシユヌ、それにオニール、ファニール…」

「一夏？覚えていますか…？」

「思い出した！あのときあつた、ヴィシユヌにオニール、ファニール
じゃないか！」

「思い出してくれたのね！お兄ちゃん！」

「一夏あ！」

やつぱり三人は一夏に抱きついた。

「あ、そうだ！」

「どうしたのか？オニール？」

「そういえば今回のトーナメントはタツグマツチだよ。」「へえー。」

「一夏は誰と組むのですか？」

「うーん、いないんだよな…。」

「それじゃ、私と組みませんか？」

「そうだね。確かオニールとファニールは同じ機体だから…。」

「うん、私達は二人で出るから。」「わかった。」

ルクスはどうと

「さてと、そろそろ集合だけどね。」

「そういうと、集まつてきた。」

「ルーちゃん、なんか久しぶり。」（ファイルフイ）

「ええ、最近寮で同じですけどなんか久しぶりと感じてしまっていますね。」（セリス）

「まあ、ルクス兄が忙しかったのが理由だろうけどな。」（ヘイズ）
「ルクス君、しばらく構ってくれなかつたからちゃんとしてよね♪」
(エーリル)

「あはは…、お手柔らかに頼むよ（汗）」

「とりあえず、タッグマッチのことだけどさ、」

「くじ引きでルーちゃんと誰になるのか決めた。」

「そしたらフルフレイでした。」

「セリス先輩は確か二年の部だから…」

「ええ、ですから更識楯無という人と組むことにしました。」「頑張ってね、皆。」

「ええ！（おう！）

ハヤトは

「あれ？エミリア？」

「久しぶりだね、ハヤト君♪」

「エミリア・ハーミット、まさか…」

「うん、私もハヤト君に会いたくて来ちゃつた！」

「クレア先輩…」

「大丈夫ですわよ、ハヤト。」

「あれ？ 先輩とハヤト君って仲いいね？ 何かあつたの？」

「そ、それはだなあ…」

「私とハヤトが付き合っていることですわ。」

「え？ 付き合っているの!?」

「でも、貴女がハヤトのことを愛しているのなら愛人として良いです

けど？」

「二ついい？」

ハヤトは聞く。

「何でしようか？」

「法律、大丈夫なの？」

「少子高齢化社会だし、そこら辺は首相補佐官がなんとかしてくれますわ！」

「ええ…（困惑）」

とまあ、ハヤトは海人の凄さにドン引きしてしまった。

戦兔と万丈は一海に呼び出されていた。

「よお、久しぶりだな。」

「ああ、元気にしてたか？」

「こつちは大丈夫だつたよ。あ、紹介する。彼女のシャルロット・デュノアだ。」

「えつと、結婚前提で付き合っています、シャルロット・デュノアです。」

「ああ、俺は桐生戦兔、こつちはバカで単細胞の万丈龍我だ。」

「バカってなんだよ、せめて筋肉つけろ！」

「あはは、面白い人だね。」

「こいつらがいるおかげでいつも面白かつたからな。」

「そいや、トーナメントどーすんの？」

「俺は戦兔と出る。」

「ああ、やつぱりこうでなくつちやな！」

「んじゃ、俺はシャルと出るからな。」

「おう！じやあな！」

「また明日な。」

「この力は素晴らしい！この力でヒロインを強制的に攻略してやる！
ハンドレッドもI Sも最弱無敗も！」

??? 「そ？なことはさせると思うか？」

「お前は誰だ!?」

??? 「うーん、何て言おうか？とりあえず君のアンチとだけ言つておくよ。」

「こで倒してもいいんだよ？」

『仮面ライダークロニクル』

『バグルアップ』

『天を掴めライダー刻めクロニクル！今こそ時は極まれり！』

??? 「そのままそつくり返してやるよ。」

『マキシマムマイティX！』

『マキシマムパワー！エックス！』

「無駄だ！」

??? 「それこそ、この言葉が似合うな。『だが無意味だ（^_U^）』

『ハイパーMテキ！』

『ポーズ』

「はあ！ハイパーMテキだと！？」

『パッカーン！ムーテーキー！輝け！流星の如く！黄金の最強ゲー

マー！ハイパーMテキーエグゼイド！』

??? 「さてと、どうする？」

「一旦にげろー！」

??? 「あーあ、逃げちゃつた。まあ、いいか。んじゃ、とりあえず帰りますか。」

『新しい強さで』

??? 「ん？ 電話か。」

『何してるので？ こつちは海の準備出来ていいよ。』

??? 「いや、あと3ヶ月だから。臨海学校そんなに早くないから。』

『えー、そうなのー？』

??? 「とりあえず頼んだぜ。』

『はーい。』

第八話 タツグ・マツチ

夜、ルクスはある一人の男を呼んだ。

「何かな？ルクス君。」

「首相補佐官、いえ、神崎海人。貴方は一体、どこまで知っているんですか？」

「…それはだな、お前達が異世界から来たことだよ。」

「やつぱりですか。」

「そしてお前がリーシャ達に欲望きらけ出して子供を沢山作つたこと…」

…

「え！？何で知つてるの！？って、それ言わないでよ！？」

「まあ、大丈夫だろう。」

「それで、本題に入るけど、異世界とかに行ける装置は出来たの？」

「まだ実験段階だ。」

「そつか。」

ルクスは微笑んで、

「僕はまた考えておくよ。」

「あ、そうだ。フギルの件だかな、やつぱりあいつは亡国企業にいる可能性があつた。」

「生きていたんだ…。」

「まず、アイツが生きていなければこんなことにならなかつたのだろう。」

「やつぱりか…。」

そしてルクスは険しい顔をして、

「今回も倒さなければいけないけど、強さがわからない。」

「そう、つまり今回のフギルの戦闘力が未知数っていうわけだ。」

「わかつた、気を付けておくよ。」

「あ、そうだ。夜にハッスルしすぎるんじやねえーぞ。こつちが大変になるからな。」

「りよ、了解です…」

そのとき、ルクスは冷や汗をかいたとさ。

さてと、タッグマッチだ。

「よし、初戦は一夏＆ヴィシュヌか。」

「それで相手が海人と、ん？セシリリア？何でだ？」

「なんか、新しいフォームを使うらしいんです。」

「そうなんだ。」

『 そう傷無とルクスとハヤトは話してた。』

「さてと、準備はいい？」

「ええ、行こうか！」

『ええ、セシリリア・オルコット、近接もこなして見せますわ！』

「さ、行こうか！」

『準備はいいか？ヴィシュヌ。』

「はい、私は大丈夫です！」

「そうか、ならいくぞ！」

『海人、本気出すのか？』

「出さない。」

『 そうなんだ。』

『私はベストを尽くしますわ！』

『私は、初陣を飾ります！』

『デンジャードデン デデン デデン デデン キュイアーネー！』

『クロコダイル！』

『「「変身！」』

『ターンアップ』

『サバイブ』

『割れる！喰われる！碎け散る！クロコダイルインローリング！ぶう
らああああ！』

『先手必勝！』

『トリックベント』

一夏は分身し、海人に攻撃を仕掛ける。

『ソードベント』

『この振動刃はどうかな！』

しかしその分身をすり抜けるように避け、斬つっていく。

「くつ！」

一方、セシリ亞は圧されていた。

「これを使うときが来ましたね！」

『アブソーブクイーン フュージョンジャック』

Qのカードをラウズアブソーバーにセットし、Jのカードをスラッシュし、ジャックフォームになった。

「なら私も！」

『ディスチャージボトル！』

ジェットフルボトルをスクラッシュドライバーにセットした。

『潰れない！』

『ディスチャージクラッシュ！』

背中にジェットが出来た。

「もう一個！」

今度はダイヤフルボトルを出して

『潰れない！』

『ディスチャージクラッシュ！』

腕や足を硬化させた。

「やあああ！」

「はああああ！」

銃剣と手足の格闘術での応戦。

「これで！」

「最後だ！」

こつちは決着が着こうとしていた。

『ファイナルベント』

スピニ式ライダーブレイクVSジェットストライク式ライダーブレイクの戦い。

激しい爆発と共に表れたのは、

(この戦い、俺の勝ちだ。)

一夏の勝利だった。

一方、ヴィシュヌとセシリ亞の戦いも終わろうとしていた。

「大義の為の犠牲となれ。」

『クラックアップファイニッシュ！』

『バレット、ファイア、ラピッド、バーニングショット』

「はああああ！」

二人の必殺技が放たれる。

上空からのセシリリアの攻撃に下から噛みつきライダー・キックをかまそうとするヴィシュヌ。

そしてその弾丸を喰らうように進んだため、

「なつ!?」

「やあああ！」

噛みつきライダー・キックが炸裂した。

『勝者！一夏＆ヴィシュヌチーム！』

「ふう、お疲れ様、ヴィシュヌ。」

「ええ、一夏も、お疲れ様です。」

その後、コメット姉妹VSなんか知らんモブ共（言い切っちゃったよ、この駄作者…） b y 一夏

まあ、ダイジェストみたいに言うけど、

『マイティシスターズXX！』

『ダブルガジャット！ガツチャージ！ガツチヨーン、ガツチャージ！ダブルアップ！』

『ノーコンティニューで』

「クリアしてあげる！」

『ガツチヨーン、キメ技！』

『マイティクリティカルストライク！』

連續ライダー・キックが決まった。

『勝者！コメット姉妹！』

??? 「…この2つのガジャットをあの二人に渡してっと、それでいいかな？」

そう、青年が喋つていじつていた2つのガジャット。そしてその隣には、

『対VTS（ヴァルキリートレースシステム）ガジェット
マキシマムマイティX
ドクターマイティXX』
も書いてあつた。

「さてと、そろそろISライダーも最終進化させないとな。マスクド
ライダー。いや、仮面ライダー。」
そして青年はその部屋をあとにした。

第九話

「あれ!? ここにあつた転送装置の設計図は!?」

海人は今、設計図を探しているが、そこに置き手紙があつた。

『設計図は頂いた。これで財団Xはまた一つ強くなる!』

「チツ、財団Xか。また面倒になるな。」

どうやら、海人は財団Xのことを探していたようである。

次の戦いは、ラウラと箒VS戦兔&龍我か。

「「変身!」」

『ターンアップ』

『ラビットタンク!』

『クローズドラコン!』

『サンダー、スラッシュ、ライトニングスラッシュ』

『ボルテツテク ブレイク!』

『ヒッパレー!』

『メガヒット!』

「私の停止境界からは逃れられん!」

「く、あのなんかバリアみたいなのなんかできねえのか!?」

「うーん…、あ! そうだ!」

「…よし、それでいこう!」

序盤は箒とラウラのペアが優勢だつたが、

『レディゴー!』

「別の方向からなら! 停止境界は破れる!」

『ボルテツテク フイニッシュ!』

『ドラゴニック フイニッシュ!』

やつぱりというか、天才物理学者だから停止境界は破れた。

そして最初にラウラがやられた。

だが、

『ヴァルキリートレースシステム、起動します。』

「倒す!」

「なんだあれ?」

「なんか、不味いことになつてんじゃねえか?!」

龍我の思つた通り、不味いことになつっていた。

「チツ、やつぱりそうなるか。」

そして海人は二つのガジヤツトを持っていった。

「くつ！」

「強い：」

「戦兔！龍我！」

そこに一夏とコメット姉妹、ルクス、傷無、ハヤトが現れた。

「海人、会場の避難は出来た。あのISライダー達はその護衛に向かつた。あと、言つた通りオニールとファニールを連れてきた。」

「わかつた。ISライダー達は時間稼ぎ！戦兔とコメット姉妹は残れ！」

「了解！」

「コメット姉妹、君たちにはこれを使つてもらう。」

一つ目のガジヤツトはマキシマムマイティX、もう一つのガジヤツトはドクターマイティXX。

「まず、マイティシスターズXXをガジャコンキースラッシュヤーにセットする。」

『ダブルガジャツト！キメ技！』

『マイティシスターズ！クリティカルファイニッショ！』

ガジャコンキースラッシュヤーが二つになつた。

「そしてガジヤツトを抜いてそのガジヤツトをさせ！」

『ガッショー。』

『マキシマムガジャツト！』

『ダブルガジャツト！』

『キメ技！』

「それをラウラに撃て！」

『マキシマムクリティカルファイニッショ！』

『ドクターマイティクリティカルファイニッショ！』

「はああああ！」

ラウラに撃つた。そしたら一時停止した。

「今だ、戦兔！」

『ラビットタンクスパークリング！』

『a r e y o u r e a d y?』

『変身！』

『シユワツと弾ける！ラビットタンク！イエイイエーイ！』

『r e a d y g o !』

『スパークリング フイニツシユ！イエーイ！』

「やあああ！」

ライダーキックが決まり、

ヴァルキリートレースシステムは活動停止した。

その後、整備班により、ヴァルキリートレースシステムは取り除かれ、ドイツに抗議した。ま、その研究所は誰かさんにより破壊されたらしいけど。

そして、

「戦兔！お前は私の嫁だ！異論は認めん！」

「いや、普通反対でしょ！」

別の意味でドイツは騒がしくなったとき。

ん？ 惣れた理由？ たしかあのとき、助けたときに意識は会つたらしくて、戦兔が、

「今助ける！」

と叫んでいたからな…

多分そこで落ちたんだろう。

『バット、バ、バット…ファイア！』

『ここが例の研究所か…』

『スチームブレード！』

『破壊する！』

こんなことがドイツであつた。

『もうすぐで臨海学校…。いよいよ、本格的に動けるってわけかあ！』

うさ耳をつけた、メルヘンない年こいた、女がそんなことを言つていた。

夜、寮での自室にて、

「…いよいよ、か。俺は、あいつらを越える！あいつの幸せを絶望に変える！そして俺一人で幸せになつてやる！」

悪魔な笑みを浮かべた秋人がそこにはいた。

一方、どこかの集合場所

「…ルクス、なんか格闘技覚えたつて本当？」

「うん。これから一夏達にも教えるよ。」

生身で I S を倒す技術をルクスは身につけていた。

これを女尊男卑の連中が見たらどうなることやら…：

「さてと、一夏達から預かつたこれらをバージョンアップさせてつと。」

パソコンには、

『マスクドライダーシステム インストール中』

と書いてあつた。

「これから、何が起ころかわからない。これに対処出来るように、やっておかなければ…：

秋人、そして財団 X。お前らの好き勝手には絶対にさせない。

：『仮面ライダー』これが、お前らを倒す、『ヒーロー』だ。」

神崎海人、こいつは一体何者なのか…：

第十話 ハーレムデート

「ここはレゾナンス。たしか商業が多いところだつたはずだ。

「いーちかー！」

向こうから来たのは篠と鈴。え？なんでかつて？ヴィシュヌとコメット姉妹と一緒にデートの約束をしてたら篠達に聞かれてついてこられたのだ。まあ、いいけど。

「つていうか、やっぱり水着なんだよなあ！」

臨海学校の準備のため、デートを兼ねて買い物に来ていたのだ。
「そういうえばISライダーシステムつき、今アップグレードしてい

るんだつてね。」

「ええ。『近い未来に大変なことが起きるから』と言つていましたね。」「一夏、そこら辺のことはしらないの？」

「うーん…、わかんないや。」

「そつか。」

とりあえず水着が売つている店に入った。

「やつぱり女尊男卑があるんだね。」

「ああ。」

「んじゃ、俺はここで待つてるよ。選んだらここに来てくれ。」

「えー？お兄ちゃん選んでくれないのー？」

「選んだのを見たいからな。」

「わかつたよー。」

その間、女尊男卑の連中が現れて、

「その男、これを買つてちようだい。」

「は？嫌ですけど？」

「男のくせに何たてついてんのよ！」

「はあ：お前ら、IS動かしたことあんの？」

「は？無いに決まつてんじやないの！」

「だつたら偉そうなこと言わないでくれるかな？」

「うるさいわね！今から警察を呼ぶわよ！」

「はいはい：どーにでもなれ…」

まあ、そのあとは…

「な、何をするの!? 私は女であいつは男よ！ あいつが私に危害を加えたのよ！」

「ま、お前が冤罪を作った時点でお前の負けだつたわけだ。」
ま、警察の世話になるのは確定だな。

そんなこんなで水着を選んだみたいだ。

そんなわけで水着売り場に向かう。

「あれ? 何かあつたの? ?

「あー…なんでもないよ。」

「まあ、いつか。」

「それよりお兄ちゃん! 見てみて!」

そこにいたコメット姉妹はの水着はコメット姉妹のイメージの色
で、そして絵柄が同じだった。

「へえ、いい感じだね。」

「やつた！ 喜んでくれたよ！」

「良かつたね、オニール。」

「もう、お姉ちゃん素直じやない！」

とまあ、にぎやかでした。

「次はヴィシユヌか。」

「はい、いきますよ？」

「え! ?

一夏はビックリした。何故なら露出度が高すぎたからだ。

「ちょ、ちょっとまつて！ 露出度高いよ! ?

「で、でもこのくらいにしたほうが、彼氏には逃げられないと…」

「それ、誰情報？」

「えっと、神崎さんです。」

「あの野郎…あとでムツコロス！」

そう決意した一夏であった。

因みに、自室兼研究室では

「へ、ヘツクシ！ 誰だ？ 私の噂をしているのは…、これは殺意か？ だが
私は謝らない。」

と言つていた海人であつた。

筈と鈴は臨海学校でのお楽しみだと言つていた。果たして、筈と鈴は一夏のヒロインになれるのか？

あとは食べ歩きしたり、普通のデート（でもハーレムの時点で普通じゃない。）をしてた。

まあ、その時に口移しされて顔が大噴火したんだよね、一夏が。「なんかメンタル削れた…。」

「一夏らしいですね。」

「お兄ちゃんもう少し強くなつたら？」

「考えとく…。」

そこで何か、視線のようなものを感じた。

「ヴィシュヌ達、俺の回りから離れるな。」

そう一夏は言つた。

「お兄ちゃん、何かあつたの？」

「ヤバイことになつた。」

そこに現れたのは、マスカレイド・ドーアントだつた。
「財団Xのマスカレイド・ドーアントだ。こいつらは生身で倒せる。
ヴィシュヌはコメット姉妹を守ってくれ。まだ、戦線に出たばかりだからな。筈はあれを、鈴は…だな。」

「ええ、わかつてゐるわよ。」

「ライダーシステムがまだ完成していなかから、あれでいくぞ。」

「ええ！」

鈴は姿を変えてウルフ・オルフェノクになつた。

筈は何処から持つてきたのか、真剣を取り出した。

「昇龍拳！」

「お兄ちゃん!? それ使えたの!!」

と、オニールはビックリした。

「この前、ルクスさんに教えてもらつたばかりだからな！」

そう言いながらドーアントをぶつたおしまくる。

「やあああ！」

筈も戦国のゲームみたいに無双する。多分名前は無双乱舞だつた

「はうな…。

「はああああ！」

鈴は疾走体となり、走りながらぶつ飛ばしまくった。

「くつ、ひけー！」

財団Xの奴らは一目散に逃走した。

「上級ドーパントが来なくて良かつた…。」

「一夏、あの集団はなんですか？」

「あれは財団X。動いている理由はわからない。けど、まず人類の為にやっているわけではないことは確かだ。」

そう一夏は言い、

「何も起こらなければ良いな…」

と呟いた。

そのあと、

「一夏、そろそろしてくれても良いんじゃないでしょうか？」

と瞳が黄金色に染まつたヴィシュヌ達が言つてきて一夏は襲われてしまつた。

もちろん、他の男達のヒロインズも瞳が黄金色に染まつて襲つていることでしょう。

かくして物語は一つの山場を迎える。

「さてと、ライダーシステムが完成した。やはり私は、神だああああ！」

「うるせえ！」

と龍我に言われた。

ここはカフェ、n a s c i t a（ナシタ）。マスターの石動惣一がいる。

そして今、戦兔、龍我、一海、シャル、ラウラ、簪、そして海人がいた。

「ほれ、コーヒーだ。」

「ありがとうございます。」

全員分のコーヒーを貰つたが、

「おえ!? 不味いよ!？」

「うん…不味い。」

「こんなに不味いコーヒーは初めてだ。」

と口々に言うが、

「そうか？俺は良いと思うけど？」

「ああ、私も良いと思う。」

この二人は何故か美味しいと言っていた。残りのコーヒーも

「コレノンデモイイカナ？」

と言つていた。

そして皆が退店したあと、石動惣一は、

「さて、この世界の俺はどうなんだろうな。そして、この世界の一夏は俺の世界の一夏よりも強いのかな？ま、俺は見届けることしか無理だけど。」

そう言つていた。

第十一話 ～臨海学校にそびえる悪～

「海、見えた！」

「うーん？ もうつくのー？ もつと眠たかつたなー。」

「さて、臨海学校か。」

「z z z…」

「…皆、いろんな意味で疲れたからね…。」

事情を知っている海人は微笑していた。

「ついたし、とりあえず着替えて海で遊ぶか。」

そんなわけで海での出来事

鈴が、

「一夏あ！ あそこのブイまで勝負よ！」

「わかった！」

「んじゃ、審判は私がやろう。」

「おう！ よろしくな！」

「位置について、よーい、どん！」

スタートして、

(これなら勝てるかな？)

そう鈴が思つたが、

(足つった！)

どうやら足をつってしまったようです。

「一夏！ ギブ！ 助けて！」

「やべ!? 漏れるぞ！」

助けようとしても届かなさそう。でも、

『キーン！』

金属音と共に現れたエイのようなモンスターが助けてくれました。

「な、なんのこのミラーモンスター!?」

「あ、エビルダイバーだ。久しぶりじゃん。」

どうやら一夏は知り合いつたようです。

「すまん、砂浜まで送つてくれ。」

了解とでも言うようにしつぽをふり、鈴を乗せて砂浜まで行きまし

た。

「どうか、なんでエビルダイバーは助けてくれたの？」

と、ルクスが疑問に思つた。

「エビルダイバーは確かに懷つこくて、正義感が強いんだつけなあ。あ、人は食わずに外敵系のミラーモンスターを捕食しているんだつて。」

「へえ？」

そんなこんなしているうちにもう自由時間は終わつて、夕飯の時間。

「刺身うまっ！」

「さすが国産サーモンだね。」

「わさびつけた方が良いぞ？」

「それやつて地獄見た人いるから…」

と話していた一夏、ルクス、傷無、ハヤト。

「戦兎、なんか新しいやつ届いたらしいな。」

「ああ。だが、下手したら暴走する。お前の新しいやつもあるぞ。ま、かずみんと被るけど。」

「へえー。」

「おい待て、クローズのやつは暴走の危険性があるんじやねえのか？」

「そこはまだ未知数だ、だから実験だな。」

「死なないようにな。」

「ああ。」

とそんなこと話していたビルド系

「…一夏、ルクス、ハヤト、傷無。何があつても私が守つてみせる。」

そして電話をする。

「もしもし、弾か？」

『ああ、おれだが？』

「明日、海に来い。」「やつぱりか。」

「ああ、頼んだぞ。」

『了解つと！』

そして電話を切り、

「…明日の準備をしますか。」

次の日、

「今日はな…」

そう話そうとする織斑先生。だが、

「ちーちやーん！」

そこに天災が現れた。けど、織斑先生のアイアンクロー！

「げふつ!?」

「ちゃんと出てこないのか？」

「この天つ災には無理な話だよー！」

(…こいつは本当に篠ノ之束か?)

そう思つていた一夏だつた。

「今日はねえー、箒ちゃんに用があつてきたんだよー！」

「姉さん、私にはISは要りません。」

「えー、そんなこと言わずにさー」

「いやと言つたら嫌なんです！」

そう押し返す箒。

「もー、仕方ないなー。」

「おい！俺を見ろおー！」

急に叫んでいたやつがいたので振り替えると、

「秋人…」

「あのやろう…」

「このアイテムを使つてやる！」

『分身！』

秋人が一人になつた。

「お前らは終わりなんだよー！変身！」

秋人1はカードデッキをいれる。

秋人2はガシャットをさす。

『バグルアップ 天を掴めライダー！刻めクロニクル！今こそ時は極まり！』

『バグルアップ 天を掴めライダー！刻めクロニクル！今こそ時は極まり！』

たくさんミラーモンスターが出てきた。

「はあ!?」

「いくらオーディーンだからってそれはないだろ!?」

そう叫んだ一夏と戦兎。

「くそつ！こうなつたら！皆！いくぞ！」

『変身！』

シャルは仮面ライダーデイケイド、エミリアは仮面ライダーファム、エーリルは仮面ライダーライア、ハイズは仮面ライダー王蛇になつた。

「フィーちゃん!?」

突如フィルフィのところにミラーモンスターが向かっていく。

「危ない！避けて、フィーちゃん！」

それを受け止めるフィルフィ。

「私はもう、ルーちゃんに負担をかけない！ルーちゃんを逆に守つてみせる！誰でもなく、私のために！変身！」

仮面ライダークウガになつた。

「フィー、ちゃん？」

「ごめんね、ルーちゃん。隠してたの、私が仮面ライダーだつてこと。」

強い思いにひかれて仮面ライダークウガになつたのだ。

「ここはどこだ？確かに、財団Xと戦つて…

「ん？あれは、なんだ？とりあえずいつてみるか！」

「ここが『ISライダーの世界』か。よし、行くか。変身。」

『KAMEN RIDE LOOP』

仮面ライダーループとなつた。

この男は神崎 譲

決して神崎海人とは兄弟ではない……（一応知り合い……という設定）。「とりあえず呼ばれるが、手伝つてと言つていたな……。行くか。変身！」

『クロム！』

『ライダータイム！仮面ライダークロム！』

時崎一夏。ここの一夏と同じような境遇を持つ、別世界の一夏。
そして海人の知り合い（…という設定。）

「さて、久しぶりに会いに行きますか！変身！」

『オープニングアップ』

仮面ライダーレンゲル。

一夏の悪友だ。

海人とは知り合い。

「やあああ！」

『グシャアアア！』

レイドラグーンなどを相手にしている筈。

そこに、

『スピニングダンス』

「はあああ！」

冬奈と声が似ている仮面ライダーに会つた。

「お前は誰だ？」

「仮面ライダーカリス。とりあえず今は戦うぞ。」

「ああ。」

『サンダー、マッハ、タックル、ライトニングバースト』

電気を纏つてラグビー選手びつくりのタックルをお見舞いした筈。

「それでこそ篠ノ之筈だ。」

そう、カリスは言つた。

「くつ、強いな。」

「当たり前だ！オーディーンは、當時サバイブだからなあ！」

「なら、これはどうかな？ライア！」

「うん！」

『ストライクベント』

『コピーベント』

「ダブルドラゴンクローカイヤー！」

「くつ、なんだ!?」これはファイナルベントの威力の1、5倍はあるぞ
!?

「今だ！」

『サバイブ』

ファームと王蛇を除く龍騎系の仮面ライダー達は一気にサバイブになつた。

「ソードベント」

「テイルベント」

「シユートベント」

「ストライクベント」

「ならよお！これならどうだあ！」

『トリックベント』

オーディーンが三人になつた。

「気を付けろ！2対1でやれ！」

「おう！」

「くつ、うわあああ！」

一夏がぶつ飛ばされる。

「所詮、一夏はクズなんだよ！」

「確かに俺は弱い、だが！俺は皆が、仲間がいるから熱くなれる！」

「その通りだ！」

その声と共に現れたのは、

常磐ユウヤだつた。だが、似てている顔が現れたので、

「あれ？あいつは俺なのか？」

「え？俺に似ていてる？」

混乱するよ。

「は？クズが一人？ぶつ飛ばせばいい話だあ！」

「…！」

「変身！」

息ピッタリの変身の声

『サバイブ』

『ライダータイム！仮面ライダージオウ！アーマータイム！アドベン
ト リュウキー！』

「龍騎に似ている!?」

「話は後で、今は戦うぞ！」

「ああ！」

『ラツシユ、ブリザード、ポイズン、ブリザードベノム』
「おりやああ！」

「くつ！今度は誰だあ！」

「俺、五反田弾だ！」

「弾!?」

「遅くなつちまつたな、一夏！」

「遅いぞ！」

「弾…どつかで聞いたことあるような…。とりあえず戦うか。」

『ジカンギレード！』

『ソードベント』

剣で切るが、

『ガードベント』

阻止される。

そして羽のような爆弾で牽制される。
だが、3人には余裕があつた。

「無駄な足掻きだな！」

「それはどうかな！」

『シユートベント』

『ジユウ！』

「撃ちまくれ！」

弾幕をはり、煙を起こす。

「弾！時間稼ぎを頼んだ！」

そのときに一夏は普通のナイトに戻っていた。

「おう！任せとけ！」

『バイト、ブリザード、ブリザードクラッシユ』
ジャンプしてハサミ蹴る。

そして氷ができ、凍らされる。

「そんなんでやられると思うかあ！」

氷を割つてでてくるオーディーン。

「思つてないさ。」

その一言と共に弾は横に移動する。

「怖じ気づいたか！…なつ!?」

気付いたときには遅かつた。

『ファイナルベント』

『フィニッショータイム！龍騎！』

「おりやああ！」

「はああああ！」

ドラゴンライダーキックと飛翔斬のダブルアタックに

「く、そ…」

オーディーンは消滅した。

しかし、所詮トリックベント。分身に過ぎなかつた。

「ふう、こつちは終わつたぜ。」

本体のオーディーンVSタイガサバイブ&オルタナティブ&クロム&仮面ライダーループ

「つていうか、助つ人呼んでたなら言つてくださいよ！」

「忘れてた。」

「とりあえずやるぞ！」

「おう！」

ループが殴りかかりオーディーンは避ける。

その展開がずっと続いた。

そこでクロムは、

「まさか！これならどうだ！」

『ゲンム！』

ゲンムウォッчиを出した。

『ライダータイム！仮面ライダークロム！アーマータイム！レベルアップ！ゲンム！』

「神の恵みを受けとれ！」

『ファイニッショタイム！』

時止めが通用しなくなつた。

「ならー！これならどうだー！」

『ファイナルベント』

「そうはさせない！」

『フリーズベント』

「何!?ならこれならどうだー！」

『ガードベント』

「まだまだいくぞ！」

『コンファインベント』

「今だ！」

『final attack ride ルルルloop!』

「はあ！」

ライダーキックが炸裂した。

「くつ。だが、俺は分身だぜ？本体はもう逃げたぜ。」

そう、龍騎と戦っていたクロノスは、

(ヤバいな、逃げるか。)

そう言つて一人逃走した。

ミラーモンスターとの戦いも決着がつこうとしていた。

『ファイナルベント』

ドライグランザーはバイクモードになり、火を吐き、突撃する。

『ファイナルベント』

エクソダイバーは電気を纏つて突撃した。

『ギリギリ！クリティカルファイニッショ！』

ガシャコンスパローで斬りまくり、撃ちまくつた。

『ライダー、キイイック！』

ファイルファイのマイティフォームのライダーキックが決まった。

「終わつたな。」

「ああ。」

「んじゃ、帰るな。」

そして時崎一夏は帰ろうとする。

「ああ。あ、そうだ。君に渡さなければならないものがある。」

海人はウォツチを出し、

「これは、ダークカブトだ。君の正義は強く、たくましい。その正義を胸に戦つてくれ、仮面ライダー。」

「ああ、ありがとうな。」

そして帰つていった。

「海人によろしくいつといてくれ。」

「はい！」

「ありがとうございました！」

「ああ、達者でな。」

そういつて神崎朧は帰つていった。

「ありがとうございます、ユウヤ。」

「ユウヤさん、ありがとうございました。」

「いいぜ、こつちもよかつたからな。こうやつて会えるのは。」

そしてユウヤは2つブランクウォツチを出し、

「このウォツチをもつていてほしい。」

「わかった。」

「わかりました。」

「ありがとうございます。それじゃ、またな！」

「ああ！」

「ええ！」

ワームホールに入つて帰つていった。

そこを見ていた海人は、

「常磐ユウヤ。君は大いなるときに思いだし、そして大切な人と共に歩む。頑張つてくれ。」

『ま、今回出る幕はなかつたな。』

そして変身解除する。

「一夏は想像以上に強くなつていたなう。戦兔達も頑張つてもらわなくちゃな。それじゃ、チャオ。」

第十二話　一夏の旅立ち　傷無の買い物

夏休み♪

「ふつ、はあ！」

一夏は今、剣の訓練をしている。

(具体的には『残影斬』や、『強制超過(リコイルバースト)』など。この前の戦いで腕がまだ追いついていないと自分で思っていたのだ。

「一夏、大丈夫ですか？」

そこにヴィシュヌが来た。前から練習していることに気がついていたみたいだ。

そして差し入れを持つててくれたのだ。

「ああ、ありがとな。」

そしておにぎりを食つて、また練習に戻ろうとするが、そこに海人が来て、
「この前、こっちの世界に来てくれた『常磐ユウヤ』君。そっちの世界に言つてほしいんだ。」

「え？でも、世界を繋ぐにはワームホール…あ！まさか！」

「そう、ついに完成したんだ。そしてあのときに使つたというわけだ。」

そして、海人は一つ試したいことがると言つて、

「君たちが持つているウォツチを見せてくれ。」
と言つた。

「はい、これです。」

そのウォツチにはナイトの顔と、ローグの顔が描かれていた。
「覚醒したのか。」

「そう呟き、

「よし、それでは向こうの世界に言つてくれたまえ。」

「わかりました。」

そして、海人が手を壁にかざす。すると、ワームホールができる、「んじや、向こうの常磐ユウヤによろしくな。あ、顔が似ている理由を

話さなければな。」

そして海人は話して、

「そうか…、そういうことがあつたんだ。」

「一夏も、もしかしたらユウヤさんと同じことになつていてかもしけませんね。」

一夏は気分を変えて、こう言つた。

「んじゃ、行こうか！」

「ええ！」

そしてワームホールへ入つていつた。

「…一夏。君はまだ、覚醒の余地がある。頑張つてくれ。」

海人は1枚の何も書いていないアドベントカードをみてそう呟いた。

「…さて、と。ここでいいかな？」

「ここはアリーナ。女がいた。」

「なんで俺達呼ばれたんだ？」

と龍我が言つた。

「俺も知らない。多分だが、海人の可能性が…」

と続けようとするが、一海に遮られる。

「どうやら、そうではないみたいだぞ。」

そこにいたのは、篠ノ之東だった。

「初めてかな？この姿で会うのは？」

東が妙な男口調で言つた。

「お前は篠ノ之東じゃない。いつたい誰だ？」

戦兎は鋭いところを突いてきた。

「すぐにバレるとはな…。ま、こんな話し方をしていると当たり前だがな。蒸血！」

『ミスト、マッチ。コブラ…コ、コブラ…ファイア！』
ブラッドスタークになつた。

『さあ、かかつてこい！』

「いくぞ！」

「変身！」

『シユワツと弾ける！ラビットタンクスパークリング！
『ロボットイングリス！ぶううらああ！』

一人は変身したが、龍我は変身していなかつた。

「万丈！変身しろよ！」

戦兎が言うが、

「戦兎、これ使うわ。」

『スクラツシユドライバー！』

「お前！何故それを！」

戦兎は机の上において失敗だつたと思つた。

『ドラゴンゼリー！』

変身待機音が鳴り響く。

「変身！」

『潰れる！流れる！溢れでる！ドラゴンインクローズチャージ！
ぶううらああ！』

『仮面ライダークローズチャージになつた。

「今俺は、負ける気がしねえ！」

「つたく、心配させやがつて。」

そう戦兎は言い、苦笑する。

『ツインブレイカー！』

二人はツインブレイカーを起動する。

『ドリルクラツシャー！』

戦兎はドリルクラツシャーを取り出した。

『そうちなくつちやなあ！』

スタークはスチームブレードで応戦する。

「はあああ！」

戦兎がスタークに斬りかかるが、

『ふん！』

スチームブレードで弾き返される。

『ビームモード!』

「どりやああ!」

グリスがビームを撃つが、

『はあ!』

ランスチームガンで相殺される。

『レツツブレイク!』

「これでどうだああ!」

ドラゴンを入れたツインブレイカーの攻撃にはさすがにスタークも

『くつ、強いなあ。』

そう呟いた。

『これでお前達のハザードレベルは上がった。任務完了ってわけだ。』

そうスタークが呟き、

『ふつ!』

素早く動き、ビルド達の足などにタッチをする。

『ハザードレベルを計った!』

『ハザードレベルだと!』

『ビルド! お前は3・9だ! クローズ! お前は4・1! グリス! お前は4・5だ!』

『そんなことはどうでもいい!』

『俺には関係あるさ。特に龍我! お前はな!』

『どういうことだ!?』

『まあ、じきにわかる。』

そうスタークは言い、

『あばよ!』

スチームで消えていった。

「なんなんだ…俺達は、仮面ライダーは…」

そう戦兎は自然と言っていた。

「さてと、買い物終わつたし帰りますか。」

傷無はお使いを頼まれていたので食材などを買っていた。

しかし、

「ひやははは！」

なんか、怪人が暴れていた。

「なんだあれ!? 人が襲われている!? 行かなきや！」

傷無は走つていった。

「これもすべて I S のせいだああ！」

この怪人、いや、マグマ・ドーパントは I S のせいで人生を狂わされた男性である。そして、このマグマで展示用の I S をぶつ壊していたのだ。

「キヤア!? 神聖な I S に何してくれてるのよ!?

「お前ら女性利権のせいで人生を狂わされたんだよ！ 思い知れ！」

「おい！ ドーパント！ やめろ！」

傷無がそう叫ぶ。そのときにギリギリチャンバラを起動し、バグルドライバーⅡを腰につける。

『ガツチャーン』

『ギリギリチャンバラ！』

「嫌だね！ 僕は全ての I S をぶつ壊すまで止まらねえんだよ！」

そう言つて、マグマを傷無に投げようとする。

「なら！ 僕が止める！ 変身！」

『ガシャット！ バグルアップ！ ギリ！ ギリ！ ギリ！ ギリ！ チャンバラ！』

マグマを投げるが、変身エフェクト（オリファルコンエレメントみたいなやつ。名前わかんない。）に阻止される。

『ガシャコンスパロー！』

ガシャコンスパローを持ち、立ち向かう傷無。

「お前は男だろ!? 何故止めるんだよ！」

マグマ・ドーパントがそう言いながら殴りかかる。

確かに I S は女性しか乗れない。だから女性利権が増える。だが

！」

傷無はそれをスパローで押し返し、アローモードにして撃ちまく

る。

「それでも壊して良い、危害を加えても良いという意味ではない！」

「なら…このまま倒されろ！」

マグマ・ドーザントがマグマで地面を焼失させる。

「あぶね!?」

間一髪で避ける傷無。

「これで逃げも隠れも出来ないな！」

最大火力のマグマ・バーストをぶつけようとしてくる。

「それはどうかな！」

『キメ技』

バグルドライバーⅡのボタンを押し、キメ技を発動する。

「新たなる世界の、礎となれ！」

マグマ・バーストを撃つた。

「させてたまるか！」

『クリティカルクルセイド』

傷無はライダー・キックをする。

「はあああ！」

キックがマグマ・バーストに当たり、爆発する。

そして勝ったのは…：

「ふう、危なかつた。」

傷無のライダー・キックだつた。

「メモリブレイクしたからいいけど、まさかメモリということは…」

そう傷無は考え、メモリの欠片を回収し、学園に持ち帰つた。

第13話 仮面ライダーとは サブ 五反田弾 オリジン

「なんなんだ…俺達、仮面ライダーは…」
ハザードレベルなどいろんな疑問が残つた戦兎。そこに神崎海人が来る。

「悩んでいるな、戦兎。」

「ああ、海人か。」

そして戦兎は疑問をぶつける。

「海人、俺達、仮面ライダーはいつたいなんなんだ?」

「…一夏はいないし、ルクスも帰っている。話しておくか。」

そして、仮面ライダーが作られた目的を教える。

それは長く果てしない、昔から続く物語であつた。

「あれは、確か昭和だつたな…」

海人は回想する。

昭和のとき、改造人間と呼ばれる怪人が悪の組織、ショッカーの手によつて作られた。本郷猛はその改造人間の一人だが、脳改造される寸前で逃げ出し、そして仮面ライダーとなり人々を守るようになつた。

「…そして平成は更にたちの悪いやつが増えたんだ。」

平成の最初、クウガ。その敵、グロンギは人を殺すゲームをした。クウガはそれを止ようとして最後に変身能力を失つてしまつた。

「その平成仮面ライダーの新しいやつが俺達、『ビルド』つてこと?」

「ああ、そういうことだ。だが、今は『仮面ライダージオウ』になつている。」

「そうか。」

戦兎はそう言つて、寮へ戻ろうとした。が、

「待つて!? それじや、一夏達が仮面ライダーなのは何故なんだ!? もどは最初、ISライダーなんだろ!?」
そう言つて詰め寄る戦兎。

「ISライダーは仮面ライダーのプロトタイプなんだよ。前の仮面ライダーを受け継ぐ形で一夏達は仮面ライダーになつてゐる。」

「それじゃ、フィルフィと/orいう女は?」

「あれはな・個人的要因が多すぎるから、言えないんだ。」

「そう言つて海人は顔を上にあげ、

「…仮面ライダーは命懸けの戦いだ。それを知つて皆は仮面ライダーになつてゐる。」

そして、と

「仮面ライダーは兵器なんかじやない、人を、皆を守るヒーローでなければならぬんだ。」

そう言つて海人は歩きだした。

「それじや、この事は一夏に言わざにな。」

海人は歩いて行つた。

「…人を、守る…か。」

何故か戦兎の中にはラブ & ピースのようなものが浮かんできた。

「なんなんだろう…」この懷かしい思いは…」

戦兎はその思いに少し考えさせられていた。

「何やつてんだ?」

「海が戦兎に言つてきた。

「…」いつを、暴走を止めようとしてな。」

そう言つて見せてきたのは、ハザードトリガーだった。

「前言つてた、暴走するやつか。」

「ああ、暴走を止められるものが出来る間に新たなスクラツシユゼリーを作つたんだ。」

そここのゼリーには兎の絵柄が描いてあつた。

「どうか…」

「海は少し悲しそうに言つた。

「お前…わかつてんのか?スクラツシユドライバーは…」

「知つてゐる。好戦的になつてしまふ、だろ?」

「ああ。だから渋つていたが、もう使わないとな。」

ようは、それだけ重要な所に迫つているのだ。

「…さてと、編入の手続きはこれでよし、と。」

そう言つていたのは五反田弾。一夏の悪友だ。

彼が仮面ライダーレンゲルになつた理由を話そう。

あれは、数カ月前…

「あれ? チベットからなんか送られてきてる?」

その物語は、突然知り合い（といつても中身はアンデッド）の贈り物から始まつた。

そこにあつたのは十枚のカードであつた。

『弾君へ

このバックルが届いたら、急いで連絡してほしい。』

(昇さん…)

弾は急いで電話をかけたのだ。

「もしもし、昇さんですか?」

『弾君か、届いたかな?』

『はい。』

『君には、一夏君のサポートをしてもらいたい。この後、僕達もそつちに行くから。とりあえず待つてて。』

『了解です。』

そして、嶋さんと、光さん、大地さんとの特訓が始まつた。

特訓の内容は、初級編として最強の戦い方(笑)、中級編ではコンボの組み合わせ。上級編ではチームプレーを学んだ(相手はミラーモンスターのソロスパイダーニ体、弾のパートナーはカテゴリージのエレファントアンデッド)。

そして、使いこなしてきたときのあとにあつたのが臨海学校の大戦である。

『ブリザード、ラッシュ、ポイズン、ブリザードベノム』

「はあああ！」

ソロスパイダーにブリザードベノムを当てて、凍らせ、毒と合わせて動けなくする。そして、素早くジャンプする。

「おりや！」

エレファンタンドの鉄球で止めをさした。

弾はまだ使いこなしていないと言っているが、端から見れば全然戦えている、問題のない戦い方だった。

「一夏、お前にはまだ届かない。だけど、近づくことはできるからな

⋮

弾も未来を守るため、仮面ライダーとして戦う！

「⋮融合件数は高いな。ま、それだけ強い思いなのか。」

データをパソコンで出力し、解析していた神崎海人は、

「⋮あいつにも、キングフォームにはさせないようにしないとな。」

そう咳き、またパソコンに触れるのだった。

第14話 暴走？ナニソレオイシイノ？

「やつと来たか、戦兎。」

「やつぱりいたか。」

ここは、ビルの廃墟。そして、ここには二人の男女がいる。

一人は、桐生戦兎。もう一人は、篠ノ之東だ。

「なんのようだ？」

「いや、ただハザードレベルを戦兎を重点的にあげようと思つてなあ！蒸血！」

『ミスト、マツチ。コブラ…コ、コブラ…ファイア！』

「…今日は俺も全てを出しきる。」

そして戦兎はスクラッシュユドライバーをつけて、ラビットゼリーを入れる。

『ラビットゼリー！』

「変身！」

レンチを下げる、叫ぶ。

『潰れる！流れる！あふれでる！ラビットインビルドチャージ！ぶううらああ！』

『ツインブレイカー！』

ツインブレイカーを起動し、攻撃する戦兎。

それに対し、スチームブレードで応戦するスターク。

「はあああ！」

スタークの防御に穴が開いたところを、戦兎が突く。

『くう！』

スタークは少し痛がるが、やはりすぐにけろつとする。

『まだまだあ！もつと強くなれえ！』

『くつ、うおおお！』

スチームブレードで斬られるが、スタークに殴りかかる戦兎。ス

タークは徐々に戦兎を圧していく。

『オラオラオラア！』

「ぐ、うわあああ！」

後ろに吹つ飛ばされる戦兎。

『実力が足りないか。今回はここまでかあ？』

困ったように言うスターク。だが、

「まだ、終わつてなんか、ないさ！」

『シングル！ツイン！ツインブレイク！』

入れたボトルはラビットとタンク。そして、

『スクラップフィニッシュ！』

赤と青のオーラを纏い、ラビットの力でジャンプし、ツインブレイカーに入れたタンクボトルの効果でキックの威力が増す。

「はあああ！」

この一撃でスタークは膝をついた。

『強くなつたな！ハザードレベルは4・5だ！スクラップシユドライバーはやはり素晴らしい！…まあ、ハザードトリガーが見れなかつたのは残念だが。（戦兎、もつと強くなれ。そして、万丈達と共にこの世界を救うんだ。）』

スタークはそのまま歩いて帰る。

何故追えなかつたのか。それは戦兎の体力が残つてなかつたからだ。

「…帰るか。」

『ディスチャージボトル！潰れない！』

消しゴムフルボトルを使い、撤退した。

「ふう、サバイブの状態はなんとか安定したな。」

如月ハヤト。彼は今、自室でタイガになつたときのサバイブを調べていた。

「さて、これからどうしようかな？」

『キイイイン！』

「この音は!?まさか！」

急いで外にでると、IS学園の生徒が襲われていたのだ。

右手にカードデッキを持ち、鏡に移す。

「変身！」

カードデツキを入れ、仮面ライダータイガに変身した。

そしてミラーワールドに入り、斧型の召喚バイザー、デストバイザーでミラーモンスター、デイスパイダーを斬る。

「大丈夫か!?

「はい、ありがとうございます。」

「いいが、よく聞いといて。」

そう言いながらデストワイルダーを召喚する。

『アドベント』

「このモンスターと共に逃げるんだ。」

「はい!」

そう、ミラーモンスターに引きずられてミラーワールドに入つたから、ミラーモンスターと一緒にいれば、出れることも出来るのだ。
「さてと、その間にやりますか!」

『ストライクベント』

デストワイルダーの爪、デストクローザーを召喚する。

「ふつ、はあ!」

切りつけ、刺すということを何回も繰り返す。

そして、デストクローザーを外し、デストバイザーを構える。

「残影斬!」

その奥義は覚えていなかつたはずだが、何故かハヤトは使えた。
(なんか、引っ掛かるなあ…)

「…あ、やつぱり復活しますか。」

デイスパイダー・リボーン。なんか、人形が見える。

毒針を飛ばしてくるが、デストバイザーではねのける。
「やつぱりデイスパイダーは強いな。」

そしてカードを入れる。

『フリーズベント』

デイスパイダーは動けなくなつた。

「終わりだ。」

『ファインバルベント』

デストクローザー、デストワイルダーを召喚。そしてデストワイルダー

が叩きつけ、抑える。

「これで、止めだあ！」

デストクロードで引っ搔き、冷氣で凍らせ、最後はデストワイルダーとの連携パンチで粉碎した。

「ふう、ブリザードのデータはあとどんだけいるかな？」

そしてハヤトは帰つていった。

第15話 一夏の帰還

「ここはルクスの自室。そして、そこには男二人がいた。

「…僕は、いや、僕達はこの世界につれてこられた。そう言うことなんか。それを認識しているのは…」

「俺と、ルクスさんだけなんだな。」

そう言うハヤト

「いや、あと七人いる。」

そう言つて電話を出すルクス。そして合図すると、左右の目の色が違う、銀髪の少女二人が入ってきた。

二人の名前はもう知つてているであろう、

エーリル・ヴィー・アーカディア
ヘイズ・ヴィー・アーカディアだ。

そして電話からは、

『ルクス君かい？とりあえず今からつてことね。』

という声がした。

そして数分後、窓から四人の男、一人の少女が現れた。

「参りましたわ、主様。」

「久しぶりだな、ルクス。」

「久しぶり、ルクス君。」

「お久しぶりだね、ルクス君。」

上から、切姫夜架、東城刃更、天霧綾斗、黒鉄一輝だ。

…窓からやつて来た理由？そりや、身体能力の高い人達だし、簡単に入つてこられるからね。

「さてと、この世界についてわかつたことを話そう。」

ルクス達はふりかえる。

ルクス達が気付いたのはあの戦いのあとである。

（回想）

「やつぱりおかしいな、この世界。」

ルクスがミラーモンスターを倒したあと、違和感を覚えたのだ。

「…まるで、アビスのようなん…

ん？アビス？う、頭、があ！」

ルクスの頭が突然、痛くなりだした。

そして、

「おもい、だした。」

ルクスは今まで、自分の世界のことを思い出したのだ。

そして、ルクスはそのあとに神崎海人のところへ行つたのだ。

「…とまあ、こんな感じだね。確か、刃更君達は…」

「最初からだつたな。」

「うん。」

どうやらこの四人は最初から異世界だと知つていたようです。

「とばされた理由は知つてるの？」

ルクスが疑問に思う。

「多分さ、海人が関わつていそくなんだよね。」

「あ、それはわかるかも…」

そして刃更は言う。

「なあ、一夏はどうなんだ？」

「あー…確か『あつちの世界』にいるとと思う。」

そうルクスがいうと、

「まあ、とりあえず一夏は海人がなんとかしてくれるだろ？」

「うん、それはりえるね。」

そう言うヘイズとエーリル。

「さてと、解散の時間だよ…ん？なんか空から声が聞こえるような…」

そしたら、

「我が魂は、ZECTと共にありイイイイイ!!!」

一夏はダークウイングのマントを羽にしてスピードをつけて降りてきた。

あーあ…

一夏、やりやがった…。

※なんでこんなことをしたのか？インフィニット・ライダージオウ

の第9話を見ればわかる。

つまり、駄作者がやりたかっただけなのだ。

そして火の鳥になつて降りてきているヴィシシュヌ。こちらも、かなりのスピードをつけて降りてきた。

「ただいま、海人。」

「海人さん、今もどりました。」

「ああ、ご苦労だつた。」

変身を解く一夏とヴィシシュヌ。

そして一夏は海人にあの事を聞いた。

「海人、仮面ライダーってなんなんだ？ ISライダーと何が違うんだ？」

「それはだね…」

※ルクスに話した内容とおなじなので割愛。

「…というわけだ。」

「つまり、常磐ユウヤは最新のライダーってこと？」

「ああ、そうなる。」

そして一夏は思い出したように言う。

「そろそろ、向こうの世界でいろんなものもらつてきたよ。」

海人は中身を確認すると、

「…さすが、馬鹿と天才は紙一重つて言うほどだな。」

海人は一瞬でわかつたようです。

そして海人は空を見上げ、

「一夏。実はな、ミラーモンスターは最近、人になれようになつたんだ。」

「え？ つまりダークウイングは!?」

「まあ、特定のミラーモンスターだからわからないがな。」

「へえー」

「とりあえず、ご苦労様。帰つて寝とけ。」

そして一夏は自室に戻り、眠りについた。

「：一夏君、お前達は、大切な者のために命をかけるか？私はできる。だが、もし私がへまをしまつたら一夏君達は命をかけることになる。そこはわかつてほしくないが、わかつておいてほしい。」

そう悔し気味に呟く海人が夜のＩＳ学園の屋上にいた。

朝、一夏が起きるとそこには：

見知らぬ美少女が寝ていた。

第16話 平行世界のお土産

一夏は朝起きたとき、布団の中に温もりを感じた。

(ん?なんだ?)

そして、めくつてみると…

全裸の美少女（巨乳）が寝ていたのだ。

「…は？」

一夏はしばらく固まってしまったのだ。

そのあととの話をしよう。

ヴィシュヌ達と同じ部屋だからすぐに見つかり説教される。が、起きた美少女が一夏にすぐに抱きつく。

「マスター」

「いや、誰!？」

一夏がめっちゃ驚く。

「えへ、忘れたんですか？ボクですよ、ダークワイングですよ。」「は！」

「まあ、驚くしかないと思いますけどね。」

そして一夏から離れ、

「しばらくこのままの姿でいよいよ思います。」「

ちゃんと服着ようか！」

あ、ヴィシュヌ達は放心状態です。

「…とまあ、こんなことがあつたんだ…。」「

いろいろあつたことを食堂でルクスに話した。

「一夏も苦労してるね。」

「はあ…」

朝からぐつたりとした一夏であつた。

一応、そのあと、服は筈のを貸してもらつた。（ようはそれだけ胸が

「ここからは中国娘のせいで血がかかつて見えなかつた。」

「あ、そうだ。」

そう言い出した一夏。

「向こうの世界からの特典があつたんだ。オニールにファニール。これをあげる。」

渡されたのはコメット姉妹専用のマキシマムマイティXとガシャツトギアデュアルだつた。

「お前達は戦闘経験が低いが、持つておいた方がいい。二人、あるいは一人でいたときに何か会つたら困るからな。」

「うん！」

「ええ、わかつたわ。」

そして一夏は食堂をあとにする。
場所は変わつて、整備室。

そこには簪と本音がいた。

「うーん……やつぱりかんちゃんのISは打鉄一式かなあ？」

「本音、もうゴーストがあるからいいよ……」

とこんな感じで話していた。そこに現れた一人の男。

神崎海人だ。

「久しぶりだね、簪、本音。」

「き、海人さん。」

「あ、かいかいだ。」

本音からはかいかいと呼ばれている。

「君達に渡すものがあつてね。」

そしてツールから取り出したのは、

平成ライダー眼魂、そしてジクウドライバーとライドウォッチだつた。

「この眼魂を簪に、そしてジクウドライバーを本音にあげる。私が作つたわけではないからな。会えるかどうかわからないが、会つたら礼を言つといたほうがいい。」

そして海人は一通り説明し、

ワームホールへと入つていつた。

「…いつちやつた。」

「あく、他にも聞きたいたことがあつたのに。」

「まあ、海人さんらしいね。」

そしてまた、整備にとりかかるのだった。

午後。

ここはアリーナ。

ミラーモンスター、ガルドサンダー（鳳凰型）がいる。そして龍我とルクスが戦っている。

ん？ 何故この組み合わせかつて？

それは：

『レツツブレイク！』

『スクラップフィニッシュユ！』

『ファイナルベント』

「ふつ、はあ！」

同じ龍つながり、そして必殺技も似ているからだ。

龍我の後ろにはオーラでできた龍、ルクスの後ろにはドラグレッダーが現れる。

そして二人とも同じ龍騎のポーズをとる。

『ダブルドラゴンライダーキック！』

そして倒したあと、龍我とルクスはぐつたりして、

「…ふう、なんとかなつたな。」

「はい。」

その場に座り込んだ。

あ、戦兎とはと言うと、

「うーん…、ハザードはやつぱり暴走するな。」

考え込んでいるところにワームホールが開き、逆さまに出てきた、

「地獄からの使者！スパ○ダーマッ！」

テー¹テレツ²テー³テテ⁴デ⁵！テテツ⁶テテツ⁷テー！

「…お前そんなキャラだつたか？ 海人。」

「前世はそうだった。」

なんと海人は前世持ちだった。

「んで、何しに来たの？」

「これを渡すためだ。」

そして取り出したのはUSBメモリだった。

「何これ？」

一通り説明。

「…とまあ、こんな感じだ。会つたら礼を言つといったほうがいいな。」

「ああ、そうしどく。」

そして、IS学園は一学期を迎える。

第16，5話 また財団Xだよ… あ、そうだ！平行世界でアナザーライダーを出そう！（迷案）

時はさかのぼる。

神崎海人はIS学園の外を歩いていた。そこで、

「何だ!?まさか！」

男の悲鳴が聞こえたのだ。海人はまさかと思い、走つていった。

男はミラーモンスターに捕まり、引きずられていった。

「まざい、変身！」

海人は疑似ライダーオルタナティブに変身した。そして、

『アドベント』

ミラーモンスター、サイコローグを召喚し、

『ホイールベント』

バイクにしてミラーワールドに入つていった。

「はなせつ！」

男は必死に手足を動かし抵抗していた。だがミラーモンスターは掴んだまま離さない。

「くそつ、このままかよ…」

男が死ぬ覚悟をしたとき、

『ソードベント』

「はあ！」

ミラーモンスターを切りつける音と共に現れたオルタナティブ。

そして男は解放されたのだ。

「君、大丈夫かい？」

「はい、ありがとうございます。」

「よかつた、遅かつたら食われているところだつたぞ。」

海人は一時的に結界をはり、その中に男を入れた。

そして海人はミラーモンスター「シザースムシャムシャクン」：

じゃなかつた、「ボルキヤンサー」の方を向く。

『アクセルベント』

スラッシュユバイザーにカードをスラッシュユする。するとオルタナティブの速度が一時的に速くなり、

「どりやあ！」

剣で何回も切りつける。

ボルキヤンサーはガードしようとすると、さすがにサバイブ並みの威力のある攻撃を何回もさせられたらボルキヤンサーもひとたまりもなく、

「ギシャ…」

瀕死になつていた。

「止めだ。」

『ファイナルベント』

カードをスラッシュユさせ、サイクローラーがバイクのまま無人走行する。そこにオルタナティブが飛び乗り、スピードアップさせ、足を地面にすり、バイクを回転させ、そのままミラーモンスターに突撃する。これがオルタナティブのファイナルベント、『デッドエンド』だ。

「ふう。」

ミラーモンスターを倒したオルタナティブは結界のところへ行く。「さあ、元の世界へ戻ろうか。」

「はい！」

男と一緒に海人は戻つた。

「それで、君は藍越学園にかい？」

帰り道、心配になつた海人は一緒に帰つていた。

「はい。本当は2人いたはずなんんですけど、2人とも、IS学園にいつてしまつたので…」

そこで海人はこの男が誰なのかがわかつた。
「もしかして君は、数馬君じゃないのかい？」

「え？どうして俺の名前を…」

男の正体は数馬だつた。

「すまない。私はＩＳ学園で働いていてね。彼らのことは知っているんでね。」

「じゃあ、2人は大丈夫なんですか？」

「ああ、彼らは大丈夫だ。」

そう話していると数馬の家に着いた。

「今日はありがとうございました。」

「いや、大丈夫だ。こちらこそ、弾君と一夏君のことではすまなかつた。」

「いえ、大丈夫です。あいつらが元気にしてたらいいので。」

そう言つてＩＳ学園に戻つた海人であつた。

海人がミラーモンスターと戦つているとき。

街中では、ルクスと一夏が突然黒ずくめの男にネビュラスチームガンを向けられたと思つたら、

『ギアエンジン！ギアリモコン！ファンキーマッチ！』

「…バイカイザー！」

『フイーバー！』

合体してバイカイザーになつたのだ。

「なんなんだ…、まさか、財団Xか…」

「これは戦えつてことじやないのか？」

そしてルクスと一夏はお互いの顔を見て頷き、カードデッキをだし、構える。

ルクスは左をひいて右手を左上に伸ばす。一夏は左手を後ろに、右手を前に持つてきて体をすこし捻らせる。そして、

「変身！」

仮面ライダー龍騎、仮面ライダーナイトに変身した。

「やあ！」

ナイトはダークバイザーで斬りかかり、龍騎は殴りかかる。だが、それを簡単に跳ね返し、素早く腹などにパンチを決め込むバイカイザー。

「ぐふつ!?」

「がはつ!?

映画のラスボス級に苦戦する龍騎とナイト。そこから追い込もうとするバイカイザー。

一気にエネルギーを放出し、そのエネルギーが歯車を形成する。その歯車を二種類にわけ、龍騎とナイトにあてる。しかもそれは、連続で当てくるのだ。

『ガードベント』

龍騎とナイトはガードベントするものの、その圧倒的なエネルギーの塊に耐えきれず、吹っ飛ばされる。

「う…、ここ」の状況を開闢するには…」

カードを一枚ひいたらヒールベントとアクセルベント。だが、ヒールベントはどつちかにしか使えない。だからナイトは、一夏は渋っていたのだ。

そのとき、

「はああああ！」

勢いのある声と共にやつてきたのはオルタナティブだつた。

オルタナティブはあるあと帰ろうとしたが、高エネルギー反応を検知し、そのままここへ来たのだ。

そしてオルタナティブはバイクに乗つたままバイカイザーに体当たりして突撃した。

しかし、体当たりして吹っ飛ばしたのはいいが、自分にも衝撃がくる。だからオルタナティブも吹っ飛ばされ、そこらへんに寝転がつた。

そのとき、主を守るべく、ドラグレッダーとダークウイングがアドベントせずに出でてきたのだ。

「ここだ！」

『ヒールベント』

ナイトは一気に回復し、龍騎も立ち上がる。

そして2人はカードを一枚ひく。そのカードはサバイブだつた。

龍騎はドラグバイザーの前にサバイブ（烈火）をかざし、ナイトはダークバイザーの前にサバイブをかざす。

すると、龍騎のドラグバイザーが進化し、ドラグバイザーツヴァイとなり、ナイトのダークバイザーもダークバイザーツヴァイに進化した。

そして龍騎はドラグバイザーツヴァイの口をあけ、そこにサバイブのカードを入れて閉じる。

ナイトはシールド部分にサバイブのカードを入れる。

『サバイブ』

エコーのかかつたような機械音声と共に、龍騎は炎、ナイトは風を纏うように強化される。

そしてドラグレッダーも進化し、ドラグランザーへとなり、ダークウイングもダークレイダーへと進化したのだ。

『ソードベント』

龍騎サバイブはソードベントでツヴァイをソードモードにし、ナイトサバイブは前に『向こうの世界』からもらったカード、『牙狼剣』を装備してバイカイザーに攻撃する。

パワーも格段に上がったからさすがのバイカイザーでも逆に押しきられてしまう。

「たあ！」

龍騎サバイブが斬つたところにナイトサバイブが追い討ちをかけるように攻撃をする。

その攻撃で（主にナイトの『牙狼剣』の効果で）バイカイザーは足をついてしまう。

そこに追い討ちをかけるように、

『ナステイベント』

ナステイベントで動きを完全に封じる。

「止めだ！」

「ああ！」

『ファインナルベント』

龍騎サバイブはドラグランザーバイクモードで炎を吐きながら突撃、ナイトサバイブは、

『烈火狼斬波』！

技名を叫びながら翡翠色の炎を纏つた牙狼剣で上段切りを放つた。
そしてバイカイザーは機能停止。

財団Xは捕らえられることになった。

完全なる余談だが、何故かそこには赤いジャケットを来た人がいたとか。

あれ？この世界にいるはずじゃなかつたような…
ま、いいか。

「海人！」

ルクスは変身を解除し、そこに寝転がつていた海人に声をかける。
だが、

「海人、それ…」

そう。オルタナティブのマスクは割れ、海人の顔が見えていたのだ。他にも、体の一部に亀裂など、ライダーシステムに不具合が出るほどの破損をしてしまつたのだ。

「まあ、大丈夫だ。」

「大丈夫って、でも…」

「まだ、一台ある。」

そう言つて海人はにつこりと笑う。

「ライダーシステムは完全ではないからな。完全に近い形だけだ。
まあ、人間と同じだ。さあ、帰ろう。いよいよ二学期が始まる。」

そして一夏達はI-S学園へと帰つていつたのだ。

第20話 ハザードは止まる…（O W O ;）ウエ!?ソナノ!?

s i d e 戰兔

さてと…

俺は天つ才物理学者…つてよく考えたら俺は学生なのになんで学者つて言つてるんだ?なにか、こう、思い出せないものが…

『ようは作者の伏線つてわけかあゝ。駄作しかださない作者にしてはよく考えたなゝ。』

(は?!うるせえ!俺は確かに駄作しかださんけど伏線くらいは張れるわ!…げふ!) game over

『駄作者は小説に出てくるな!』

「スターク!?お前、何を知つている!?

『確かにお前は前の、いや、この世界ではなく、本当の世界の記憶が無くなつていて。つまり、お前の記憶のことは俺が知つているのさ。』

スタークが俺の記憶を知つていて?でも、面識は…

「う…頭が!」

『思い出せ!桐生戦兎お!』

「う、があああああ!」

思い、だした…

「俺は、俺は、俺は!俺は人々を守るために!ラブ&ピースのために!仮面ライダーになつたんだ!」

『そうだ!それでいい!戦兎お!』

は?!スターク!?つてか、あれは!

『コブラ!ライダーシステム!エボリューション!』

あれは、どこから持つてきたんだ!?

『are you ready?』

『変身!』

『コブラ!コブラ!エボルコブラ!フツハツハツハツハ!』

まずい!戦う氣か!?ここは…つて、何気にアリーナに移動してる?

『暴れるにはちと狭かつたからな。』

俺はスターク：いや、エボルトに違和感を覚えながらスクラツシユ
ドライバーを出す。が、

『戦兎、ビルドドライバーを使え。ハザードトリガーもな。』
エボルトがそんな事を言い出した。

「暴走するにきま…」

『そう焦るな。ここには誰もいない。そして、お前のハザードトリ
ガーはハザードレベル+『あの世界』にいつてデータを貰つてきたか
ら10分は大丈夫なはずだ。安心しろ。暴走したら俺が止めてやる
！』

⋮このエボルト、俺の知つてるエボルトではない⋮？何でこんなに
親切なんだ？俺を騙すためなのか？

⋮いいだろう。その言葉、一度、一度だけ信用する。』

『一度だけかく、残念。さて、決めゼリフを言つてもらおうか！』

「さあ、実験を始めようか！」

『ハザードオン！』

俺はハザードトリガーをポケットから取り出し、ビルドドライバー
をつけ、取り付けた。

『ラビット！タンク！スーパーべストマッチ！』

『ガツタンゴットンズツタンズツタン！ガツタンゴットンズツタン
ズツタン！』

『a r e y o u r e a d y?』

「変、身！」

『アンコントロールスイッチ！ブラツクハザード！ヤベーイ！』

「勝利の法則は、決まった！」

『行くぞ！』

「うおおおお！」

ハザードの力で俺は強化されているから力は強くなっている。
ラビットの力で跳ね、タンクの力で蹴る。

だが、エボルトもこの戦法は知つている。だけどわざと攻撃を受け
ているようにしか見えない…。本当になんなんだ？

10分後：

『ハザードレベルが簡単に6を越えた…、そろそろか。』

「う…！」

頭に来たこの衝撃。やつぱりきたか。

『マックスハザードオン！』

『させるか！』

その瞬間、エボルトが阻止した。

『間に合つたな。』

「エボルト…？」

俺は完全に理解不能だった。あれほど憎かったのに、なんで俺を…？

『贖罪だよ。本当ならあのとき死ぬはずだつたからな。ま、この世界も悪くないからな。あ、そうだ。少し体を借りるぞ。』

そう言つて俺の体を不意に乗つ取つてきた。

s i d e エボルト

さて、戦兎の体を少し借りてさつさと作るか。

※このとき、篠ノ之束の体は解放しました。

『ふつーはああああ！』

俺は体内からフルフルラビットタンクボトルを生成。そして、今度はパンドラボトルをエボルドライバーにセットする。

そして、レバーを回す。

『ぐ、うううう！』

それをさらに回し続ける。

さすがの俺でも耐えるのに力がいるな。これをあのとき耐えた戦兎は本当に凄いなと思ったわ。

俺はパンドラボトルからジーニアスフルボトルを生成した。

『うつーやっぱり毒か…まあ、直ぐに回復するからいいか。』

そして思つたジーニアスとフルフルラビットタンクを持ち戦兎と束を担いでI S学園に行つた。

s i d e ???

そろそろ来てもいい頃合いだな。

「よつ！」

その声は、あの石動惣一だつた。

「エボルトか。その姿気に入つたのか。」

「まあ、昔の姿なんで。」

私は戦兎と束を医務室に運び、寝かせた。

そしてあの話へと移る。

「エボルト、状況は？」

「はつきり言つて、最悪だ。俺もこうなつていたとは思わなかつたらかな。」

エボルトはため息をつき、話を続ける。

「んで、パンドラタワーは無いものの、それに変わりそうなものを作つてゐる可能性がある。あいつはそういうやつだからな。」

「そうか。あと、フルフルとジーニアスは作つたが、『あと一つ』はどうするつもりだ？」

「龍我を乗つ取り、ジーニアスを使う。だからしばらくジーニアスは俺が持つていて。」

「どうか。」

私はエボルト用のコーヒーを持つてくる。

「お前も俺と同じ類いなのか？」

そう聞いてくるエボルト。

「そうでもなきや、お前の存在を最新から知るわけないだろう。」

「ふつ、そうか。」

「しかし、最初は驚いたよ。最初、ボロボロの状態でやつてきて、『手伝つてくれ！愛と平和のために！』とか。まさか、この世界の人間に毒されたとか？」

「まあ、そんなとこだな。」

エボルトはエボルドライバーをもう一つ出し、

「これを篠ノ之束に。体を乗つ取らせてくれたお礼とお詫びだ。明日くらいに束と戦兎は復活する。それと。」

エボルトは息を吸い、

「俺は何があつても、戦兎達の味方だ。例え、俺が、命を亡くしても。」

私は、まさかそんな言葉が出るとは思わなかつた。

「それじゃ、チャオ！」

エボルトはトランスマチームガンを使い、消えた。

「…愛と平和のために、か。」

私は窓から外を眺めていた。その空には、星の中で火星が一番輝いていた。

第二章 平行世界の一夏君

第17話 平行世界のIS

ここはIS学園のある場所り

ルクスと海人がライダーシステムを改良している。

そこで海人が、

「あ、そうだつた。」

と思い出したように言う。

「どうしたの、海人？」

ルクスがそれに反応し、声を返す。

「ちよつと出掛けてくる。すぐ戻るから。」

そして立ち上がり、ワームホールを形成する。

ルクスは何かを察して、

「わかつた、気をつけて！」

そう言つて、見送つた。

「ああ。」

海人はワームホールへ入つていつた。

「…もしもし、檀黎斗か？」

『私だ。何かようかな？』

話ながら海人はオルタナティブ・ゼロへと変身する。

そこにアドベントで呼び寄せたサイコローグをホイールベントでバイクモードにして走りながらワームホールを進んでいく。

「そつちの世界の一夏は？」

『助けたよ。私も何故か、ほつとけなくてね。とりあえず修行は終わつた。今、私は別のところへ行つている。』

「…無茶はするな。私からはそれだけしか言えない。」

『いいだろう。』

そして電話を切り、

「跳ばすぞ！」

『アクセルベント』

そのまままつすぐ突き進んでいった。

少し時をさかのぼる。

「ふつ、はあ！」

ここはとある場所。

ヴァレンティナと箒と檀黎斗がいる。

『カミ技！』

『ゴッドマキシマム クリティカルブレッシング！』

一夏は仮想バクスターにキメ技…じやなかつた、カミ技を発動した。

そして、仮想バクスターは消滅した。

『game clear!』

「合格だ、織斑一夏君。それじゃ…あ、そういえば。」

思い出したように黎斗はある物を取り出す。

「箒君、君にはこれを。」

箒にバグヴァイザーを渡した。

「それは竜戦士グラファイトになるものだ。君のISでは未知の敵には難しいからね。それと一夏君。君の白式を改造させてもらつた。いや、正確には引き出させてもらつた、という方がいいかな？」

「どういう、ことですか？」

「白式第三形態、ホワイトテイル、つまり『王理』だ。これにより効率よく零落白夜が発動できるようになつた。いや、まず確かめるとい

い。」

「え?! 第三形態!？」

「それって姉さんでもできないんじゃ…」

いろいろなことをやつてくれた檀黎斗。本当にこいつは檀黎斗なのか？

「それじゃ、私は次の世界に行かせてもらおう。」

「え? なんですか?」

「私は君のような、不幸な人間を、正確に言えば『本当の主人公』を助

けるために動いているんだ。もともと、私は死んでいてね、生き返る代わりに助けるという選択をしたんだよ。だから、命を粗末にしないでくれ。そのガシャットは未来へ生きていく餓別だ。」

やつぱり、あのとき死んで心入れ換えたんだ。

「え？でも、黎斗さんのガシャットは？」

「私はあれを使うからね。」

そして、最後にこんなことを言つた。

「君は、絶対に悪に堕ちないでほしい。私みたいに、その力を個人的に利用し他者を理不尽に攻撃すると、仮面ライダーという資格はなくなるから。いいかい？絶対だ。」

「はい！」

檀黎斗は去つていった。

「いつちやつた。」

「ですが、戻る可能性もあるでしょう。」

そう考えるヴァレンティナ。

「そうだね。」

その後少し時は進み、（ＩＳの世界での）夏休み前半の終わり近く、

「ティグル、準備はいい？」

「大丈夫だ。ありがとう、ミラ。」

「ええ、そうでもしないと妻として失格よ。」

「そうか。」

そしてフツ、とティグルは笑い、

「お互い、頑張ろう。」

そう言つたのだ。

ミラも、

「ええ！」

と返事をして、彼が来るのを待つていた。

「すまない。ちょっと遅れてしまつた。」

ここで神崎海人の登場だ。

「大丈夫よ。」

「それで、何があつたんだ？」

そう聞くティグル。

「君たちには行つてほしい場所がある。そこは…」

「I S 学園、でしょ？」

そうミラは言う。

「何で知つている？」

そう聞き返す海人。

「いろいろあつたのよ。」

「正確に言うと、この前檀黎斗という人が来て教えてくれたんだ。」「どうか。ならわかつていてるな。」

「はい。織斑一夏の護衛みたいな感じですよね？」

「ああ、頼んだぞ。」

「はい。なんとかやつてみます。」

そうティグルが言うと、ワームホールが開き、

「バイクにのつて、そのまままっすぐに進む。すると I S 学園につく。私もすぐに追い付く。バイクの使い方は覚えているだろう？」

「はい、前から使つていてるので。」

「リュドミラ、君はティグルの後ろに乗れ。」「わかつたわ。」

「そうだ、言い忘れていた。リュドミラ、向こうの世界にはヴァレンティナ・グリンカ・エステスがいるが同じ人物と思わないように。名前と容姿、武器は一緒だが、一夏一筋だからな。」「わかつたわ。」

「さあ、時間だ。」

「それじや、またあとで。」

「ああ。」

そして I S 学園の二学期。

「皆さん、お久しぶりです！では、二学期最初の授業を始めますよ！」

そう張り切つていてる山田先生。だが肝心なことを忘れていた。

「忘れているぞ、山田先生。今日から転入してくる二人だ。一人は男

だ。入れ。」

「ティグル・バルムド・ヴォルンだ。よろしく。」

「リュドミラ・ルリエよ。よろしく。」

とまあ、自己紹介したけど、うるさかつたからミラが、
『ティグルは私の夫だから、手を出したら凍てつかせてあげるわよ。』
と言つたので教室は一気に堕落ムードになつてしまつた。

「あとは、教育実習生として二人入る。入れ。」

「神崎海人だ。訳あつて男性だがＩＳを動かせる。よろしくお願ひします。」

「ヴァレンティナ・グリンカ・エステスです。よろしくお願ひいたしますわ。」

海人はちよつとひねくれた感じの男だがやつぱりなんかカリスマ
性があるのか、教室の声はうるさかつた。

夕方、食堂にて織斑一夏復活祝いが行われていた。

「というわけで織斑一夏復活祝い！」

「つてなんで楯無先輩がいるんですか!? まだ話してもいないのに!?」

「あ、一夏調子戻つてる。」

「お、おりむく戻つてきた。」

簪と本音がそんなことを言う。

「あ、そうだな。戻つてきたよ。皆のおかげで。」

「嬉しいわー、お姉さんなんでもしてあげちゃう！」

「やめとけ、更識楯無。ここは食堂だ。」

その声で神崎海人の方を見る皆。

「あら、今日入つたばかりの神崎先生じゃないですか。何かあります？」

そういう楯無。

「一夏を見に来ただけだ。それじや…」

「待つてください。その口ぶり、俺のことを詳しく知つてゐんじやないんですか？」

そう言つて立ち上がる一夏。

「そうだな、詳しくはない、と言えば嘘になる。例えば、君の両親がない理由とか。」

!?

そう言うと一夏は何故かドキッとした。

「でも、今の一夏では倒れてしまうからな。私はこれで失礼する。
いずれ話すときがきたら、話す。」

「一夏君、久々にお姉さんがＩＳの稽古してあげようか？」
「わかりまし……あ、そういうえば！」

「田代、竜又、三三二二二二二二」

卷之三

「どんな改造されたの？」

「えつと、それは…」

話は前日にさかのぼる。

卷之三

「装着してみればわかるだろう？」

「そうだな、やつてみる。」

一夏と簾とヴァレンティナで集まり
白式を見てみると、すると

卷之二

「これは…魔改造というか進化…いえ神化していますね」

前よりごつごつした感じがなくなり、流線型になり、速度も前の倍以上も出せる、そして零落白夜はまさかのシールドエネルギー無しで使え、翼のビームミサイルに零落白夜の効果がついていたり、エネルギー効率が凄いよく、下手すれば無限に連続稼働することが可能のISとなつていたのだ。

更に
⋮

「げ!? 新しい単一仕様（ワンオフアビリティー）が!?」

「どんな能力なんだ!?」

確認すると名前は

『夕凪灯夜』といい、能力はISの初期化、つまりどチートISなのである。

「…これで戦つても勝てるでしょ?」

「ああ、そうだな…」

「私も、今回ばかりは驚いてばかりです。」

簪は完全に頭が混乱、ヴァレンティナも少し混乱していた。

「…とまあ、こんな感じだつた。」

「一夏君、誰がそのISを手入れしたの?まさか…」

「いや、束さんじやない。あの人がするのは大体俺に迷惑がかかることだ。」

そう言つてあきれる一夏。

「檀黎斗っていう人だ。」

「え?! 檀黎斗?!」

簪が過剰に反応する。

「簪、知つてるのか?」

「知つてるもなにも、仮面ライダーエグゼイドにててくる社長だったはずだけど、あれってテレビの中の話だけど…」

そう言つて考える簪。

「まさかだけど、テレビでらつていて別世界では本当に起こっていたりして…」

「正解だ。」

また出てきた神崎海人。

そしてついてきたのは今日転入してきた

ティグル・ヴルムド・ヴァルンと
リュドミラ・ルリエだった。

「改めて自己紹介しよう。私は神崎海人。別世界の住人だ。」

「ティグル・ヴルムド・ヴァルンだ。俺も別世界の住人だ。俺のことは名前が長いからティグルって呼んでくれ。よろしくな。」

「リュドミラ・ルリエよ。私もティイグルと同じ別世界の住人よ。ティイグルは私の夫だから。よろしくね。」

I S側も自己紹介したところで、

「さて、解散時間だ。」

そう切り上げる海人。

「さーて、明日から忙しくなるぞ！」

そう意気込んだ一夏。そう、専用機持ちタツグマツチがあるから

だ。

第18話 専用機タッグマッチ（という名のオリ主（笑）との戦い）一夏覚醒

なんかいろいろあって専用機タッグマッチの日がやつてきた。

ペアは一夏と海人。

ティグルとミラ、ヴァレンティナは今回は見学だ。

そして今、

「はあ、まさかね…」

「ああ…」

そう、二回戦でオリ主とあたってしまったのだ。

ちなみに、一回戦目は、零落白夜フルバースト、ファイナルベントによるデッドエンドでセシリ亞、鈴ペアをぶつ潰した。ちなみに、この試合は諭吉はアップ中だったので見ていません。

諭吉ペアはシードだから仕方ないね。

「ついにあいつと勝負かよ…」

一夏は前に起こったことを回想していた。

『エボルテックファイニッシュ！チャオ！』

「うわああ！」

必殺技により吹っ飛ばされた一夏。そしてISが解除される。

「…お前は、ISを兵器だと思っていない。だからそんなに弱いんだよ。」

「く、そ…」

臨海学校では束には「興味なくなつたよ。今はゆつくんのうがいいね。」と言われた。

織斑千冬にも、

『お前は謹慎処分だ。』

と言われて（なにもしていないのに、ただ密漁船を守つて落とされただけなのに。）、絶望していた。そのときに心のケアをしていたのは筈と更識姉妹と布仏本音、ヴァレンティナ達だった。
だが、それよりもストレスが限界に達してしまい、自殺しようとしたのだ。（これでプロローグにつながるというわけ。）

回想終わり

「…あいつは、この手で潰す。」

一夏は拳を握りしめ、アリーナへ向かつていった。
そして海人も、

「やるか。」

そう意気込んでアリーナへ向かつていった。

「はあ!? あいつ、ISにまた乗つてんのか!?」

珍しく声を荒げる蛇沼諭吉。前に一夏にISに乗るなど言つたからだ。

「また倒せばいいんだ…」

だが、諭吉は知らない。一夏が大幅に強くなつたことに…

アリーナでは

「一夏！ 何故お前はISに乗つた！ お前は、もうIS操縦者失格だと言つただろ！」

「お前に一番言われたくないな。」

そして一夏は叫ぶ。

「来い！ 『白式・王理』！」

一夏は白式を第3形態で呼び出した。

「はあ!? 何で『王理』なんだ!?」

そういうながら焦つてエボルドライバーをだす諭吉。

『エボルドライバー！』

『コブラ！ ライダーシステム！ エボリューション！』

交響曲第9番第4楽章・歓喜の歌を模した音楽が流れ、

『are you ready?』

「変身！」

『コブラ！コブラ！エボルコブラ！フツハツハツハツハ！』

仮面ライダーエボルコブラフォームになつた。

「まさかね…」

そういうながら海人はカードデッキを出し、前に向ける。すると、ベルトが腹の前に出てくる。そして、カードデッキを上に投げる。

「変身！」

そして落ちてきたカードデッキをベルトに入れる。

「この力は、お前と同じ、仮面ライダーの力だ！」

海人はそう叫ぶ。

「嘘だ！なんで、なんでお前がそんなのを持つていてる!?」

動搖する諭吉。そしてペアのラウラは完全に置いてきぼりだつた。が、

『バトル、スタート！』

アナウンスにより、戦いが始まつた。

開始早々、ラウラは一夏の速さについていけなかつた。

最初は、ランチャーで遠距離攻撃をしていたのだが、全てかわされ、攻撃を少しずつ喰らつていたのだ。

（くそっ！何故こんなにも早いのだ？白式のスペックを見せてもらつたが、これほどまでに早いとは…）

そのときに、コンソールを起動して画面を見る。一夏の白式の解析が完了したのだ。

「はあ!? 第3形態だと!?」

つい口に出して動搖したラウラ。そこをあえて一夏は攻撃しなかつた。

「自分とのおしゃべりは終わりか？なら、止めをさしてやる。」

そして一夏は拳に零落白夜のエネルギーを溜める。

「つ!? 無駄だ！私の停止結界に、近づくことはできない！」

ラウラはとつさにA I Cを起動する。そしてそこに一夏がエネルギーの込めたパンチを繰り出す。

「無駄だ！・どんな攻撃も、通用しないっ！」

ラウラは勝ち誇ったように言うが、

「ふつ・・。そういうのは、ちゃんと跳ね返してから言うもんだろ。

……『^{リコイル・バースト}強制超過』』

すると、拳が光輝き、AICをぶち破つたのだ。

「大当たりだ！」

今度は右足に零落白夜のエネルギーを溜め、ジャンプする。そして、

「はあああ！」

氣高い声とともにつき出された右足。言わずもかな。知っている人は知っているだろう。

そして、それはラウラに当たった。

ひとたまりない攻撃に、一気にシールドエネルギーは削れてしまつた。

このとき、諭吉は助けにいこうとしたが、

「助けにいこうとしているが、そうはさせない。」

『アクセルベント』

急に加速したオルタナティブ・ゼロに応戦しようとして、諭吉も加速したのだ。

だが、それは間に合わず、

『ラウラ・ボーデヴィッヒ、シールドエネルギー エンブテイ』

ここでラウラが脱落。

「くつ、すまない。」

ラウラは苦し紛れにそういう。

「いや、よく頑張った。」

そう言いつつ、怒りの顔で睨み付ける諭吉。

「お前達は、絶対に許さん！」

そういってトリガーを出す諭吉。

『オーバー・ザ・エボリューション！』

「一夏、あいつは本気を出すぞ。といつてもまだ裏がありそだが。」

そういってオルタナティブ・ゼロ、海人は構える。

「そうだな。」

（回想）

「一夏、今回の諭吉の使うエボルは、最終形態が存在する。」

「それはどんなやつですか？」

海人はディスプレイにその最終形態の姿を映す。

『ブラックホールフォーム。こいつは胸部にある特殊変換炉「カタストロフイリアクター」で、エネルギーとなつてゐる未知の物質を破壊エネルギーに変換し、周辺の生命体の生命活動を停止させるほどのエネルギー、ブラックホールを利用した攻撃を可能にするという恐ろしい機能に加えて、戦闘能力を最大50倍まで引き上げることが出来るというデタラメじみたブーストを可能にしている。』

「そうなのか。」

海人は話を続ける。

「今日はゲンムを使わない。といつても正体がバレなければいいけどね。だけど、タツグマツチだから、バレるからね。」

そういう違う画像をディスプレイに映す。

「これは…？」

一夏は疑問に思う。

「これはね…、ブラックホールフォームをISで倒せる唯一の姿だ。…といつても、これをISといつていいのか…。まあ、元の世界からの言葉を借りれば、ライダー、かな？」

回想を終わらせた一夏は叫ぶ。

『白式・王理』！『完全装甲』！

一度、白式の装甲がはじけ、光の粒子となる。

諭吉は一旦ボトルを抜き、もう一回挿す。

『コブラ！ライダーシステム！レボリューション！』

『are you ready?』

そのとき、一夏と諭吉の声が発せられた。

「変身！」

「蒸着！」

『ブラックホール！・ブラックホール！・ブラックホール！・レボリュー
ション！・フツハツハツハツハツハ！』

諭吉は、その蛇とブラックホールを纏い、禍々しい姿になつた。
一方、一夏は光の粒子を纏い、そこから装甲が形成される。そして
一夏はマントをひるがえす。

その姿は、まるで物語に出てくる騎士のようだつた。

諭吉は、

「この姿で、止めをさす。」

と言い、一夏は、

「ISライダー一夏、見参！闇を纏いて、光となれ！」

そして一夏は海人に言う。

「この戦いに手出しが無しでお願いします。危なくなつたら自分の判
断で来て下さい。」

そう言われ、海人は、

「わかった。」

その一言だけを言つた。今の一夏は倒せるほどに強くなつていた
からだ。

「とりやあ！」

怒りを込めたパンチをかわしまくる一夏。

「くそつ！当たれ！」

そして早くも瞬間移動並の速さを出すエボル、諭吉。

しかし、その速さもどうつてことのない一夏。

「…ハザードレベルが足らないな！」

そう言いながら斬りかかる一夏。

「くつ!? 何で知つている!？」

「もう気づいているんじやないかなあ！」

そして諭吉は気づいた。

(まさか、あいつも！)

そう思い、急に敵を変える諭吉。

「つ!?

とつさに避けようとしたが、海人に当たった。

変身は解除されないものの、仮面の右目が割れてしまつたのだ。

「一夏!すまない!」この戦い、私も混ぜてもらう!」

そう言いながらカードを取り出し、スラッシュする。

『ホイールベント』

『アクセルベント』

『ソードベント』

ミラーモンスター、サイコローグをバイクにし、急加速して斬りかかる。

「そんな攻撃、効かん!」

だが、ブラックホールフォームの装甲は生半可な攻撃は効かない。
「やはりAP10000は必要か…、そうか!あのカードなら!」

一方、一夏は海人と交代する形で攻撃した。

「お前の相手をしている暇はない!」

「いいセリフだ!感動的だな!だが、無意味だ!」

そう言つて殴る一夏。それを避けようとする諭吉。

「海人さん!必殺技を!」

「わかった!」

『ファイナルベント』

諭吉も、レバーを回し、右足にブラックホールのエネルギーを溜める。

「これで終わらせる!」

『r e a d y g o!』

そういつて飛ぶ。

一方、一夏はさつきと同じように零落白夜のエネルギーを右足に溜める。

オルタナティブ・ゼロはサイコローグのバイクを前輪で立たせ、後輪に足をつき、そこで後輪を回転させる。

そしてそのエネルギーを右足に溜める。

そして二人同時に飛び、

「「ダブルライダーキック！」

『ブラックホールファニッシュ！チャオ！』

そして力のこもったライダーキックがぶつかり、爆発した。

そして…

海人は、変身が解除されてしまった。

『神崎海人、オルタナティブ・ゼロ シールドエネルギー エンプ
ティ』

「くそ…だめだつたか…。だが、これであいつがどうなつてているかだ
な…」

そして諭吉の方の煙が霧散すると…

諭吉は倒れていたのだ。

『蛇沼諭吉 仮面ライダーエボル シールドエネルギー エンプ
ティ』

会場はどよめきが走つた。

これを衛星から見ていたやつは、

「チツ、ゆつくんを邪魔するものは、死ねばいいんだ。」

そういうつてボタンを押す。

そして I S 学園に無人機三体を向かわせたのだ。

第19話 僕達を誰だと思っている！

試合が終わり、ピットに戻ろうとする一夏と海人。だが、そこに無人機三体が現れた。

「…あーあ、死に来たか。」

一夏は敵をスキヤンする。

「なーんだ、敵は無人機か。」

「どうする？私にはもう武器がないが…」

そう言つて戦闘モードになる海人。

「生身でなんとかなるでしょ？あとあれとか。」

「まだあれは最終確認中だ。」

そして、一夏は2体、海人は1体を相手にすることにした。

「なんで通つちゃいけないよの！」

凄くリュドミラが怒つている。

「危険だからに決まっているでしょ！」

そう返す鈴。

「だつたら、助けにいかないのは何故？」

「それは…、バリアが固定されてて助けに行けないからよ！」

「そつか。なら、壊せばいいってことね！『ラヴィアス！』『リュドミラの手元に竜具、ラヴィアスがやつて来る。』

そしてリュドミラはそのバリアを壊そうとした。

だが、

「!?させないわよ！」

すかさず鈴が止める。

「なんで止めるのよ！」

「当たり前よ！バリアわ破つたら、めんどくさいことになるじゃない！」

その言葉に怒りを覚えたのか、

「つ…！」

ラヴィアスの穂先から冷気がでて、リュドミラを覆う。

「やつぱりあなた、いえ、あなた達は一夏達のこと嫌つてはいるわけね。」

そして戦闘態勢をとる。

「あなた達とは、エレオノーラほどそりがあわないわ！」
突撃し、ラヴィアスで突いた。

「そこを退いてください、織斑先生。」

更識楯無は冷酷な声で言う。

「無駄な話だ。」

同じく冷酷な声で千冬は応じる。

「なら、生徒会長権限を使わせてもらいます。」

「さつきも言つただろう、無駄な話だと。」

ついに痺れを切らした楯無が、

「貴女は！ いつたい何を考えているんですか！？ 貴女の弟が！ 襲われて
いるんですよ！」

張り叫ぶように言う楯無。

だが、無情にも、その魂の叫びは千冬に届かなかつた。

「あいつはあのままでいい。私はそう思つてはいるが？ まあ、それでも
通りたいなら、私を倒してからにしろ！」

千冬は紅椿を纏つた。（しかたないよ、筈が拒否したからね。）

その言葉と行動に、頭に来た楯無は、
「わかりました…。なら！」

右目から一粒の涙がでた楯無は思う。
(無事でいて、一夏！)

「ミステリアス・レイディ！」

自身のISを纏い千冬に槍を突きつけた。
「生徒会長として、貴女を倒す！」

そんなこんなで皆が動いているが、やはり油断ができないのは一夏
と海人だ。

「はあ、そろそろあれ使つたほうがよくね？」

「まだだ。」

「夏はISを纏つて戦つているが、海人は生身のままだ。
さきにぶつ倒させてもらう。」

「わかつた。」

「夏は真の単一仕様、夕凧灯夜を発動する。

そしてそのエネルギーを剣に纏わせ、無人機二体に斬りつける。

そして、その二体はあつけもなくバラバラとなり、崩れ落ちた。

「あー…やり過ぎた。」

「そうか？私はそうとは思わないが？」

そう言いつつ、右手と左手を右の腰近くに構える。

すると、青色、白色、黒色のエネルギーが渦を巻くように両手の間に溜まる。

そして、

「真空、波動拳！」

青白い玉が無人機に向かっていき爆散した。

そして、二人は天を見上げて、

「俺達を誰だと思っている！」

と叫んだ。

これを見ていたティグルは、

「やつぱりか。」

と苦笑していた。

「ふう…初めて撃つたけど、意外にもできたな。」

力を出しきつた顔でその場に座り込む海人。やはり仮面ライダーがないとどれだけ苦戦するのかがわかる。

「さつさと帰ろうぜ、海人。」

「そうだな。」

そのとき、お腹の虫がなつた。

「…なんか、お腹すいた。」

そして、フルボッコにした二人は大笑いして、ピットではなく、出

入口の方に戻つていつた。

「なんで、なんで！生身の女にやられるのよ！」

鈴はISを中破くらいにさせられて、解除した。

「あなたが弱いからよ。当たり前のことでしよう？」

そう言つて引き返すリュドミラ。

「結局、私が行くまでもなかつたわ。ティグルはそんなことをわかつてから冷静だつたのね。」

納得して帰つていつた。

「やつぱり、世界最強は伊達じやないわね‥」

ISを小破させながらも、まだシールドエネルギーが残つてゐる楯無。

「ほう、小娘がよくここまで耐えられたものだな。」

そう言うけど、あんたはシールドエネルギーを回復できるんだぞ。何いつてんのかな？なかつたら死んでたよ。

「…そう、わかつたわ。：織斑先生、事が終わつたので、私は帰ります。」

「何!?」

後ろを振り向く千冬。

「それでは。」

ISを解除して、ピットを出でていつた。

「なんでなんでなんでえ！私の最新作の無人機ゴーレムⅢがああ！なんであんなISと生身の人間に負けるのをおお！」

天災は凄く腹立たしいらしい。

「ぐぬぬぬぬ…、ゆっくんは大丈夫かな？」

結局、天災は諭吉のことしか考えていなかつたのである。

悪魔のプロローグ

私は神崎海人。

色々あつたから日記にしておこうと思う。

この話は、何故か一私達が世界の敵になる話である。

この戦いの始まりは些細なことであった。

ある男が傷つけられ、それに怒った女がそのもう1人の男に喧嘩を売つてしまつたのだ。

そして、たまたまISを装備せず（私が整備中）に出掛けていた一夏が狙われるという事が発生したのだ。

しかも、その女達はISを装備して。

衛星軌道上からも攻撃しようとしたバカもいたようだ。

天才と馬鹿は紙一重だとつくづく感じさせてくれるよ。

彼はそのあと：

その女どもを蹴散らしたのだ。

私はこれくらいであつても大丈夫だろうと思つていた。

だが、ビームライフルで腕を掠めてしまつたらしい。

でも、彼は超回復があるのでなんともなかつたとのこと。

私もそのことは知つている。

が、そのあとは悲惨だった。

女どもはそれに懲りずに、狙つていたのだ。

商店街をつきぬけ、大きい広場に攻撃を当てずに誘導したのだ。
しかし、何故ここまで暴挙を何故平然と行えるのかと、私は考えた。

考えてみれば、女どもの1人に金持ちがいたらしい。

そいつが多分IS委員会に掛け持ち、さらに商店街を荒らす許可がおりたのだろう。

当然、ゲリラみたいだったので人に当たりそうだったのでこと。

それを許すIS委員会は一体なんなのか：

それでも、彼は攻撃を受けたりして、被害を最小限に押し留めた。

私は本当によくやつたと思つてゐる。

ちなみに、衛星軌道上の攻撃についてだが、これは『あれ』を起動して対処した。

そして、そのあとだが、

彼は一人で倒したこと。

さすがに出来るか？と思つていたが、『あれ』を使ったとのこと。まあ、後々バレるから良いか。と使つたらしい。

そして、女どものISは修復レベルがDだったとのこと。ま、本国に帰つて修理とのこと。

そしてこれを黙つてはいない団体がいた。

そう、女性利権だ。

女性利権は、「何故男がイキがつてゐるんだ！」とか、「男は黙つて女の奴隸になればいいのよ！」とか色々言われていた。

そして、IS委員会は織斑一夏を拘束し、IS委員会のあるアメリカへ移送すると発表した。

が、その情報は既に漏れていた。

更識姉妹と布仏本音がやつてくれたのだ。

そして、ティグル達もやつてきてくれて、私達はIS学園を未明に抜け出し、あるところに移動した。

そして、私達はその場所からヴァレンティナの竜技、『虛空回廊（ヴォルドール）』を発動。遠い所を一瞬で移動したのだ。

ついたのは私が前もつて買つていた別荘だ。

ちゃんと足取りは掴ませないようにしてある。

起ころる可能性があつたので、用意していたが、本当に起ころるとは思わなかつた。

この場所は山の中にあり、隣には海がある。

電気もガスもあり、水も流れている。

そしてここは、前から住んでいる人がいないのだ。でも、ここは日本である。

そしてそのあと、IS学園は、朝から彼がいない。荷物もない。

そして、彼を慕う女子達もいない、転校生もない。

ということを発表。

そこで I S 委員会は彼、織斑一夏を国際指名手配したのだ。
しかし、彼は世界に對して抵抗することを宣言した。

私達はそれについていくと決めていた。

そして、世界連合軍は織斑一夏に對して宣戦布告したのだ。
こうして、世界 V S 一夏の戦いが決まつたのである。

以上、私達に起こつたことである。

最後に、

正義とは、勝つたもののことではない。人を助け、人を蹴落とさない、いじめない、そのような人物を正義と言う。

お前も、俺も、正義ではない。

ただ、悪でも、他人を信じることは意味があるならば、良いだと私は思う。

自分の思いを掲げる、ちっぽけで心強い集団 V S 人を蹴落し、天につこうとする男。

どちらが勝つか。
この戦いに正義などない。

正義と悪

諭吉対俺。

その前に話すことがある。

諭吉陣営はなんとフルボツコにされました☆
何故かつて？

海人が口ケランぶつぱなしてシールドエネルギー全部ゼロにする
わ、国連軍どもも屑の塊にするとか、ヤバいよ…

まあ、気を取り直して、

あいつが使うのはエボルドライバー。
星狩り族が使うやつだつてよ。

まあ、いいや。

とりあえず、ゴッドマキシマムマイティX使おう。
『ゴッドマキシマムマイティX！』

「やつぱりそれで来るか…」

諭吉はわかつたような顔で言う。

…が！ここからがあいつの知らないところだ。

「なあ、諭吉。俺つてさ、何でIS動かしたんだろうな。」

「お前が選ばれたからだろ？」

「そうか？ そうとは思わないが？ なら何故お前も動かせたんだ？」

「俺も選ばれたからだろ？」

「そうなるな。」

「そうか。なら、なんでお前は俺にISを使わせないようになんだけ

？」

「決まってるだろ？ お前が使うに値しないからだ。」

「…そうか。なら、ISではなく、仮面ライダーといてお前を倒す。」

一夏はポケットから紫色の禍々しいガシャットを取り出す。

「な、なんだそれは⁈」

原作を見たことない諭吉も驚かないはずがない。

「これは…集大成だ。…悪になるためのな！お前らが俺を悪だと言うのなら！俺は悪になつてやろう！…グレードレベルゴッドハイパー…変身！」

『ゴッドハイパーMテキ！』

ゴッドマキシマムマイティXを最初にさして、ゲーマードライバーを開いてマイティのボタンを押す。そしてゴッドハイパーMテキを合体させる。

「はあ!? そんなガシャット、聞いてないぞ！」

「当たり前だあ！ 神の恵みだからなあ！」

『ドッキーニング！』

『パツカーン！ フーメーツー！』

『轟け！ 稲妻の如く！ 漆黒の最凶ゲーマー！ ハイパーFメツ！ ダンクーロートー！』

ハイパーMテキの色違にして、紫色の禍々しい仮面ライダーゲンムゴッドハイパーMテキゲーマーになつた。

「ちつ、なら…こつちも最初から本気でやらせてもらう！」

『オーバー・ザ・エボリューション！』

『コブラ！ ライダーシステム！ レボリューション！』

『a r e y o u r e a d y?』

「変身！」

『ブラックホール！ ブラックホール！ ブラックホール！ レボリューション！』

諭吉は仮面ライダーEボルフエース4になつた。

「…本気、か。けれど、ハザードレベルが上がつてない。」
見ていた海人はそう分析した。

「さてと。それじや、やるか。」

その瞬間、ゲンムとエボルの姿が消えた。
と思いきや、空中で凄まじい衝撃波が連続で起きた。

そして落ちてきたのはエボルだつた。

s.i.d.e一夏

「なんでだ!?」

「これはムテキだ。お前とは格が違う。」

「この前のＩＳはどうした!?どうしてそれでたたかわない!?」

「こいつ、絶対にＩＳ状態の俺なら勝てるとか思つてるんだろうな…」「お前がＩＳを使うとかほざいてたんだろ?」

「守らなかつたのはお前だろ!?」

「はあ、完全に負けるのが嫌なんだろうな。」

「だつたら限界を見せてみろよ!エボルドライバーは更に進化するんだろ?」

「俺は最近つかんだ情報を思い出しながら言った。」

「くつ…、なら!使つてやる!限界を越えてみせる!」

「あーあ…、挑発成功したよ。」

つてことは…

『オーバーオーバーザレボリューション!』

やつぱり怪人体になるのか。

「俺は!愛する人のために!戦う!」

『R e a d y g o!』

『ファーバーフロー!』

『フハツハツハツハツハハハハハハハハ!』

『フハツハツハツハツハハハハハハハハ!!』

「あ、究極体だつた。つか、なんとまあ綺麗事を。」

「はあ、綺麗事を述べられても困るんですけど。…お前が正義行使するのなら!俺は何度でも悪になろう!覚悟はできているな、正義の味方!」

「喰らえええ!」

とりあえず、カッコいいセリフは言つたけど、最初くらいは吹つ飛んでダメージを受けているように見せかけますか。

「オラオラオラオラア!」

殴り付けて俺を吹っ飛ばすエボル。

でも、全然ダメージを受けてないんだよな…：

こういうやられる芝居は昔からやつてたからできるんだよな…：

まあ、俺が数時間殴られまくったけど、結局ダメージなんて1も入らなかつた。
雑魚だな。

「これで終わりだ！」

最後と言わんばかりにレバーを回しながら叫ぶ。

『r e a d y g o !』

『ブラックホールブレイク！』

エボルの右手にブラックホールの塊ができ、それで殴る。そして俺に当たり、ブラックホールに吸い込まれる。

s i d e 三人称

「はあ、はあ、これで、終わつた…」

エボルは安心した。

しかし、目の前に土管が現れる。

テツテレテツテツテー！

「すり替えておいたのさ…：体力減つてるな、あいつ。」

なんて言つてゐるが、実はゲンムは撃たれる直前にコズミッククロニクルを起動しておいたのだ。これにより帰還することができたのだ。

「なんで生きてるんだ!?」

「つか、殺そうとしてたのか？」

「国連が決めたからな！」

⋮一夏は完全に怒つた。

「……いいだろう。やつぱり世界は俺を悪にしたいらしいな。⋮オーバースピード、オーバーパワー、発動！」

その瞬間、ゲンムから紫色の瘴気のようなものが溢れだす。すると、エボルがどつかに吹つ飛ばされた。

「ガフッ!?」

「さつきの威勢はどうしたあ！」

更に多段ヒットの効果で吹つ飛びまくるエボル。

「さあ、殺す覚悟があるなら殺される覚悟も出来ているんだろうな！」

ゴッドハイパーMテキガシヤツトのボタンを押す。

『キメ技！』

「ま、待つてくれ！」

「嫌だね。」

そしてもう一回押す。

『ゴッドクリティカルデストロイ！』

そしてエボルに

当たらなかつた。

「殺すのは、やつぱり氣が引けるな。」

「よ、良かつた…」

エボルは安心したように座り込む。

が、

「けど、殺される運命は変わつてないけどな！」

「な!?」

その瞬間、後ろからG3-XXが飛んできた。

『ケルベロスランチャー！ミサイルギガント！起動！』

右手にミサイル、左手にケルベロスランチャーが装着される。「ターゲット、ロックオン！」

「諭吉は殺させない！」

諭吉を慕うヒロインズが守りに入る。

「やつぱり俺も殺そう。」

「今回は私も殺させてもらう。」

「ええ、同感だわ。」

「俺も、殺るからな。」

一夏が殺すと宣言したとき、箒をはじめ、ティグル、リュドミラも殺ると言った。

「私達も…」

「楯無さん達は辞めておいてください。罪を背負うのは俺だけでいいんですから。」

「でも…」

「いいんですよ。逆にこんなことをする俺なんてほつといたほうがないんじゃないですか？」

「ううん、ありのままの一夏を愛すると決めたから大丈夫よ。それに、元暗部だからそれくらいは覚悟でにていのからね。」

「…ありがとうございます。」

そして、エボル達に向き直り、

「さて、処刑の時間だあ！…と、その前に。」

一夏はどす黒い声で話した。

「お前は小学生のころから色々と邪魔されたよな。俺に何かあることに絡んできてるよ。お前は俺に恨みとかあんのか？」

「ある！ヒロイン達をほつたらかしにしたその鈍感がうざかつたんだ！」

「そうか。」

そして、ボタンを押す。

『キメ技！』

「お前に次なんてない。」

もう一回押す。

『ゴッドハイパークリティカルデストロイ！』

それを合図に全員が必殺技を出す。

「ぶちかます！」

『a l l w e a p o n f i r e』

「ドドドドドドドド！紅蓮爆龍剣！」

『ワイルド』

「喰らえ！」

「空さえ穿ち凍てつかせよ！」

「嫌だあ、まだ、死にたくない…」

「…永遠をさまよえ、エボル。…いや、諭吉。」

その技全てが到達しそうなとき、

夢が覚めた。

「はつ!? 今は…」

と、思いきや、

「諭吉さーん？ 聞こえますかー？」

病院にいたのだ。

「こゝは、どこですか？」

「病院です。救難信号がだされていて、女性の死体と生きていた諭吉さんが見つかったというわけです。」

それに動搖した諭吉は、

「その、女性の死体というのは…」

「身元は特定されています。」

その告げられた名前は、

自分の愛する女達だった。

「嘘…だろ…？」

ひきつった笑い顔を浮かべる諭吉。

「おのれ…おのれおのれおのれおのれおのれ！」

諭吉は一人になつたあと、自殺しようとした。
だが、

瞬間に傷が回復したのだ。

「死ねない…だと…」

絶望した顔が、目の前の鏡に写つた。

「ふう、これくらいやればいいか？」

海人がIS学園の屋上でそんなことをいつていたそのとき、

「お前、好き勝手にやつてくれたな。」

もう一人の海人が現れた。

※ややこしいので最初にいた海人を黒海人、後からきた海人を白海人と言います。

「何を言う、もう一人の私？君もそんなことを望んでいたんじゃないかな？」

「俺は断じて望んではいない。もつと優しく、諭吉を、ヒロインズを更正させたかった。：なのに！お前はやりやがった！あのとき！お前は一夏に吹き込んだだろ！知っている！あの戦いの前日に言つたことを！」

そして海人はかぶりをふり、

「お前が！一夏を歪めた！黎斗まではよかつた！ティグル達もよかつた！だが！お前が一番悪いんだ！」

そして、白海人は叫ぶ

「蒸着！」

仮面ライダーG3ーXXになった。

「君がその気なら、私も戦おう。蒸着。」

黒海人も仮面ライダーG3ーXXになった。が、こっちのG3ーX
Xは外見が黒かつた。

「ウオオオオオオ！」

右手にデストロイヤーを装着して戦う白海人。

この戦いはどう終わるのか…

最終章 遙か無限の彼方へと（詐欺）映画のネタバレ注意！

最終章 前編

「はあ、眠い。」

一夏はそんなことを呟いた。

I S 学園の屋上で日向ぼっこをしていると、

「ん？ 電話か？」

携帯がなつたので電話にでる一夏。

『もしもし、一夏？』

「あ、ルクスさん。どうかしたんですか？」

ルクスは電話越しで冷静に話した。

『まずいことになつた。「アナザーライダー」って知ってる？』
「聞いたことがありますけど…」

『それが現れた。』

『まさか!? あつちの世界にいたやつか!?』

※ルクスもアナザーライダーのことを聞いています。

『そう。アナザーライダーのダブル。そして電王だ。』

『わかつた。直ぐに行く！』

電話をワイヤレスイヤホンにつなげ、電話を続ける。

「ダークウイング！」

「りょーかい！」

空間の狭間からやつてきたダークウイング。そしてミラーモンスター形態になり、一夏を背中にのせた。

『場所は南西20キロ！』

『わかつた！ 飛ばすぜ、ダークウイング！』

「はい！」

そしてカードデッキを出し、前に向ける。

ベルトが腰回りにでてくる。

「変身！」

カードデッキをベルトにいれ、仮面ライダーナイトになった。

「この子に一体何があるんだ！」

「そんなことはどうでもいい。さつさと渡しな！」

「さあ、お前の罪を、数えろお」

「この子に罪なんてない！」

アナザーダブルとアナザー電王が追いかけてくる。

「くつ、なら！」

ルクスも子供を担ぎながらカードデッキを出し、前に向ける。

「変身！」

仮面ライダー龍騎となつた。

そして、そこに一海が現れる。

「かずみん！」

ルクスは子供を一海に預け、

「この子を遠くへ。できれば家に送るように。」

「わかつた。」

一海は坦いで走つていった。

「さて、抑えますか！」

『ソードベント』

剣を召喚し、応戦する。

しかし、2対1。やはり劣勢になるのはルクスだ。

そして、アナザー電王が追いかけようとするが、

「たああああ！」

空の上から現れたナイトにより、行けなかつた。

「よかつた、間に合つたか！」

「さて、」

一夏とルクスは敵の方を向き、

「僕（俺）は自分の罪を数えた。」

そして剣をあわせて、ルクスと一夏は

「次は！お前の罪を数えろ！」

某ハーフボイルド探偵みたいに言つた。

「うおおおお！」

アナザーダブルが爪のようなもので切りかかるが、

「ふつ、たあ！」

龍騎はそれを剣で跳ね返す。

「せい、はあ！」

ナイトは突いて小刀のようなものを落とさせる。

「くつ、こゝは退くぞ。」

「そうだな。」

このままだと防戦一方だからなのか、アナザーライダーは退散した。

「さてと、どうするんだ？」

「とりあえず、学園に戻ろう。」

そして、IS学園に行くと、

「なんじやこりやあああ!?」

IS学園ではなく、藍越学園となつていたのだ。

「…ISは？」

「どうか、まず、ここ本当に僕たちがいた世界なの？」

「うーん…」

すると、そこに龍我がやつてくる。

「この状況はなんなんだ!?」

「僕たちにもわからないんだ…」

「どうか、聞いてくれ！戦鬼は子供を追いかけていたし、あのとき

行つた珈琲店がなんか変わつてたんだ！」

龍我が焦つてそんな事を言う。

「どうか。やっぱりそんなことが起きてたんだ。」

「つて、じゃあ戦鬼はどこに行つたんだ!?」

このとき、ヴィシュヌがやつてきた。

「あ、一夏！それにルクスさんも！」

「どうかしたのか、ヴィシュヌ？」

「学校サボつて何処行つてたのですか!?今日はもう学校は終わつたの

で、明日はちゃんと来てください！」

「は、はい…」

そして、ヴィイシュヌは帰つていつた。
そこてめ話すルクスと一夏。

「…ヴィイシュヌ、記憶無かつたか？」
「多分、書き換える可能性もある…」

（こんな時、海人がいれば…）

そんな事を思つたルクスであつた。

「あ、君は！」

不意に、青年が話しかける。

「何かな？」

ルクスが応じる。

「君は最弱無敗のバハムートのルクス・アーカデイアでしょ？そして、隣のはインフィニット・ストラトスの織斑一夏でしょ？んで、その隣が仮面ライダービルドの万丈龍我でしょ？」

「そうだけど？」

「そうだが？」

「どういうことだ？」

「会いたかった！俺は仙道泉。ラノベと仮面ライダーを愛する人さ！」
あと、僕にはその主人公達を引き寄せる能力があるんだ！」

「そうなのか…」

このとき、泉の服の裾から砂が出てきた。

（けつ、引き寄せるか…）

（まあ、いいじやん。）

それには、ルクス達は気づかなかつた。

「とりあえず、僕の家に来てよ。」

「わかつた。」

ルクス達は泉の家に行くことになつた。

傷無はといふと、一人風麺でラーメンを食つていた。

「風麺美味しいな。オススメにてたから来ただけど…ん？」

急に風が強くなり、向こうからやつて来たのはアナザーダブルだつた。

「ちつ、アナザーライダーか。」

そして、ガシヤットを起動しようとしたが、起動しなかつた。

「はあ!? 嘘だろ!?

仕方なく、生身で現れたアナザーダブルに立ち向かうが、ダメだつた。

「くそ…、あ！これがあつた！」

そして叫ぶ。

「エロス！」

装甲が傷無に装着され、戦闘態勢に入つた。

「チツ」

だが、アナザーダブルは舌打ちし、消えていった。

「貴方すごいわ！ 貴方がしようちやんの言つていた人なのね！ これあげるわ！」

渡されたのはダブルライドウォッヂだつた。

「あ、ありがとうございます。」

一海は子供を逃がそうとしていたが、

「さてと、ここなら大丈夫…じゃなかつたか。」

そこに現れたのはやはりアナザーライダーだつた。

かずみんは子供を後ろに逃がし、スクラッシュドライバーを出す。

『ロボットゼリー』

「変身！」

『潰れる！ 流れる！ あふれる！ ロボットイングリス！ ぶううらああ！』

仮面ライダーグリスになつた。

「心火を燃やして、ぶつ潰す！」

グリスはアナザーライダーに立ち向かつた。

一方、戦兎はというと、スーパータイムジャッカー、ティードに会っていた。

「お前が、今回の元凶か。」

「だつたらどうする?」

「倒す!」

『ラビット! タンク! ベストマッチ!』

レバーを回すが、

「おつと、それは使わせないぜ。」

ティードに時止めを使われた。

「ふつー!」

戦兎をぶつ飛ばし、左手の模様で戦兎の瞳を見て、

「お前は俺の駒に使ってやる。」

龍我は一人で行動中：

そのとき、エボルトがやつてきた。

『龍我!』

「お前は…誰だつけ?」

『そんな事はどうでもいい! ハザードレベルを計らせてもらう!』

エボルトは急ぎめに龍我のハザードレベルを計った。

『ハザードレベル6! よし! 体をかしてもらう!』

「え?! ちょ、ちょっとま…」

エボルトは龍我の体の中に入り込み、乗っ取った。

『エボルドライバー!』

『このパンドラボトルを!』

パンドラボトルをエボルドライバーにセットし、レバーを回す。

『ふつ。くうううう!』

生成したのはマツスルギヤラクシーフルボトル。

さらにジーニアスをさし、レバーを回す。

その後、ジーニアスを抜き、金色のフルボトルと銀色のフルボトルをセットし、回した。

そうすると、ベルトから管が出て来て、ジーニアスフルボトルにつ

ながつた。

そしてその成分をジーニアスに詰め込んだ。

『未来への、礎となれ！』

その声とともに完成したのはクローズビルド缶だった。

『この体は返す！』

そして龍我を解放した。

「俺は、一体…。ってか、エボルト!?お前、何で!?

『さつきと行け！戦兎が危ない！』

「どういうことだよ!?

そかに、無人のマシンビルダーがやつてくる。

『それに乗れ！ナビが案内する！そこに戦兎がいる！頼んだぞ、龍我

！』

「よくわかんないけど、わかつた！」

龍我はバイクにのり、向かつていった。

『…俺は、あいつを助けなければ。』

エボルトは瞬間移動である場所に向かつていった。

「龍我！」

「ハヤト！」

倉庫で会つたのはハヤトだつた。

何故ハヤトがここにいるのか？

それは…

『おい！ハヤト！』

「誰だ!?!』

ハヤトの前に現れたエボルト。

『今から言うところに早く行け！戦兎がまずい！』

「了解！」

『あと！今のお前ではライダーシステムを使えない！だからこれを持つてけ！』

投げつけたのはトランステームガンとバットフルボトルだった。

「何かよくわからんけど、わかつた！」

『頼んだぞ！』

ということがあつたのだ。

「とりあえずここか。」

「そうみたいだな。」

倉庫に入る龍我とハヤト。

中にいたのはティードだつた。

「お前は誰だ！」

「クローズにヴァリアントか。俺はタイムジャッカーティードだ。」

「お前が戦兎を！早く出せ！」

すぐさま叫ぶ龍我。

「ああ、ビルドのことか。来い。」

呆れたように言うティード。

そした出てきたのは、目が死んだ戦兎だつた。

「おい、戦兎！何やつてんだよ！」

「落ち着つけ龍我！これは洗脳されている！…あのときと似ている。

あの瞳、金色だつた。」

ハヤトはすぐに考察する。

だが、そんな時間も与えたくないのか、戦兎は変身する。

『タンク＆タンク』

『ガツタンゴツトンズツタンズツタン！ガツタンゴツトンズツタンズツタン！』

『are you ready?』

「変身。」

『鋼鉄のブルーウォーリアーチタンクタンク！ヤベーイ！ツエーイ！』

戦兎は仮面ライダービルドタンクタンクフォームになつた。

「そつちがそなうら、こつちもだ！」

『ドラゴンゼリー！』

『バット！』

「変身！」

「蒸血！」

『ドラゴンインクローズチャージ！』

『バット…バ、バット…ファイア！』

龍我はクローズチャージ、バハヤトはナイトローグになった。

「いくぞ！ 戦鬼！」

ビルドはフルボトルバスターを取り出し、斬りつける。

「はあ！」

クローズチャージはビートクローザーを取り出し、それを打ち返す。

「今だ！」

「セイヤーー！」

『エレキスチーム』

そしてその隙にナイトローグがスチームブレードで斬りつけ、そこにエレキスチームを発動する。が、

「…」

「効いてないか…」

防御面でも強いタンクタンクフォーム。

効くわけがなかつた。

「ならー！」

『アイススチーム』

そこでハヤトはビルドの足元にスライディングし、アイススチームを当てる。

そして足元が凍りつく。

しかし、無意味に等しかつた。

それをいとも簡単に割つたのだ。

『フルフルマッチブレイク！』

『フルフルマッチブレイク！』

戦鬼はフルフルボトルをフルボトルバスターに入れてチャージする。

そして、それを…

「はあああ！」

後ろにいたティードに撃つたのだ。

「やはり洗脳されていたフリだったのか。まあいい。タスクははたされた。」

しかし、部分時止めを使つてその弾を止め、どつまかに行つてしまつた。

「おい！戦兎！フリだつたなら最初からちゃんとしとけ！」

「まあまあ、落ち着つけ、龍我。」

龍我が愚痴を言い、それを宥めるハヤト。

「敵を騙すにはまず味方から作戦だ。」

「まんまじやねえか！」

「でも、『タスクははたされた』……あれはどういう意味だ？」

戦兎はその言葉に悩んでいた。

「はあ！」

「てやあ！」

「ぐはあ！……くつ、そ…。」

アナザーライダーのダブルキックにより、グ里斯は変身解除され、
気を失つてしまつた。

そして、子供を連れ去つた。

「ここが俺の部屋だ。」

「へえー。つて、この部屋のベルトとポスターは何!?」

「それは仮面ライダー電王で、これはハンドレッドの放送決定ポスター。そしてこれがG A文庫のポスターつてわけ。」

「…そういうことか。」

「何かわかつたか？ルクスさん？」

「夏がルクスに聞く。」

「僕達は虚構の存在なんだ。あのときと似ている…いや、同じかもし

れない。」

「ルクス・アーカデイアは聖蝕など、ラグナレクなどを倒すのに奔走した。そうでしょ?」

「…そうだね。そしてたどり着いた黒幕が…」

「フギル・アーカデイア。」

「そう。」

泉とはなすルクス。どうやら噛み合っているようです。

「この本と違うのは僕達は仮面ライダーになつていてること。だから、ここから考えると僕達は、本当は虚構の存在なんだ。」

「そつか。原作とか言つてたから…」

「そして二次創作もある。つまり、僕達は多分二次創作というものからやつてきた可能性がある。」

「へえー。」

そう小声で話すルクスと一夏。頭に?を浮かべる泉。

この間に起こつていた出来事がある。

それは、

「これでよーやく、お前を捕まえることができた。そして、封印したあ！お前は終わりだ！…海人お！」

そんなことをティードは言つた。

それと同時に謎のタワーができ、怪人が溢れだした。

そして、家を出ようとするルクスと一夏。
先に家を出た一夏。

そしてルクスも出ようとしたら、そこに置いてあつた写真を見て、ルクスは絶句した。

(…そういうことか。)

ルクスが泉に話しかける。

「ねえ、泉君。この写真はなんなの？」

「ああ、それはね…、死んだ兄貴、そしてその恋人と親友だよ。…実は、この二人、殺されたんだ。そして兄貴の後を追うように恋人は自殺し

たんだ。…だから、イマジンと契約したんだ。」

泉の口から本当のことが話された。

そしてルクスはある考えにたどり着いた。

「…全てが繋がった。」

「…」らへんか？」

「ああ。かずみんの反応はここで消えている。」

ハヤトと別れ、グリスのライダーシステムの後を辿っていた戦兎と万丈。

「戦兎！あれ！」

そして、気を失っていた一海を見つけ、

「万丈！かずみんが！」

そして、万丈と戦兎が一海を担いでいこうとしたが、怪人どもが現れた。

「万丈、ここは任せろ。」

「頼んだ！」

万丈は急ぎ足で一海を担ぎ、そこを離れた。

「変身！」

『ラビットタンク！イエーイ！』

「いくぞ！」

ルクスと一夏が泉の家を出ると、

怪人が大暴れしていた。

「…なんだよ、これ」

そこには、一般人を襲うやつもいた。

「はああ！」

だからルクスは星のマークを描き、それをつかんで弾にし、怪人に投げた。

その怪人は吹っ飛ばされ、消滅した。

「皆さん！早く逃げてください！」

避難を促したあと、変身するためにカードデッキを取り出そうとしたが、

「あれ？無い？」

「うそ！俺も無い…」

カードデッキが無かつたのだ。

しかし、

「…って、俺はこんなにつけていたか？」

一夏の左手には白い Gandレットドがはめられていた。

「元々、白式は俺の専用機だつたのか。：ルクスさん。どうやら、元の自分のやつで戦わないと駄目らしいですね。」

「そうみたいだね。」

そこに、ハヤトと傷無が現れる。

「ごめん！お待たせ！」

「ちようどよかつた！こいつらを倒さなきやいけないんだ！」

「わかつた！」

そして、ルクスは剣を抜き、詠唱する。

「…顯現せよ、神々の血肉を喰らいし暴龍。黒雲の天を断て！《バハムート》！」

そして一夏も、左手を真上に上げ、叫ぶ。

「来い！《白式・王理》！」

傷無も叫ぶ。

「エロス！」

ハヤトはヴァリアブルストーンを持ち、空に掲げ、叫ぶ。
『ハンドレッド百武装・展開！』
オノ

そして、その纏つた姿で敵を倒しに行つた。

泉はその様子を見て恐怖した。

「嘘…だよね…」

（そもそも、限界だ。もういいだろ。）

「ああ。怖くなってきた。もういいんだ。」

(契約完了だ。)

そして体の中から出てきたのはフータロスだったのだ。
「よつと！」

そして泉の体を割り、中に入つたのだ。

これにより、

「うお!? 体が…」

「まざいな…。」

焦る戦兎と龍我。

それはルクス達も同じで、

「これ!? 体が!?」

「多分、泉君が関係してるとかも！」

「ヤバいな…」

「どうすんだ!?」

戸惑いが隠せなかつた。

そして、

「く、うわあああ！」

「くそおおお！」

叫びながら、ヒーローは消えていつた。

最終章 中編

「――――一夏か、一夏！」

「は？」

一夏は I.S 学園の自分の部屋のベッドの上で寝ていた。そして、起きると隣には冬香がいた。

「なんで冬香姉が？」

「なかなか起きないものだからな…。ギャラクシーから連絡がきたから何かあつたかと思つた。」

冬香の顔は、泣いている顔にも見えた。

「なんで、泣いているんだよ…」

「当たり前だ！一夏が目覚めないと聞いて…どれだけ心配したのか！」

「いや、ただ夢のようなものを見ていただけだが？」

しかし、一夏には夢とは違う、現実のような何かを感じていた。

「つか、ヴィシュヌ？お前は記憶あるのか？」

さつきやつてきたヴィシュヌに思つていたことを聞く。

「ええ、ありますけど？」

「そつか。」

(とりあえず、今は何にもなし、か。)

そんな事を考えていると、部屋にルクス達が急いで入つてくる。

「一夏！わかつた！」

「何が？」

「神崎海人の正体だよ！」

全て話すには直前に起きたことを説明しなければならない。

「あの写真が神崎海人だとすると…」

ルクスはその場で立ち、精神を地球（ほし）の本棚へ向かわせる。

「キーワード、神崎海人、仙道泉、親友、恋人。」

そして本棚が動き、一冊の本が出てくる。

その本を手に取り読むルクス。

そして、読み終わつたあと、ハヤトと傷無、そして戦兎達を呼び、一夏の部屋に行つた。

そして今、神崎海人の真実が話される。

「神崎海人。本名、仙道海人。弟に仙道泉がいる。そして、親友と恋人がいた。弟といつも仮面ライダーなどの話をしていた。だが、2018年、6月17日、海人とその親友、『長谷部恭矢』と恋人『成瀬阿奈』、あとその他の人達で遊んでいたところ、『香瀬滝佐久真』が海人を殺そうとしたが恭矢が海人を庇い、死亡。そしてその場を逃げたが、二日後に殺された。そしてその後に阿奈は自殺した。」

→自分、書いてて胸糞悪くなつた（b y 駄作者）

「そして、その『香瀬滝佐久真』だけど…」

「この世界にいることがわかつた。そうだろ？ ルクス・アーカデイア。」

そこに現れたのは石動惣一、エボルトだつた。

「エボルト！」

戦兎が一番に反応した。

「お前、あのときの！」

ハヤトはあのとき、トランスクームガンをもらつていたからエボルトと面識はあつた。だが、名前までは聞いていなかつたのだ。

「いいか？ 今回のことだが、まず『あの世界』は今大変な事になつている。正直言つて、俺一人でも勝てる気はしない。」

「あのエボルトでもかよ！」

「それじゃ、どうやつて倒すんだ？」

万丈は机に拳をぶつけた。その頭はちよんちよん、とさわりながら喋る一海。

「（）にいる仮面ライダーとI S、装甲機竜、ハンドレッド、ハイブリッド・ギアを使えば倒せる。」

「何だつて！？ それは本当かい！？」

それに食いつく一夏。

「そして、言つておくが、この世界にいるのは海人と佐久真だけではない。」

エボルトは更に話していく。

「まさか！」

「そう！ 恭矢と阿奈だ！ 来い！」

青髪の男と赤髪の女だった。

「初めまして。長谷部恭矢です。海人がお世話になっています。」

「初めまして。成瀬阿奈です。海人がお世話になっています。」

二人とも礼をしてきた。

「いや、海人がいて助かってるよ。よろしくね。」

そう返すルクス。

しかし、ここで気づく。

肝心の海人がいないことに。

「そういうえば、海人どこ？」

そのとき、外からタイムマジーンが現れた。

「あれはタイムマジーン？ つてことは…常磐ユウヤだな。」

一夏が反応する。

そして、常磐ユウヤが出てきた。

「ねえ、海人見なかつた？」

「見てないけど？」

そして、常磐ユウヤも合流したところで、

海人が帰つて來た。

「海人!?」

さう、海人はいつも普通の会社員スーツ姿でいるのに今回はイエーガーパイロットのスーツを來ていた。

「いろいろと手間をかけてしまつてね。」

「お前、そろそろ本性を表したら？ 海人。」

その声に驚いた海人。

目の前には死んだはずの親友と彼女がいた。

「なんで、君達が？」

「まあ、お前と一緒に。とりあえず、ねこかぶはよせ。お前は、そんなもんじゃやないだろ？」

「海人。貴方は貴方でいてください。」

そういつて海人に笑いかける恭矢と阿奈。

そして海人も笑い、

「そうだな、そうするか。」

そしたら、部屋にはエアコンがついていないのに風が吹く。

そして、海人の髪型が変わる。

少し伸びた感じになつた。

「俺の本当の名前は、知っているかもしねえが、『仙道海人』だ。改めてよろしくな！ま、神崎は辞めないが。」

そして、やつと本題に入る。

「とりあえず、向こうの世界で子供が拐われた。そして変なタワーが出来た。そのときに怪人が現れた。：：多分、泉と契約しているイマジン、『フーダロス』が関係しているかもしねえ…そういうことでいいんだな？」

「…って、イマジンの名前：なんでも知ってるの？」

「当たり前だ。拐われたのは昔の俺だからだな。」

「え！」

驚く一同。しかし、事情を知っている恭矢と阿奈は冷静に話した。
「海人が拐われた理由は海人自身にある。といつても、海人が欲しいとは思わなかつたと思うけど。」

「そう。その能力の名前が…」

「特異点つてわけだ。」

「特異点？」

更に困惑する一同。

「簡単に説明すると歴史改變の影響を受けないつてわけ。つまり、人は特別というわけだ。封印されても海人が存在できる理由は…、海まあ、これはいいか。」

「そうか、だいたいわかった。」

某世界の破壊者風に言う一夏。

「そういうえば、向こうの世界つてどうやつていくんだ？」

「あー、それはね…」

「考える一同。そして傷無がふと、思い付いたように言う。

「そういうえば俺、あるもん貰つてた。」

ポケットから取り出す傷無。

それはダブルライドウォッчиだった。

「こいつは向こうの世界から持つてきたものだ。」

「これをさわれば！」

一夏がダブルライドウォッчиに触れる。すると、ジョーカーの部分が光り、戦兎が触れるとサイクロンの部分が光る。

「さあ！助けに行こう！泉君を！」

「おう！」

そして、ダブルライドウォッчи全体が光だし、包み込んだ。

「あ！いた！」

トンネルで気落ちしたような顔で座っている泉がいた。

「泉はイマジンと契約している。そのイマジンがどこの時間に行つたのかがわかれればいいんだけど…」

ルクスが考えるが、その悩みはすぐに解決する。

「2007年だ。」

海人が呟く。

「何で？」

一夏とルクスが聞いてくる。

「多分、泉と俺が関係しているからだ。まあ、調べる方が早いか。恭矢、あれを出せ。」

「了ぐ解！」

ポケットからあるものを取り出す恭矢。それは、チケットだった。

「これを泉にかざして、つと！」

浮き上がってきた絵柄はフーラロスの絵と2007年8月7日
だつた。

「この日は泉の生まれる日…そして当時俺が五歳…そして仮面ライ
ダー電王がやつていた年だつたな。」

このとき、海人は何故か一筋の涙が出た。それに気付いたのは恭矢
と阿奈…そしてルクスだつた。

そんなことを知らずに一夏は

「この時代にいけば何か分かるかもしれない！」
そんなことを言つていた。

「そうだな。」

「しかし、タイムマシンはありませんよ？」

「いや、あるぞ！」

そう、ここには常磐ユウヤもいたのだ。

「んじゃ、行くか！」

「まあ、俺達三人は別で行く。それでも重量オーバーだからこれを使
え。」

海人が取り出したのは

亀だつた。

「なんじやこりやああ!?」

一夏が叫ぶ。

「世界を旅していくて見つけたものだ。コピーして使わせてもらつてい
る。そんなのは快適だからな。こうやつて…」

亀に近づくと、海人が消える。そしてすぐ出てくる。

「まあ、こんな感じだ。」

「わかつた、ありがとう。」

何人か入つていったあと、一夏が回収する。そしてタイムマジーン
に乗る。

「それじゃ、またあとで！」

「ああ。」

三人は改造したタイムベルトで時間をとんでいた。

「海人、さつきは何があつたの？」

しかし、海人はうつむいたままだつた。

「…粗方、ルクス、ハヤト、傷無、一夏…この四人の誰かに関係するこ
とだらう？」

恭矢が口に出す。

「…お前は前から鋭いな。本当に凄いや。」

苦笑する海人。

「だつて、お前は前から主人公のこと好きだつたからな。こういう努
力する主人公は。」

「だからこそ、救済したかつたんだよね。」

「…やつぱり、お前らにはお見通しか。」

そして、海人は一筋の涙の真相を話した。

ルクスは、一人『亀』の中で海人のさつきのことについて考えてい
た。

(海人が泣いているところは一回も見たことがない。それでも泣いて
いた、しかも泣くところではなく…、海人は予言に近いことはできて
いた。つまり、それほど大変なことが起きる…のか。多分、海人はあ
の行動から自分の命を省みない、僕と同じ何かを感じる…)

「ルクスさん！もうすぐつくよ！」

「わかった！」

しかし、一夏の声により中断した。

「ここが俺の生まれた病院。」

「そう、ここで君は生まれたんだよ。」

中へ入る一夏とルクス。

そこにはフータロスがいた。

フータロスは病室から出て外へ行つた。

その病室に一夏達は入つた。

そこには臨月の泉の母さんが寝ていたのだ。そして、砂が巻き散らかされていた。

「ここに、いるのが、俺…」

しかし、外から子供の悲鳴が聞こえた。

「何だ!？」

外へ出ると、アナザーダブルがいた。

しかも、抱えられているのは小さい海人だった。

「はなせ！」

「海人！」

「海人を放せ！」

フータロスが果敢に攻めるが、簡単にあしらわれる。

一夏とルクスが変身しようとするが、

「おつと、動くなよ。こいつがどうなつてもいいのか?」

アナザーダブルのせいであけなかつた。

『ルナー！』

アナザーダブルの半分が黄色くなり、右腕が伸び、ルクス達を吹っ飛ばす。

「くそ！」

そして、泉に何かが起ころ。

（あのときから、俺は…兄さんに…守られていたのか…）

自然に走りだしら殴り付けようとする。

「返せ！兄さんを！」

しかし、無情にも、アナザー電王ウオツチを入れられてしまう。

「泉！」

一足遅く来た海人が叫ぶ。

「俺、参上。」

アナザー電王になってしまった。

海人は弟が相手だと認識してしまい、手が出せなかつた。

「ふつ、じやあな。」

アナザーデンライナーにのり、とんでいつた。

「しかたない！追いかけるぞ！ユウヤ！」

「ああ！」

『タイムマジーン！』

「行くぞ！」

一方そのころ、

2000年では、海人三人と、簪と本音がいた。

簪と本音は興味本位でついてきたのだ。

「かんちゃん、ここが仮面ライダーの始まり、クウガが生まれたところなんだよね？」

「そう。ここが九郎ヶ岳遺跡。」

そして、中に入ると

ティードがいた。

「お前は！」

「スーパータイムジャッカーティードだ。ここは仮面ライダークウガが生まれたところ。つまり、ここでアナザーウオッチを手にいれて仮面ライダーの時代を終わらせる。いいだろう？」

「その前に、倒せばいいのよ！」

「キバット！」

「あいよ！」

どこからかキバが現れ、阿奈の手に近づく。

そして阿奈は手にもち、キバが噛む。

「来い！ガードチェイサー！」

そして海人はバイク、ガードチェイサーを呼ぶ。すると、バイクが

無人でやってきて、海人の後ろで止まる。そして青い光の窓のようなもののが展開し、海人の回りを旋回する。

『ゲイツ！』

本音はポケットからライドウォッチを取り出す。

簪もポケットからアイコンを取り出す。そしてベルトにセットする。

『アーカー！フルバッヂミナー！』

「変身！」

「蒸着！」

『ライダータイム！』

『カメンライダー ゲイツ！』

『レディゴー！カクゴー！ゴゴゴースト！』

『change beetle』

『standing the kamen rider』

本音は仮面ライダーゲイツになり、簪は仮面ライダーゴースト、恭矢は仮面ライダーカブト、阿奈は仮面ライダーキバ、そして海人は仮面ライダーギンガムーンになつた。

このとき、旋回していた光の窓から装甲が転送され、装着された。

その間にティードはクウガのベルトにブランクウオッヂをかざす。すると、アナザークウガウォッヂができた。

「俺は、これで王になる！」

『クウガ！』

禍々しい、アナザーライダーにしてはでかすぎるアナザークウガになつた。

「何だよ…あれ…」

「かんちゃん！急いで脱出！」

一同は逃げようとする。しかし、瓦礫などにより吹っ飛ばされる。「うわああ！」

しかし、一人だけ、耐えた者がいた。

「モード、ギガース！」

G3-X Xだった。

能力は色々あり、装甲強化することによりいろんな事ができるのだ。

この能力は巨大化で、相手と同じくらいのでかさで戦つた。

「ふつ、はあ！」

右手の拳で殴り付け、吹つ飛ばそうとする。だが、アナザーライ

ダー特有の狂化により、受け止められ、逆に吹っ飛ばされる。

「くそ！」

そして蹴りをいれようとするアナザークウガ。しかし、G3—XXはドリルを展開し対抗した。

「喰らえ！スピニングブレイク！」

高速回転したドリルによりアナザークウガ離れ、空を飛び、どつかへ行つた。

しかし、海人はわかっていた。

「これは時間稼ぎだ…」

「どういうことだ？海人。」

恭矢が聞いてくる。

「多分、他のところで小さい俺を連れ去つた気が…」

「まさか！」

その場にいた全員の声が一致する。

「飛んで行つた方向にはアナザーデンライナーがいた。つまり、迎えに来た可能性が高い。」

「それじゃ…」

「ああ。俺が産まれた病院に行くぞ!!」

「おう！」

こんなことがあつたのだ。

そしてタイムベルトで移動したもののは、一足遅かつたというわけだ。

移動したくても、もうタイムベルトのエネルギーは無い。

そこで、タワーへ向かい、最終決戦に行くのだつた。

「…どうだ、ティード？あのバカどもは？」

「強いて、もう少しでなんとかなる。…まあ、最悪の場合、俺とお前で『アレ』になればいい。そうだろ？『織斑千冬』？」

そこにいたのはアナザーダブルこと、織斑千冬（？）だつた。

「そうだな。まあ、ティードと秋人だけで十分だからな。私は時間稼ぎでもしよう。」

「そうかもな。だが、こつちにも駒はある。」

ティードと秋人の目線の先にはアナザー電王がいた。

「ふつ、面白そうじゃねえか。」

「もうすぐ来るぞ。」

「とりあえず、雑魚どもをばらまいとけ。こいつらも時間稼ぎになるだろう。」

海人という特異点を封印した今、仮面ライダーは消える…

はずだつた。

そう、もう一人の特異点がいるのだ。

つまり、『彼』が来る。

戦略室「亀」の中

「さてと、準備はこのくらいにして、皆は大丈夫か？」

一夏が皆をまとめ、指揮していた。

「ああ。大丈夫だ。」

「そうか。…これから最終決戦だ。多分、この世界を守るにはあいつを…いや、あいつらを倒さなければならない。」

「あいつら？まさか…！」

「そう、今回の件は秋人も関与している。あの偽物千冬もな。」

そしてタワーの映像が写し出される。

「怪人どもがうじやうじやしている。時間稼ぎみたいなものだ。だから今回、雑魚掃討組を連れてきた。」

そのメンバーは、最弱無敗勢からリーシャを始め、親しい仲、七竜機騎聖、更にはシングレンもいた。

「くくく、まさか一時的に復活するとは
「一応、お前とも利害が一致しているからな。」

ルクスが低い声で言う。

そう、更にはフギルも関与していることが発覚したのだ。
といつても、吸収されてるらしいが。

そして他には：

多分、想像できると思うが、

ハンドレッド、魔装学園、I S、刃更、綾斗、一輝、など、いろんな人達の協力があつた。

「ん？」「はどこだ？」

何故かアーチャー、エミヤまでいた。

「中の人つながりだ。良いだろう？」

海人が応じる。

そう、召喚の仕方がおかしかつたのだ。

バグルドライバーツヴァイで召喚できたのだ。

「まあ、お前は車に乗つたことあるんだろう？これを持つとけ。」

持たされたのはベルト…さんだつた。

『君が新しい相棒かい？』

『まあ、そうなるな。』

『OK！進之介の言葉を借りるなら、ひとつ走り付き合えよ！か。』
『ふつ、了解した。』

意外にノリノリなアーチャーだつた。

「あ！一夏君！」

「楯無さん！お久しぶりです！」

更識楯無。暗部更識家の長だ。色々あつて今まで I S 学園にいたのだ。

そして何故か楯無と知り合いの一夏。

「お姉ちゃん！」

「話は聞いているわよ、簪ちゃん。ごめんね、あんなこと言つて。」

この姉妹は、どつかの姉弟と同じで不器用だった。

「うん…こつちも「めん！」

泣きながら抱きつく簪。

「あ、そうだ。やつと使えるようになつたよ、魔法！」

「そうか、なら良かつた。」

一夏は笑い、

「しばらく姉妹で話をしたらいいんじやないか？」

「そうさせてもらうわ。ありがとう、一夏君。」

「傷無！」

この声の主は傷無の姉の飛弾怜俐だつた。

「姉さん…」

「この前みたいに、死ぬことは許さんからな。」

「あり肝に命じておくよ。」

「ハヤトさん！お久しぶりです！」

石動リユート。

主人公と言われてもおかしくない少年だ。

リユートもハヤトと似ていて、アイラかトウカのどちらかに心が揺れていた。

「久しぶりだな、リユート。どうだ？ちゃんと彼女は選んだか？」

そう言つて笑うハヤト。

「それが…、一人とも選びました。」

しょんぼりしたように言うリユート。

「いいんじやないか？」

ハヤトは軽く言う。

「でも…、僕はハヤトさんのように英雄ではなく、ただのヴァリアントです。だから、こんな欲張りでいいのかなど…」

「リユートが決めたのならいいんじやないか？俺はそう思う。」「そつか、そうですね！」

リユートに笑顔が戻る。

「おーい！リュート！」

「リュート！何やつてるんだー？」

部屋の隅からリュートを呼ぶ声が聞こえる。

アイラとトウカだ。

「さあ、行つてこい。お前の彼女達のところへ。「はい！」

その様子を見ていた海人達三人は

「今一度思う。この世界、この人達を守りたたい、つてな。」

「ああ、お前らしい。」

「うん、海人らしいね。」

恭矢と阿奈が応ずる。

そして、十分が過ぎたころ、

「もうすぐ着くぞ！総員！衝撃に備えろ！」

一夏の声により全員が気合いをいれる。

そして、タイムマジーンから一夏が飛び降り、亀から皆が出てくる。
そして着地し、全員変身ポーズ、または装着の構えを取る。

「変身！」

「ハンドレッド、オン！」

「コネクト・オン！」

仮面ライダー、I S、ハンドレッド、装甲機竜などを纏い、突っ込んでいった。

最終章 後編の一

「やつぱり多いな！」

雑魚怪人を蹴つ飛ばしながら進む俺達仮面ライダーズ。

俺こと仮面ライダーナイトは痺れをきらしてサバイブになり、ファイナルベントを使つた。

『ファイナルベント』

「突つ込めー！」

怪人達を押し通し、その後ろから仲間達がついてくる。

そして、タワーの前についた。

「あ、そうだつた！」

「どうかしたか？ ユウヤ？」

一夏とユウヤが話す。

「この前のときにこれを渡すのを忘れていたんだ。」

渡されたのはウォツチだつた。

「そうか、わかつた。ありがとう。」

「俺達はこれからタワーの内部に潜入する。」「ここからは仮面ライダーがタワーに入る。他の者達はここで足止めをしといてほしい。」

「了解！」

そこに空からワームホールが開き、タイムマジーンがやつてきて、一夏の面影がある人物が降りてきた。

「すまない、海人。遅れた。」

現れたのは時崎一夏だつた。

※事情は風間一夏も知っています。

「ああ、ちょうどタワーに突入するところだ。」

「そうか。」

そして、ふとアーチャーが思つたことを口にした。

「やつを倒せるのか？」

海人はニヤリと笑い、

「ああ、作戦は沢山ある。いくぞ！」

そして、それを合図にタワーに入つていった。

んで、入つたとたん、怪人がやつぱりいた。
だから、

「よし、突つ込めー！」

一夏をまた先頭にしてサバイブのファイナルベントで突つ込む。
そして、最上階までついたのだ。

「…ついた！」

向かつた先には封印されている小さい海人とティード、アナザー電王、アナザーダブル、そして秋人だつた。

「よう、お前ら。来るとわかつていたぞ。」

「だろうな。」

そんなことを構わずにフータロスはアナザー電王に近づく。

「おい！泉！目を覚ませ！洗脳されているんだろ！」

しかし、無情にも突き飛ばされてしまう。

それを見て呆気にとられていた海人達はティードの衝撃波により吹っ飛ばされてしまった。

「くつ、こうなつたら！」

すかさず海人は電話を取り出す。

そして、ワンタッチダイヤルで電話をかける。

「予定変更！頼んだぞ、良太郎！」

その瞬間、地面上に紋様が浮かび、海人達とアナザー電王が消える。

「…それで、残された私と、」

「俺はどうするんだ？」

何故かアーチャーとヘイズが残つてしまつた。

「まあ、すぐに戻つてくるから、時間でも稼ぐか。」

「そうだな。」

そして、アーチャーはシフトカー、シフツスピードを取り出し、ヘイズもカードデッキを取り出す。

『スタート・ユア・エンジン！』

そして、シフトカーをシフトブレスにさした。

ヘイズもカードデッキを前に向けて腕を前にだし、素早く手前に戻す。

「変身！」

『ドライブ！ タイプスピード！』

アーチャーは仮面ライダードライブ、ヘイズは仮面ライダー王蛇になつた。

二人はアナザーダブルに戦闘態勢を取る。

「ふつ、かかつてこい。」

アナザーダブルは爪のようなもので引っ搔こうとするが、

『ソードベント』

王蛇はベノサーベルを召喚し、防いだ。

ドライブはハンドル剣を使わずにアーチャーが使いなれた双剣、『干将・莫耶』を召喚した。

「ふつ、はあ！」

ドライブは回転斬りをし、アナザーダブルのサイクロンに応戦した。

『ハンドル剣は使わないのかね？』

「あいにく、私にはこっちのほうが慣れていてね。」

『そうか。』

「とりあえず、喋っている暇はねーぞ。オラア！」

好戦的になつたヘイズはルクスをはじめ、止められる人は少ない。例えブリュンヒルデでも。

「いくぞ！」

ベノサーベルで叩ききろうとする。

「オラア！」

それをかわすが蹴りまでは読めなかつたようだ。

「な!?」

アナザーダブルがおののく。

「情報が違うだと!?」

「多分お前らが知つてている俺はどつかの俺だ。まあ、俺の知つたことじやないがな！」

更に叩ききる王蛇。

そこに刃が飛んでくる。

「くつ!？」

「私もいることを、忘れないでほしい！」

ドライブが莫耶を飛ばして攻撃していた。

ん? ティードと秋人はと言ふと、

「出るまでもないな。」

「ああ、アナザーダブルは同じライダーでしか倒せない。まあ、この世界にはあいつがまずいと思うが。」

慢心すると大変なことになりますよ。

場所は変わつてなんかの建物の中。

「ここはどこだ?」

「つか、怪人までも移動されてるけど。」

ハヤトと傷無が反応する。

そして、机の裏から飛んで出てきたのは、

「俺:参上!」

仮面ライダー電王だつた。

「遅いぞ、良太郎。」

(ごめん、ちょっと手間取つちやつた。)

話しかける海人。面識はあるようです。

「んじゃモモタロス、頼んだ!」

「ああ! 最初からクライマックスだぜ!」

怪人どもを蹴散らす電王。

そして電王はアナザー電王に向かつてデンガツシャーソードモードで斬りつけた。

「おいおいおい！俺と同じ能力ならなんでこんなに弱いんだ？」

電王は挑発しながら攻撃する。

対するアナザー電王は小刀二つで応戦するが、やはりオリジナルには力が及ばない。

ましてや、中にいる泉の本心がなんとか生きているため、抑えることが出来ていたのだ。

「グア！」

「とりや！」

剣で斬りつけまくつたそのとき、誰かが乗り移つた。

「俺の強さにお前が泣いた！」

「あ、キンタロスだ。」

やつぱり海人は知つていました。

そして、キンタロスはデンガツシャーをアックスモードにして戦つて一回だけ斬りつけた。

はい、終了。

「キンちゃん終わりー！」

「早いやないかーい！」

リュウタロスが乗り移つたのだ。

デンガツシャーをガンモードにして撃ちまくる。

当たらないかと思いきや案外トリックキーなので蹴りまくる。

さつきの弾幕はフェイントだつたらしい。

「はい、次は僕の番。」

そこにウラタロスが乗り移つた。

デンガツシャーをロツドモードにして振り回し、攪乱させる。

そしてそのデンガツシャーを投げつけ、アナザー電王に六角形の青色の障壁のようなものが展開され、そこに電王ロツドフォームはデン

ライダー キックをかました。

「カフツ…」

「泉！」

泉は解放され、海人がすぐにとんでもいき、支えた。

「兄さん…、どう、して…」

「あらましは聞いた。つたく、お前の性格はまだ直つてなかつたのか

⋮

そして、変身を解除した良太郎がやつてきた。

「大丈夫？ 泉君。」

「貴方は…野上良太郎さん…。」

見ると、少し大人びたような顔をした良太郎がいたのだ。

「久しぶりだね、海人君。」

「ああ、良太郎。」

「え!? 兄さん、良太郎さんと知り合いだつたの!?!」

「ああ、同じ特異点同士だつたからな。」

そして、少し話をして

「それじゃ、また後で。」

「ああ、頼んだぞ。皆！ いくぞ！ これで最終決戦だ！」

「おう！」

「さて、僕達はどうしますが、先輩？」

「決まつてんだろう？ いくぞ。」

そしてモモタロスは良太郎を人目見て、前を向く。

「俺達も、忘れるかよ。⋮良太郎。」

そして、タワーに戻つてきた。

ドライブと王蛇はまだ戦つていたが、一回変身を解除した。

「やつとか、遅いな。」

「戦つていたかいがあつたけどな。」

二人とも、疲れは見えていない。

「え?! アーチャー! ? なんでここに! ?」

泉が困惑していた。

「バグルドライバーツヴァイを触媒にして召喚した。」

「あ、納得した。」

(いや…それで納得出来るのか…?)

アーチャーは内心で困惑していた。

「あれ? 兄さん、だつたらなんでセイバー やライダー、他にはイシュ

⋮

そこまで言つたらアーチャーが口を抑えてきた。

「やめてくれ。今は思い出したくない。…だが、懐かしいな。」

(もう、過去とは吹つ切れたつてことか。エミヤ…衛宮士郎。)

と、やつと気づいた海人だつた。

「とりあえず、このベルトさんは返そう。」

「なんで?」

そこまで聞くと、後ろから男達が現れたのだ。

「え?! 泊さん?! 神様?! ヒビキさん?! 津上さん?! 如月さん?! え?! ちょ、
ちよつと?!」

絶賛泉混乱中

しかもその間に小さい海人を救出したのだ。

その救出した人が…

「のせられちゃつた?」

九条桐矢だつた。

「はあ、皆早すぎだ…」

海人が笑いながら言う。

「特異点が一人いるだけでこうなるのか。まあ、面白いからいいか。」

しかし、面白くないのは秋人とティード達だつた。

「お前らはいつもいつも…俺の邪魔をしやがつて!」

「いや、お前が悪いからな。」

的確に突つ込む風間一夏。

「さて、そろそろ本気でいくか。」

アーチャー、やっぱり本気出していなかつた。

そして、ここに平成1号ライダー+ α がオリジナルではないが全員集まつた。

「いよいよか。」

「くううう！おのれ！」

ティードが気持ち悪そうな顔をしている。

「いいか？よく聞いとけ。仮面ライダーは人の思いが続くかぎり生き続ける。人の思いは歴史を作る。よく覚えておけ！」

海人がそつまとめる。

「皆！襲われてる民間人を助けにいって！海人とユウヤと戦兎と龍我と一夏一人は残つて！」

「了解！」

ルクスがそう指示する。

「おいおい、俺達に勝てると思うのか？」

「勝てるさ、皆がいればね。」

『ジオウ！』

ユウヤはライドウォッчиを取り出す。

「ああ、仲間は強いぞ？」

『クロム！』

時崎一夏もライドウォッчиを取り出す。

「さて、倒すぞ。」

「ああ。」

海人は腕のボタンを押し、バイクを呼び出す。

風間一夏とルクスはカードデッキを取り出す。

「私も、行きます！」

ヴィシュヌはビルドライバーとプライムローグフルボトルを取り出す。

「さあ、実験を始めようか。」

戦兎はフルフルラビットタンクボトルを取り出す。

龍我はクローズマグマナックルを取り出す。

『ボトルバーン！クローズマグマ！』

『MAX HAZARD ON！』

『ラビット&ラビット!』

ズツタン！』

「カーッ！ カーッ！ カーッ！ カーッ！ カーッ！ カーッ！」

んじや、いくぞ！」

『變身！』
y
o
u
r
e
a
d
y
?』

「ライダーライム！」

『仮面ライダー！ ジオウ！』

「仮面ライダー！ ケロム！」

エーイ!』

『大義晚成！プライムロード！ギリヤギリヤギリヤギリヤ

!

TO V E R T H E M A X I M U M P O W E R !

獣兎はテヒツトテヒツトアガリム
海人はリミツタ一解除状態のG3、

諸の御用事は、御隠北意のうえ、

「さて、私はどうしようか？」

「いや、お前はいつもので戦えばいいんじゃないか？」

海人はアーチャーと組んだようですが、

ばないのか?
(b y 駄作者)

「凛のときも名前で呼んでいたからな……つてか、駄作者は黙つてろ！」

「さつさと片付けるか。」

「そうだな。」

とりあえず海人とアーチャーは雑魚退治する。

「あ、そうだ。アーチャー。」

「なんだ？」

海人は戦いながらアーチャーに質問する。

「そいや、アルトリア達はどうなん?」

「…（汗）」

（なんかヤバイの思い出したか。）

「やつぱり、中身は土郎なんだな。」

「やはり知っていたのか。」

「俺も察しがいいからな。ま、とりあえず終わつたら飯でも作つてもらおうかな?」

「フツ、お安いご用だ。」

「サンキュー。…喰らえ! ファイヤー!」

「偽・螺旋剣!」

海人はケルベロスランチャ一、エミヤは螺旋剣をぶっぱなした。

「やつぱり雑魚が多いな!」

「戦兎! あれ使うか!」

あれとはクローズビルド缶のことである。

「今はいい! メタイ話、最後で使つた方が良いからな!」

「やつぱりかよ!」

「二人とも! 手を動かして!」

ルクスと戦兎と龍我も雑魚退治をしていた。

「決めるぞ!」

「ああ!」

「うん!」

ビルドはフルフルバスターにフェニックスフルボトルとガトリングフルボトルを入れ、クローズマグマはクローズマグマナックルを構え、龍騎はストライクベントのカードを取り出し、入れた。

『ジャストマッチデース! ジャストマッチブレイク!』

『ボルゲニックアタック！』

『ストライクベント』

三人の炎の攻撃が雑魚怪人に当たり、辺りの怪人どもが消滅した。

「ふう、次！」

一夏ズは外でアナザーダブルと交戦した。

『ジカンギレード！ケン！』

『ソードベント』

『ジカンゾイズ！カマ！』

それぞれの武器を召喚して戦った。

「これでも喰らえ！ゲイ・ボルク！なんつってな！」

ウイングランサーを投擲するナイト。

「ふつ、外れたな！」

しかし、アナザーダブルはかわす。

「だつて、~~圓~~だからな！」

『ソードベント』

ウイングランサーをもう一本取り出しました投擲する。

「ぐふ？」

「投影つて凄いなー。」

ナイトが呟く。

説明すると、アーチャーにカード投影してもらい、それをカードデッキにいれたのだ。

「はあ！」

更に足をエネルギー状のワニの口にしたプライムローグが噛みつく。

「くつ!?」

「やあああ！」

そして吹っ飛ばした。

その間に本音が来る。

「ふう、ついたー！」

「遅いぞ、のほほんさん。」

「ごめんごめん、ちょっと色々あつて。」

『ゲイツ！』

ライドウォッчиを取り出し、ジクウドライバーに装填する。

「へーんしーん！」

のほほんさんの独特の声が響く。

そして回す。

『ライダータイム！』

『仮面ライダーゲイツ！』

「のほほんさん！これを！」

「はいよ～！」

ダブルライドウォッчиを渡す。

『ダブル！』

「俺もだな！」

『ダブル！』

ユウヤもダブルライドウォッчиを取り出し装填する。

『仮面ライダー・ジオウ（ゲイツ）！アーマータイム！サイクロン！ジョーカー！ダーブールー！』

転送されたのは緑のロボットと紫のロボットだった。

それがゲイツとジオウの肩につき、緑のメモリと紫のメモリになつた。

「さあ、お前の罪を、教えて？」

「さあ、お前の罪を、数えろ！」

「のほほんさん、なんか違う…。」

「まあいいじゃん。」

そしてすぐに必殺技を発動する。

『ファニーツシユタイム！ダブル！』

すると肩についていたメモリがロボットになる。

しかし、こつからが違つたのだ。

ゲイツはロボットが足につき、緑と紫に光だし、Wの文字をつくる。ジオウは真ん中が真つ二つになる。

『マキシマム！タイムブレーク（バースト）！』

そして二人ともライダー・キックを放つた。

これを見てライダー組が一言。

「のほほんさん、絶対になんか違う気がする。」

もはやお約束なのかもしれない。

そしてアナザーダブルは倒した。

が、中にいた織斑千冬（？）は生きている。

その瞬間にトランスチームガンで逃げた。

「…アナザーダブルが倒されたか。」

「こちらもやるしかないな。秋人は下がつていろ。君が出る必要はない。何せ、アナザークウガで十分だからな。」

「最悪の場合は『あれ』になるか。」

「そうだな。」

ニヤリと笑つた秋人とティードだつた。

「秋人、やはり私にはアナザーダブルは駄目だつた。」

「予想してたよ、千冬姉。次のときは本領発揮してもらうよ。」

「ああ、そうさせてもらう。」

「おい、あれ！」

一夏が指を指す。

「ち、アナザークウガか。」

海人が反応する。

タワーから出てきたのはやはり最期のとりで、アナザークウガだつた。